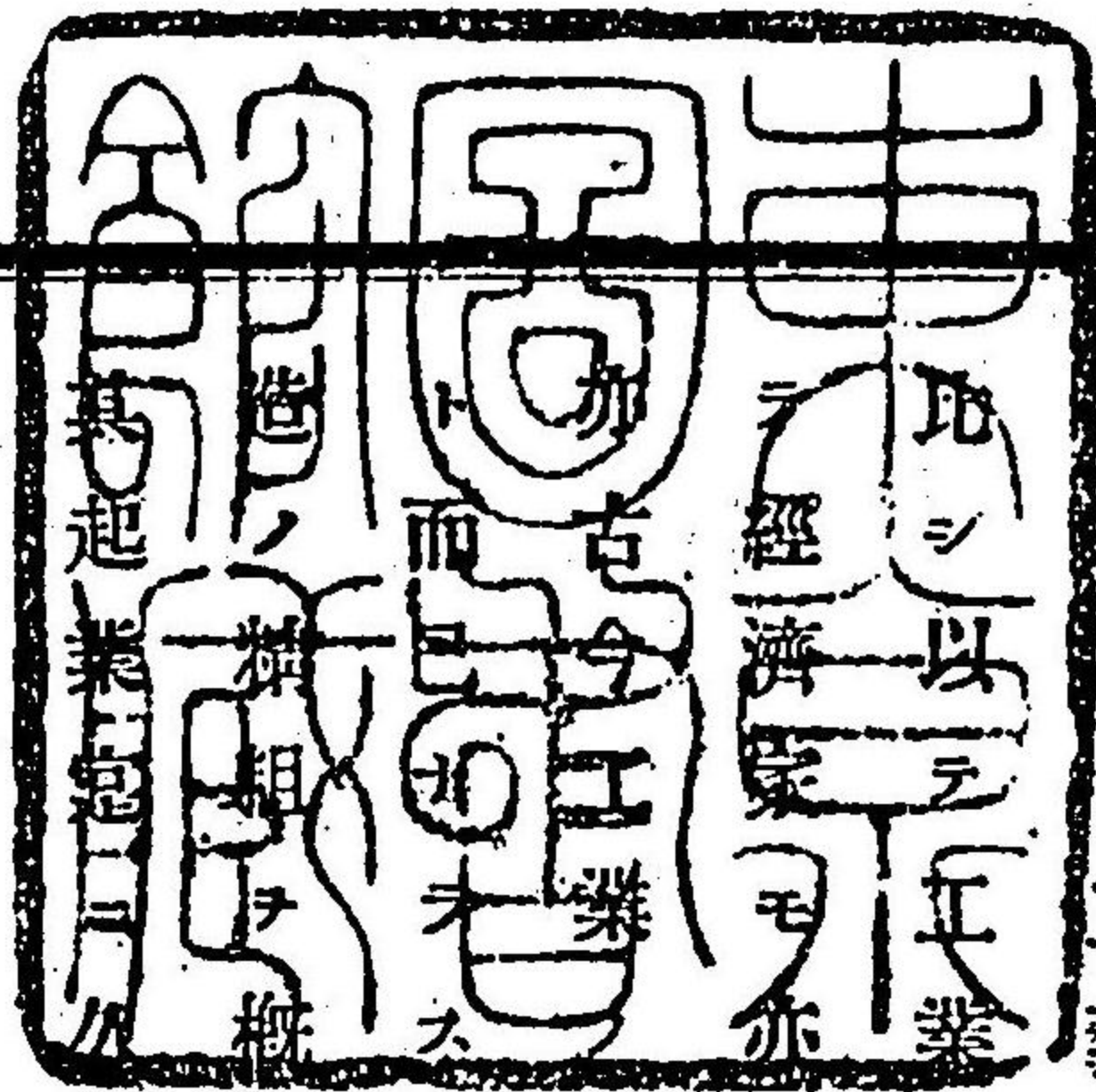


農務局、工務局編

府縣陶器沿革陶工傳統誌



緒言

凡今日ノ製品ヲ把テ之ヲ古昔ノ製品ニ較ヘ以テ製造ノ異同巧拙ヲ知ルハ工藝家ノ要件ナリ往昔ノ工業ヲ將テ之ヲ概近ノ工業ニ比シ以テ工業ノ興廢盛衰得失ヲ考フルハ經濟家ノ要事ナリ而シテ經濟家モ亦今古製造ノ異同巧拙ヲ知ラサル可カラス工藝家モ盛衰得失ヲ考ヘサル可カラス官ニ工藝家ト經濟家ト本邦ニ生レテ本邦人タルモノ豈本邦工業ノ隆夷製知セスシテ可ナランヤ我邦陶ニ銅ニ漆器ニ織物ニ其起業包ニハ然レモ其沿革及ヒ古今工人ノ履歷傳統ヲ詳記スルモノ世ニ幾何モナシ偶博物館ノ編纂ニ係レル工藝志料ノ出ルアルモノ固ヨリ簡約ヲ要スル書ナルヲ以テ今工ノ履歷ノ如キハ固ヨリ記載スルノ餘紙ナキモノナリ本年上野公園内ニ開設セラレ、繭絲織物陶漆器共進會ノ出品中陶器ノ如キハ全國ノ製陶場ヲ

網羅ズルモノニシテ剩スモ仍ホ幾所ニ過ス而シテ其沿革傳統ノ如キ各之ヲ解説ニ登記ス其間疎ナルアリ密ナルアルモ概シテ其一斑ヲ窺フニ足ソリ眞其審査報告編述ノ餘毫ヲ以テ之ヲ出品解説中ニ探リ密ナルモノハ之ヲ約シ疎ナルモノハ他書ニ就テ之ヲ審カニシ錯誤アルモノハ之ヲ訂シ工藝志料ニ詳悉スルモノハ之ヲ省キ併セテ眞ノ所考ヲ記シ纂メテ以テ別冊トナシ讀者ノ參照ニ供セントス然リト雖巨箇ハ是多ク其解説ニ據テスルモノニシテ未タ以テ誤謬ナキヲ保セス宜ク他日ヲ俟テ完璧ヲ求ム可キナリ讀者之ヲ諒セヨ

陶器報告員

勳五等

鹽田

眞

明治十八年十二月

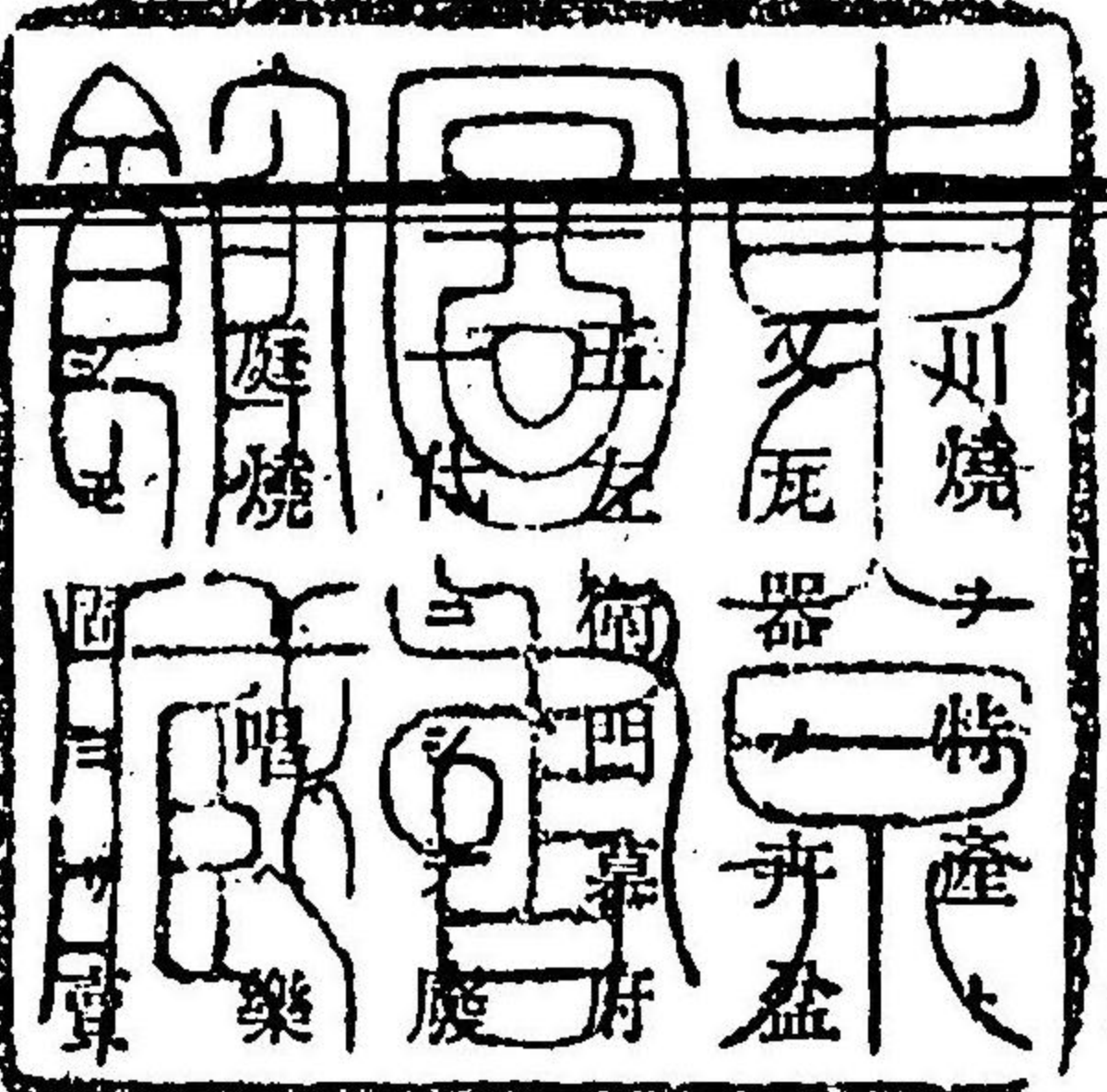
目次

第一	東京府	壹	丁	第二	京都府	六	丁
第三	大阪府	十九	丁	第四	神奈川縣	二十三	丁
第五	兵庫縣	二十四	丁	第六	長崎縣	三十一	丁
第七	新潟縣	三十五	丁	第八	埼玉縣	三十七	丁
第九	茨城縣	三十七	丁	第十	栃木縣	三十八	丁
第十一	三重縣	三十八	丁	第十二	愛知縣	四十四	丁
第十三	静岡縣	四十七	丁	第十四	滋賀縣	四十七	丁
第十五	岐阜縣	四十八	丁	第十六	福島縣	五十八	丁
第十七	岩手縣	六十一	丁	第十八	青森縣	六十二	丁
第十九	秋田縣	六十二	丁	第二十	山形縣	六十三	丁
第二十一	石川縣	六十四	丁	第二十二	福井縣	百四	丁
第二十三	島根縣	百五	丁	第二十四	鳥取縣	百十四	丁

第廿五	岡山縣	百十六丁	第廿六	廣島縣	百二十丁
第廿七	山口縣	百二十二丁	第廿八	徳島縣	百二十七丁
第廿九	高知縣	百二十八丁	第三十	愛媛縣	百三十丁
第三十一	福岡縣	百三十五丁	第三十二	佐賀縣	百三十八丁
第三十三	熊本縣	百五十八丁	第三十四	宮崎縣	百六十三丁
第三十五	鹿児島縣	百六十四丁	第三十六	沖繩縣	百八十二丁
第三十七	札幌縣	百八十五丁			

府縣陶器沿革陶工傳統誌

第一 東京府



從來東京ノ地ハ陶磁器ノ産出アルコトナク土器ハ僅ニ今戶燒隅田川燒ヲ特産トシ其他本所ニ樂燒ノ日用雜器ヲ業トスルモノ數家又瓦器一弁盆磁器ヲ製スル一二工人ノミ天明間伊勢ノ一商沼浪命ヲ奉シテ江戸ニ來リ小梅近傍ニ陶窯ヲ開クモ絶ス(後世之ヲ江戸萬古ト呼フ)此他水戸侯邸内ニ御庭燒及ヒ軟陶ニ後樂園ノ銘ヲ印シテ世ノ珍玩トナリ市場ニ之ヲ見ルコト罕ナリシ

文久三年福島政兵衛ト云モノ瀬戶傳ヲ以テ豊島郡箕輪村ナル龜山侯邸地ニ巨窯ヲ築キ盛ニ陶磁器ヲ製セシモ一年許ニシテ地所

ニ故障ヲ生シ遂ニ中廢セリ是ヲ東京磁器ノ鼻祖ト爲ス(明治十年
内國勸業博覽會報告書ニ詳説アリ)明治八年尾張瀬戸ノ陶王井上
良吉陶商島田惣兵衛ト謀リ淺草橋場町ニ築窯シ磁器ヲ製ス是ヲ
磁器近今ノ創始トス同十年小石川ニ江戸川製陶所ノ設立アリ歐
洲ノ法ニ倣ヒテ石膏型ヲ用井陶磁器及ヒ砂器ヲ創製ス全國ノ陶
工今日石膏型ヲ用井ルハ皆術ヲ茲ニ受クルナリ全十一年篠原能
孝小窯ヲ四ッ谷東信濃町ニ築キ亦磁器ヲ製ス全十五年六月農商
務省地質調査所ニ於テ獨乙人學士ワクネル氏ノ創意ニ係レル陶
窯ヲ牛込新小川町ニ築キ江戸川製陶所ノ工長加藤友太郎ヲシテ
之ヲ掌ラシム翌十六年六月終ニ友太郎ノ有ニ歸シ友玉園ト稱シ
陶磁器ヲ製セリ
是ヨリ先キ竹本隼太ハ明治ノ初年ニ於テ小石川高田豊川町ニ陶
窯ヲ築キ(元四ッ谷荒木町松平攝津守邸内ニ存在セル窯ヲ購フテ

此地ニ移セシナリ當時井上良吉ハ松平氏ノ召ニ應シ瀬戸ヨリ來
リテ築窯セリ故ニ竹本開窯ノ頃ハ良吉モ亦竹本ノ陶場ニ在リテ
工ヲ施シタリト云ヘリ)成瀬誠志ハ全四年芝増上寺山内ニ築窯シ
(初メ箱崎土州邸ニ築窯シテ薩摩陶ヲ製セシモ故アリテ休業シ尋
テ此窯ヲ開キシナリ)共ニ薩摩墨器ニ倣ヒ一種ノ画風ヲ彩描シテ
盛ニ輸出品タリシモ前年薩摩本地ノ陶器一時聲價ヲ失ヒシニ際
シ其餘響ヲ承テ損益相償ハサルモ能ク耐忍維持シ竹本窯ハ別ニ
交趾風ノ軟陶ヲ製セシニ恰モ時好ニ適シ竟ニ薩摩陶ヲ廢シテ單
ニ交趾釉ノ并盆水盤等ヲ造レリ尋テ歐洲風ノ圓窯ヲ築キ後又支
那ノ氷裂石器ヲ創作シ新案一種ノ小窯ヲ築キ研究措カス又辰砂
磁茶葉色釉等ノ諸器ヲ新製セリ成瀬窯ハ明治十四年祝融ノ災ニ
罹リ其地官有ニ歸セルヲ以テ再築ヲ得ス今單ニ薩摩本地ノ製器
ニ着面スルヲ業トス全十六年八月小野義臣ト云モノ橋場町ノ

私邸ニ一窯ヲ設ケ遊戯ヲ兼テ捏塑品ヲ製セントス江戸川製陶所
ノ工人タリシ加藤太兵衛此事ニ與リ築窯ス今製スル所ノモノハ
前年成瀬窯ノ製品ニ類セル彩画壺器ナリ
以上掲ケル所ハ東京府下陶窯ノ大概ニシテ此他一兩所ノ小窯ア
ルモ數年ナラスシテ休廢セルヲ以テ今之ヲ省ク其樂窯錦窯ヲ置
キテ獨自ノ營業ヲ爲ス陶工陶畫工ノ如キハ最モ多ク枚舉ニ遑ア
ラス
抑東京繪付ケト唱フルモノハ從前ニ在テハ細小ナル湯呑酒杯等
ニ金銀紺青其他ノ數彩ヲ用テ織描シ尺餘ノ錦窯ニ投シテ燒着ス
ルニ止リシモ明治六年澳國維納府萬國大博覽會開設ニ際シ其前
年博覽會事務局ニテ肥ノ有田三河内尾ノ瀬戸等ノ素磁ヲ購ヒ新
タニーノ繪所ヲ置キ菅蒼圃服部杏圃等ヲ主管トシ陶畫工ヲ召集
シテ鮮麗精美ナル彩畫ヲ描セシメ以テ出品ニ充ツ集ルモノ若干

人不破半次郎松本芳延岸雪圃小花和一樂飛驒高山ノ曾我德丸等
之カ魁タリ其畫大ヒニ外人ノ賞譽ヲ得タリ尋テ該會出張ノ松尾
儀助若井兼三郎等起立工商會社ヲ設立シ英國アレキサンドル、ヤ
パレース商會ノ依頼ヲ受ケ我邦新古ノ物産ヲ英國ニ輸送スルニ
會シ其七年東京繪付ノ陶磁器ヲ送り九年米國博覽會ノ舉アル全
會社ヨリ又之ヲ出陳シテ愈聲價ヲ專ニシ畫工ノ伎倆モ亦著シキ
進歩ヲ致セリ是ヲ東京繪付改進ノ始トス繪所ノ廢セラル、ヤ當
時在官ノ河原德立此ノ團結セル工人ノ解散ヲ惜ミ有志者ヲ德源
シテ之ヲ主管セシメ以テ其業ヲ繼キ名クルニ瓢池園ヲ以テシ第
一回第二回ノ内國勸業博覽會ニ出品シ其他佛國ニ豪洲ニ凡大博
覽會アル毎ニ出品ニ對シテ劇賞ヲ得タリ爾後此畫法次第ニ延蔓
シ東京横濱間之ニ據テ營業スル工商輩出スルニ至リ尋テ他ノ府
縣下ニモ波及スト雖モ其本宗タルハ即舊博覽會事務局ニシテ善

ク之ヲ繼クモノハ瓢池園ニアラスニテ誰ヤ
府下製陶ノ事概ス此ノ如シ而シテ其陶磁日用器皿ヲ製ルルモノ
ハ實ニ寡少ニシテ多クハ他ノ雜器ヲ造リ土器瓦器ハ庖厨用器其
他ノ雜器ト玩弄物トヲ製シ陶畫工ノ如キハ皆外國輸出ノ裝飾品
ニ描キ其內國需用器ハ僅ニ小茶具酒杯酒注ニ止マルナリ

第二 京都府

西京ノ地ニ瓦器ヲ製スルヲハ桓武天皇ノ延曆中平安城ノ碧瓦
ヲ造ルニ始マルト雖凡器物ヲ創製セシハ雄略天皇ノ朝伏見ニ
清器ヲ造リシヲ史ニ載セタリ而シテ施釉ノモノヲ京師ニ製シ
タルハ實ニ永正年間ニ在リ支那人阿米夜^{アミヤ}俗ニ飴屋ト記ス歸化シ
テ京ニ止マリ宗慶ト改稱シテ一種ノ器物ヲ製ス是ヲ樂代々ノ鼻
祖トス天正以後寛永ニ至ルマテ凡五十年其間點茶器ヲ造ルモノ
長治郎アリ正意アリ萬右衛門アリ源十郎宗伯茂右衛門新兵衛吉

兵衛道味江存等ノ數輩皆當時ノ名匠ト稱セラル寛永中野々村仁
清出テヨリ茶器雜器ヲ併セテ盛ニ製出シ京窯ノ名逾世ニ顯ハレ
遺法今ニ傳ヘテ清水燒トナリ粟田燒トナリ皆世人ノ珍賞スル所
トナル而シテ仁清乾山樂十二代ノ傳記及ヒ木米永樂ノ傳ノ如キ
ハ既ニ人口ニ膾炙シ且工藝志料及ヒ第一回內國勸業博覽會報告
書ニ畧述シアルヲ以テ今之ヲ省キ現在本回ニ出品アル各家ニ就
テ其傳統ヲ左ニ掲ク可シ

高橋道八 曾祖父空中ハ伊勢龜山藩士高橋八郎太夫ノ次男ニシ
テ周平光重ト云寶曆中京都粟田ニ寓シ陶業ヲ開キ兼テ竹木ノ彫
刻ヲ善クシ自カラ號シテ松風亭空中ト云フ元文五年ニ生レ文化
元年四月廿六日卒ス歳六十五是ヲ初代トス二代道八文化八年五
條阪ニ移リ和漢ノ古陶器ヲ摹シ又捏像ヲ製ス文政九年仁和寺宮
ヨリ法橋及仁阿ノ字ヲ賜フ因テ仁阿彌ト號ス文政ノ末三代道八

ト謀リ白磁青華磁器ヲ創製シ名聲遠邇ニ播ス天保十三年伏見桃
山ニ遁レ別窯ヲ築キ桃山燒ヲ製ス此器タル各色ノ彩料ヲ用ヰテ
釉上釉下ニ淺深ノボカシ及ヒ拔畫ヲ出タス當時其比類ナキヲ以
テ世ノ珍賞スル所トナル三代道八亦家聲ヲ墜サス明治二年鍋島
藩ノ召ニ應シ肥前有田ニ赴キテ京窯ヲ築キ彩畫ヲ教ウ有田ノ地
タル古來彩畫磁器ヲ製スルモノハ赤畫町ニ住スル陶工ニ限リ他
所ノモノ之ヲ造ルヲ得ス道八ノ至ルヤ大ニ之ヲ開ク時恰モ廢藩
置縣ニ際シ舊制頓ニ解ケ遂ニ一般ニ彩畫ヲ製スルニ至レリ今工
道八ヲ四代ト爲ス而シテ其陶磁ノ土石ハ肥前天草近江信樂ニ取
ルト云

清風與平 初代與平ハ梅實ト號ス加賀金澤ノ書肆保田彌平ノ男
ナリ享和十年ニ生レ文久元年ニ卒ス文政中京都ニ來リ二代道八
ノ門ニ入り陶磁ノ業ヲ修ム弘化元年五條橋東五丁目ニ開業シ師
傳ニ習フテ和漢陶磁器及樂燒ノ床飾等ヲ造リ後專ラ青磁青華磁
器ノ酒茶具及ヒ金襴彩畫ノ諸器ヲ製セリ當時貫名海屋小田海仙
ト交リ深キヲ以テ二氏ト合作スル所ノ器物今尙ホ家ニ藏スト云
二代與平五溪ト號ス弘化二年ニ生レ明治十一年ニ卒ス父業ヲ承
ケ專ラ各種磁器ヲ製ス又新タニ白磁浮起紋ノ諸器ヲ造ル五溪嗣
ナシ妹ノ子ヲ養ヒ没スルニ至テ嗣トナス甫メテ八歳之ヲ三代與
平(即チ平今)トナス梅溪ト號ス年幼ナルヲ以テ妹夫平橘之ヲ助ケテ
陶事ヲ督ス平橘ハ播磨國大鹽村岡田得風ノ男ナリ慶應二年二代
與平ニ就キ陶業ヲ修メ畫ヲ田能村小虎ニ學フ明治五年與平其妹
ヲ以テ之ニ配シ家ヲ分ツテ清山ト稱ス善シ清風ノ陶法ヲ得タリ
ト而シテ其土石ハ肥ノ天草近江ノ信樂黃瀬山城ノ日ノ岡々崎ニ
取ルト云

幹山傳七 尾張瀬戸ノ人文久元年上京シ陶窯ヲ清水ニ築キ青華

02

磁器ヲ製セリ明治ノ初メ圓窯ヲ築造ス蓋シ京師圓窯ノ嚆矢ナリ
 且磁器ノ形大ナルモノヲ造ルモ該地ニ在テハ之ヲ始メトス明治
 六年澳國維納府萬國大博覽會ノ舉アルニ際シ其出品ニ美麗ナル
 彩畫ヲ着セリ蓋シ京師ニ於テ西洋彩具ヲ多用シテ艶美ノ花卉翎
 毛ヲ描ケルハ殊ニ此工ノ長所ナリト云フ而シテ土石ハ高橋道八
 ニ同シ
 清水六兵衛 初代六兵衛愚齋ト號ス幼名栗太郎攝津國島上郡東
 五百住村ノ農古藤六左衛門ノ男ナリ寛延中五條阪ノ陶工清兵衛
 ニ就キ業ヲ受ケ明和中五條ニ開窯シ專ラ土燒ノ雅器ヲ製セリ曾
 テ妙法院宮ノ爲メニ其園ニ就テ黑樂ノ茶碗ヲ製ス宮賜フニ六目
 印ヲ以テス爾來茶碗ヲ製スル毎ニ此ヲ捺シ又天龍寺僧桂州ノ手
 書ニ係レル六角内ニ清字ノ印大小二顆ヲ押スモノアリ又きよ水
 ノ印ハ其師清兵衛ノ授クル所トナス當時應舉吳春ヲ友トシ二氏

揮毫ノ器物多ク世ニ存セリ寛政十一年卒ス年六十二嗣子幼ナル
 ナ以テ數年休業ス二代六兵衛靜齋ト號ス文化八年起業シ晩ニ青
 華磁器ヲ製出ス其銘印ハ初代ノ印ニ外廓一重ヲ加フルモノナリ
 万延元年卒ス年七十一三代六兵衛祥雲ト號ス天保九年父業ヲ繼
 ギ盛シニ青華青磁赤繪ノ諸磁ヲ製ス頗ル巧手ノ名アリ嘉永六年
 土燒太燈籠壹基ヲ製シ今尙ホ西京 禁苑中ニ存ス其銘印ハ初代
 ノモノニ類シ或ハ卍字ヲ以テ其名ヲ刻セリ共ニ大德寺大綱ノ書
 ト云明治十六年六月卒ス年六十二今工六兵衛ハ其四代ナリ祥麟
 ト號ス大德寺牧宗書六稜内清字ノ印大小三個草字ノ六兵衛及ヒ
 清六六居等ノ印ヲ記號トス其陶磁及ヒ樂燒ノ土石ハ天草信樂ニ
 購ヒ又洛外日ノ岡清水岡崎ノ土ヲ用ウト云
 眞清水壽太郎 初代藏六ハ山城國乙訓郡久我村六孫王庄屋清水
 源右衛門ノ三男ニシテ初メ田三郎ト云天保五年叔父五條阪ノ陶

工和氣龜亭ニ就學シ弘化元年五條ニ開業シ名ヲ藏六ト改ム蓋シ
 師號龜ノ字ニ因スルナリ又妙法院宮ノ命ニ依リ氏ヲ改メテ眞清
 水ト稱シ努メテ古器青磁ヲ研究ス元治元年千宗室獻茶ノ典ヲ舉
 行スルヤ爲ニ茶壺茶盃ヲ製セリ宗室贈ルニ宗岳ノ號ヲ以テス明
 治十年六月卒ス年五十六今工壽太郎ハ其二代ナリ造ル所ノ青磁
 器ハ原石釉料共ニ天草ノモヲ取リ信樂土ヲ調和ス又本地岡崎
 ノ赤土清水ノ白土ヲ用ウト云

和氣平吉 四世皆龜亭ト號ス初代平吉寛延元年地ヲ五條阪ニト
 シテ一窯ヲ築キ土燒ヲ業トス三代ニ至リ文政間磁器ヲ製ス當時
 五條ニ青華器尙ホ罕ナルヲ以テ大ニ聲價ヲ得タリ今工用井ル所
 ノ土石ハ高橋道八等ニ同シト云

小川卯之助 初代久右衛門ハ加賀國能美郡若杉村ノ人文政中諸
 州ノ陶場ニ游ヒ工事ヲ研究ス最モ築窯ヲ善クス天保十年有志者

ノ囑ニ因リ大阪天滿源八町樋ノ口ニ築窯ス弘化四年一條家ノ召
 ニ應シテ其菜地山城國相樂郡鹿脊山隱レ谷ニ新窯ヲ興シ業ヲ衆
 工ニ授ク公之ニ永世祿ヲ與フ明治三年祿ヲ還シ和歌山開物場ノ
 招キニ應シ紀伊有田郡男山ニ築窯シテ工人ヲ教導ス全十年石川
 縣ノ命ニ因リ其縣下ニ築窯シ十一年西京ニ出テ二代小川鉄之助
 ニ謀テ陶磁ノ業ヲ五條坂ニ起ス今工卯之助ハ其後ナリ王樹園文
 齋ト號スト云

尾形吉三郎 初代周平ハ京師ノ工人ニシテ製陶ノ術ニ精シ曾テ
 淡路國賀集珉平ニ教ヘテ淡路燒ヲ創起セシメ且親カラ淡路ニ往
 テ大ニ其業ヲ開ク二代周平父業ヲ繼キ兼テ磁器ヲ製ス今工吉三
 郎明治ノ初亦淡路ニ往キ全十年歸京スト云

帶山與兵衛 初代高橋藤九郎ハ近江佐々木ノ遺臣ナリト延寶中
 京都粟田東町ニ住シ陶業ヲ創始シ帶山ト稱ス粟田山ヲ帶フルノ

義ニ取ルト云フ二代與兵衛享保中末茶器ヲ製シ三代與兵衛寶曆
 二年ニ業ヲ繼キ酒茶器ヲ製セリ四代與兵衛ハ天明中業ヲ承ケ寛
 政年間別ニ陶質ノ瑠璃地及ヒ堆朱様ノ諸器ヲ作り五代與兵衛ハ
 文化中陶質青瓷ヲ創製ス此時ニ至ツテ始メテ禁中ノ調度ヲ製
 進シ爾后例シテ之ヲ納ム六代與右衛門天保中彩面陶器ヲ製ス之
 ヲ粟田彩画ノ稱メトス當時景文豊彦等ニ交ハリ其揮毫ノ器物今
 尙ホ世ニ多シ七代與兵衛ハ嘉永ニ八代與兵衛ハ文久ニ業ヲ繼キ
 今工ニ至リ九代トス
 本工所製ノ粟田陶器ハ原土ヲ近江ノ信樂下田山城ノ大日山(大日
 交)泉涌寺(並土)日ノ岡及ヒ攝津ノ有馬(ナマゼ土)ニ取り釉料ハ肥ノ
 天草及ヒ近江ノ黄瀬ニ購フト云
 錦光山宗兵衛 初代小林源右衛門家號ヲ鍵屋ト云正保二年陶窯
 ヲ粟田ニ築キ錦光山ト稱ス後百年三代茂兵衛延享中箕裘ヲ繼キ

寶曆五年將軍徳川家重命シテ飲料ノ茶碗ヲ試製セシメ之ヲ進ム
 爾後常年調製スルヲ例トス四代五代共ニ喜兵衛ト稱ス六代宗兵
 衛大ニ外國輸出品ヲ製ス今工宗兵衛ハ七代ナリ而シテ用土ハ概
 子帶山ニ同シトス
 丹山陸郎 父青海嘉永四年五月粟田中ノ町ニ製磁ノ業ヲ開ク全
 六年青蓮院宮陶器物産會所ヲ設ルクニ暨ヒテ特ニ粟田墨器ノ專
 業ヲ命シ陶磁ヲ兼製ス元治二年長子芳太郎業ヲ承ケ慶應二年今
 工陸郎又之ヲ繼ク陸郎ハ青海ノ第二子ナリ青海退隱ノ後猶其業
 ヲ助ケ以テ今ニ至ルト云其用石ハ肥ノ天草産攝州有馬郡生瀬産
 近江ノ信樂等ニ取リ又粘土ハ山城近江美濃ノ産十數種ヲ用ウト云
 中村政五郎ハ仁清ノ後ナリ元祿年間先代海老屋彌兵衛五條阪ニ
 移リ製陶ヲ業トス天明中今ノ清水ニ轉スト云原土ハ信樂及ヒ清
 水土ヲ用ウ

澤村東左ハ三代清水六兵衛ノ門人ニシテ明治九年五條東五丁目
 ニ開業ス原土ハ清水岡崎及ヒ信樂ニ取リ專ラ酒茶器ヲ製セリ
 淺見五郎助ハ教ヲ二代三代ノ清水六兵衛ニ受ケ嘉永五年五條東
 四丁目ニ開業ス土石ハ天草信樂京師ノモノヲ用井專ラ酒茶器ヲ
 製ス自ラ號シテ祥瑞五郎助ト云フ抑祥瑞ハ本邦著名ノ陶工ニシ
 テ青華磁器ノ鼻祖ト尊崇スル五郎太輔ノ號ナレハ陶業者タルモ
 ノ宜ク憚リ避ク可キ事ナルニ今巳レ五郎ノ字アルニ因シ之ヲ冒
 スハ亦思ハサルノ甚シキモノナラスヤ
 山本辰之助ハ中村政五郎ヨリ傳習シ元治元年五條東五丁目ニ開
 業シ陶磁ヲ兼製ス自カラ號シテ龍山ト云フ其用土ハ淺見五郎助
 ニ同シ
 奥村安太郎ハ明治九年下京區門脇町ニ開業シ東山ト號シテ專ラ
 仁清乾山等ノ中世陶器ヲ摸倣ス

三村源次郎ハ父ヲ源兵衛ト云文化中粟田陶工寶山文造ニ就キ業
 ヲ受ケ明治七年源次郎父ニ謀テ開業ス
 名村久次郎ノ開業ハ明治九年ニアリ其父梅吉モ亦寶山ノ門人ナ
 リト云
 安藝善吉ハ明治八年清水ニ開業シ乾山様ノ陶器ヲ製セリ
 山城國相樂郡北大河原村村田要造ハ明治十三年ニ起工シ伊賀丸
 柱燒ノ土瓶ヲ摸製シ頗ル困苦ヲ經テ製作價直遂ニ丸柱ノモノト
 相頡頑スルニ至レリ
 全郡鹿脊山村森本助左衛門ハ文政十年其祖父助左衛門宅地近傍
 ニ瓦土ヲ發見シ大和五條村ノ陶工ヲ雇ヒ製陶スルニ始マリ遂ニ
 鹿脊山燒ノ名ヲ播スルニ至レリ而シテ其製品ハ土瓶土鍋ヲ專ラ
 ニシ土瓶ノ如キハ頗ル世用ノ廣キヲ致セリ
 全國紀伊郡伏見ノ雲形燒ハ文祿二年初代平田平右衛門全村瓦町

〇
ニ瓦蓋ヲ製スルニ創リ寛永十九年居テ今ノ地即チ伏見街道直達
橋九丁目ニ移シ爾後累代瓦蓋ヲ專業トス 禁中供御ノモノハ皆
此家ノ調製ニ係レリト云フ今ノ平右衛門ニ至ツテ九代ナリ其原
土ハ全郡深草村深草山ノモノヲ用ウ
全國久世郡宇治郷山田ノ松林松之助ノ製スル所朝日焼ハ其祖父
長兵衛慶應元年ノ開業ニ係リ今工其業ヲ繼クト云フ相傳フ朝日
焼ハ安貞年間加藤四郎左衛門景正ノ創起ニ係ルト然レトモ今之
ヲ徵ス可キモノナシ但景正宋ヨリ歸ルノ後京畿ノ諸村ニ陶窯ヲ
築キタルヲ明カナレハ或ハ此地ニ試焼セシモ亦未ク知ル可カラ
ス正保中小堀政一字治ノ工人奥村藤作ニ命シテ築窯セシモノ朝
日山下ニアリテ朝日山ノ土ヲ用キ末茶碗ヲ作ル今當ニ是ヲ以テ
朝日焼ノ創始トナスヘシ藤作二代ニシテ絶ユ長兵衛其久廢ヲ惜
ニ公家庭田某ニ建議シテ遂ニ再興スルニ至レリ明治十二年 眞此

塲ニ遊ヒテ其製器ヲ檢セシコ其技往昔ノ巧ニ及ハス土質モ亦異
ナルヲ以テ之ヲ長兵衛ニ質ス曰ク舊時採ル所ノ土今之ヲ堀鑿ス
ルヲ得ス全郷藁田ノ土ヲ用ウト云

第三 大阪府

攝津國島上郡古曾部村ニ産スル古曾部焼ハ往昔僧能因肥後ノ古
曾部ヨリ茲ニ來リ手捏セルヲ始トスルノ説アルモ其確證ヲ得ル
ニ由ナシ全村五十嵐信平ノ祖信平寛政三年四月陶業ヲ再興シ其
二世信平ニ至リ各地ノ製器ヲ摸倣シテ稍觀ル可キモノアリ三世
即今ノ信平ハ四五年前釉藥ノ製作ヲ一變シ支那辰砂焼ニ摸擬セ
ル小器ヲ出ス時ニ世上文人裝飾ノ行ハルニ際シ頻ニ文房ノ諸
器ヲ製セリト雖モ支那ノ辰砂焼ト其質全ク異ナリ彼レハ石器ナ
レモ此ハ信樂土ニ全郡眞上村ノ土ヲ和合セシ粗糲ノ坯質ニシテ
單ニ廉價ト云ノミニ止マリ世ノ愛賞ヲ博スヘキモノナシ而シテ

即今唯五十嵐ノ一窯アルノミ
 全郡櫻井村ノ製品ハ稍古曾部ニ類シテ粗糙ノ陶器ナリ初代清水
 寛造京都ノ陶工尾形周平ノ傳ヲ受ケ天明二年ニ開窯シ二代ヲ太
 左衛門ト云ヒ三代ハ今ノ太十郎ナリ本村此一窯アリテ地方ノ用
 ニ供スルノミ
 和泉國塚區吾妻橋通ノ陶窯ハ安政三年安村淺次郎ノ開ク所ニシ
 テ安村數馬之ヲ受ケ又吉田正平ト云モノ此窯ニ就テ製造セリ而
 シテ其開窯ノ初メヨリ安村善十郎之ヲ總管シ近來菱古山ト改稱
 スト云フ而シテ原土ハ阿部野其他ノ粗土ヲ混用シテ質トナシ攝
 州生瀬ノ土及ヒ染工ノ藍澱ヲ調和シテ中藥トシ天草石ニ多量ノ
 灰ヲ和シタル表釉ヲ施セリ此地亦此一窯アルノミ
 因ニ云フ大坂西區江戸堀ノ陶商ニ樋口平兵衛ト云モノアリ家
 名ヲ菱屋ト稱シ十四世ノ陶商タルヲ以テ別號菱古ト云フ明治

ノ初年支那陶ノ盛ニ輸入スルヲ愛ヒ資金ヲ捐テ大和五條村ノ窯
 ニ支那風ノ雅器ヲ製セシメシニ當時甚ク盛價ヲ得テ爲メニ輸
 入ヲ減ズルニ至ル又其製器菱古ノ印ヲ捺スルヲ以テ人呼テ菱
 古燒ト云ヘリ今ハ塚ノ安村善十郎ニ托シ之ヲ製セシム亦菱古
 ノ印ヲ捺スト云フ本文菱古山ト稱スルモ蓋シ之ニ原スルナリ
 全國大鳥郡淺村ニ土器ヲ製スルヲ其來ル尙シ或ハ云フ古ヘ僧行
 基陶車ノ法ヲ土人ニ教フト未タ其果シテ然ルヤ否ヲ知ラス天正
 年間工人點茶家用ノ砂鍋ヲ造ル(砂鍋トハ爐灰ヲ盛ルノ器)無釉ノ
 土器ニシテ輕鬆雪白ナリ今ニ至ツテ砂鍋ハ淺燒ヲ第一トス延寶
 年間上田吉左衛門雜種ノ土器及燒鹽ヲ製シ一種ノ產物トナリ文
 政中五代ノ孫吉左衛門始テ交趾風ノ薄滑釉ヲ施シ自カラ御室燒
 ト唱フ(京都ノ御室燒トハ陶質自ラ異リ淡黃色紅褐色淺深綠色ノ
 モノアリ稍淡路燒ニ類シテ之ニ比スレハ頗ル軟弱ナル一種ノ樂

燒ナリ世稱シテ淺燒ト云フ概近上田氏絶へ砂鍋及ヒ製釉ノ法モ亦將ニ其傳ヲ失セントス
 全村津鹽吉兵衛此陶法ヲ繼キ營業セリト雖モ世代ノ變換ニ從テ漸次其法ヲ失ヒ頗ル退歩ヲ觀ルニ至ル
 赤膚燒ハ大和國添下郡五條村ニ産ス正保年間ニ在テハ添下郡々山ニ於テ製セリ當時京師ノ陶工野々村仁清來テ窯ヲ開キ法ヲ土人ニ傳フ故ニ其製品仁清燒ニ類スルモノアリ既ニシテ廢窯シ寶曆十一年郡山藩主柳澤甲斐守命シテ今ノ五條村ニ開窯シ多ク酒器ヲ製セシム土質白ク之ニ灰白釉ヲ製フ畧松本萩ノ所製ニ類シ裏面ニ赤膚山又赤ハタノ印ヲ壓捺ス今工山口房次郎製品モ亦此種類ナリト雖モ形状佳趣ニ乏ク舊製ニ如カス
 此他大坂南區及難波今宮等ニ數窯アリテ地方日用ノ器皿ヲ製スルト雖モ本會ニ出品ナキヲ以テ茲ニ舉ケス

因ニ云難波燒ハ延寶年間ニ開窯シ黒谷ノ土ヲ用ヰテ雜器ヲ製スルニ始ルト
 第四 神奈川縣

武藏國久良岐郡太田村ノ陶窯ハ明治四年ニ創築ス其窯主宮川香山ハ元京都清水ノ陶工ニシテ祇園社南眞葛原ニ住シ彼ノ有名ナル香齋ノ陶法ヲ繼キ最青華磁器ニ巧ナリシカ横濱ノ商鈴木保兵衛ノ懇懇ニ因リ移テ本村ニ築窯シ初メ土ヲ薩摩ニ採リ細瑩錦彩ノ器物ヲ製ス而シテ商賈求需ノ品常ニ己レノ技術ヲ盡ス能ハサルヲ慨セリ明治七年眞往テ其製器ヲ檢ス意ニ適スルモノ甚稀ナリ乃チ之ニ謂テ云ク凡ソ美名ヲ四方ニ播セント欲セハ製スル所其技術ヲ盡サハル可カラズ奚ソ其美術ノ思想ヲ枉ケテ空ク醜狀厭フヘキ雜品ヲ製スルヲ爲サン若シ美術ノ巧ヲ以テセハ一皿五拾圓百圓ト云フモ亦必販路ニ苦ムコアル可カラスト香山茲ニ

奮起シ爾後精ヲ凝シテ一種ノ磁器ヲ創製ス此製彼ノ佛國磁器ノ
 生花ヲ模造セルモノニ同シク草木ノ枝葉花莖禽蟲ノ羽毛嘴脚ノ
 如キ實ニ精密緻緻ニシテ具ニ逼レルモノヲ造リ之ヲ花瓶飾壺等
 ニ裝着ス明治九年米國ノ大博覽會ヲ始トシ當時其巧妙世上ニ當
 ヲトシテ輸出亦夥ク敢テ價直ノ高低ヲ問サルニ至レリ然ルニ香
 山其伎倆ニ任セ形ヲ製シ工ヲ施ス動モスレハ奇怪ニ涉リ氣韵ヲ
 失ヒ且極テ危險ニシテ觸レ難ク運搬シ能ハサルモノ往々之アリ
 終ニ實用ニ適セサルノ譏ヲ來タシ輸出ノ途ヲ狹隘ナラシムルニ
 至ル寔ニ惜ムヘシ近來現業ヲ嗣子某ニ讓リ自己ハ其好ム所ノ和
 漢古陶磁ヲ摸シテ酒茶器等ヲ製シ略備ハラサルナシ人ヲシテ其
 多能ニ驚カシム而シテ本縣モ亦此一窠アルノミ

第五 兵庫縣

三田青磁ハ攝津國有馬郡三輪村ニ産ス天明八年三田町ノ商神田

宗兵衛陶窯十二ヲ三輪村字狗ヶ鼻ニ築キ京都肥前等ノ工人ヲ備
 ヒ粗糙ナル青華磁器ヲ製セリ享和ノ初年全郡香下村砥石谷ニ青
 磁適合ノ釉料ヲ發見シ支那古様ニ擬シテ青磁ヲ創製ス其名頗ニ
 四方ニ傳播シ竟ニ本邦青磁中ノ第一位ヲ占領スルニ至レリ爾後
 窯ヲ増シ傍ラ青華磁器吳洲風ノ陶器ヲ製シ頗ル盛大ヲ極ム丹波
 龜山ニ青磁ヲ創製スルモ亦此宗兵衛トス文政ノ末宗兵衛死シ其
 業漸ク衰ヘ既ニ廢セントスルニ當リ同町向井喜太夫此窯ヲ購ヒ
 維持セシモ嘉永ノ末年又廢絶セリ同町田中利右衛門之ヲ慨歎シ
 又其窯ヲ購求修理シ安政ノ初年再ヒ青磁ヲ製スルヲ得タリ然レ
 尺其技昔時ノ巧ニ及ハス
 志手原燒ハ全郡志手原村ニ産ス寶曆明和ノ際小西金兵衛ノ創始
 ニ係リ子孫繼續以テ今日ニ至ル前年ニ在テハ頗ル繁盛ニシテ數
 十名ノ陶工ヲ備使シ餘潤園村ニ及ヒシモ近今ニ至リ阪路頗ル縮

少スト云フ本村小西藤兵衛其弟小西五郎右衛門ノ製スル赤繪ノ諸器ハ土ヲ其村ニ取リ釉料ヲ全郡中野村ニ取ル陶質安南ノ粗器ニ類セリ

神戸港田村又七彩釉ノ陶器ハ土ヲ淡路ノ由良浦ニ取リ紀州焼ト一般ナル淡青ノ釉料ヲ襲フ明治十四年西洋形三層ノ堅釜ヲ築キ試焼經驗セシモ遂ニ好結果ヲ得ス普通ノ登リ窯ニ改メ始テ利益ヲ觀ルニ至レリト云フ其製タル淡路焼ニ類シテ小壘アリ地質稍堅シ

舞子焼明石焼安南焼其他ノ數種ハ播磨國明石郡大藏谷村三國茂三郎ノ製スル所ナリ該地往昔明石焼朝霧焼はのく焼ナト稱スルモノアリシモ其法傳ハラズ茂三郎ノ祖父久八ハ固ト狩口谷ニ播盆ヲ業トス文化七年志ヲ起シテ新窯ヲ今ノ地ニ築キ初メテ黒釉ノ陶器ヲ製シ文政三年鉄砂ヲ調和シテ舞子焼ヲ創製ス其子彌

吉文久二年安南焼ノ試験ヲ甘結シテ土瓶鍋等ノ日用器ヲ製シ大ニ販路ヲ開ケリト云

魚住焼ハ全郡中尾村西海音助ノ製スル所茶具雜器ヲ專ラトス中尾村ハ舊時魚住ノ莊ナルヲ以テ其陶ニ名シト云近時ノ創製ニシテ未ダ完全ヲ得ズ

朝霧焼ハ全郡松蔭新田村寺岡源治郎ノ製スル赤焼ニシテ近製ニ係ル全村藤井清左衛門所製ノ安南焼朝鮮焼ト稱スルモノモ亦同シ

全郡金崎村藤井鶴藏ノ紫泥焼ハ原土ヲ松蔭新田村ニ取ル地質常滑ニ製スルモノニ類ス

但馬國養父郡八鹿村神田山ノ日用陶器ハ植木清兵衛ノ製スル所原土ヲ全村ニ取ルト云

立杭焼ハ丹波國多紀郡上下立杭村釜屋村等ニ製スル所トス共ニ

其創始ヲ詳カニセスト雖正今傳ヘテ古丹波ト唱フル砂器ハ蓋シ
 永祿天正間ノ製ナル可シ寛永ニ至テ製スル所ノ末茶器ハ今日製
 スル器物ノ釉色ニ彷彿タルモノアリ上立杭村清水鶴吉ノ祖父長
 右衛門曾テ壺鉢類ヲ製シ山長ノ記銘ヲ刻セリ就中臘脂製用ノ大
 壺ハ殊ニ世ノ激賞ヲ得テ偽造スルモノアルニ至ルト亦其質ノ堅
 實ニシテ此ノ如キ用途ノ器物ニハ必適タリ又下立杭村正元米藏
 五代前ノ祖直作ハ製器ニ直作ノ記銘ヲ刻シ爾後尙之ヲ用ウト云
 フ方今ノ製器ハ釉色紫褐ニシテ光澤アリ愛ス可シ
 淡路燒ハ淡路國三原郡稻田村ノ特産ナリ抑淡路燒ハ賀集珉平ノ
 創起スル所珉平初名ヲ豐之助ト云フ世々稻田村ニ家シ醬油醸造
 ナ業トシ傍ラ國書ニ通シ茶事ヲ善クス所有ノ地十八町アリ常ニ
 云フ淡路ハ四方海ヲ環シ地狹ク人多シ是レ窮民ノ多キ所以ナリ
 之ヲ救フノ術ハ特リ海産ヲ盛ニスルコアリト乃チ二百六七十人

ノ漁夫ヲ役シ近海ニ漁ス得失相償ハス遂ニ泉州塚ニ到リ大綱ヲ
 作り益漁業ヲ務ム偶京師ノ陶工尾形周平ニ逢ヒ製陶ノ事ヲ談ス
 後由良浦ニ至ルノ歸途池ノ内村今ノ城戸村即原ヲ過キ白土山麓
 ニ至テ周平ノ話ヲ憶ヒ試ニ白土ヲ取り歸ツテ樂燒ノ茶碗ヲ製シ
 數十個ヲ得タリ又黃南京ヲ摸サント欲スルモ能クセス而ルニ漁
 業ハ益損失多キヲ以テ意ヲ決シテ之ヲ廢シ尙ホ樂陶ヲ燒キ稍堅
 硬ナル器ヲ製スルニ至ル文政十二年釀醬ノ本業ヲ廢シ專ラ製陶
 ニ從事シテ黃色青色ノ釉ヲ發明ス天保五年京師ニ赴キ周平ヲ伴
 ヒ歸リ共ニ陶事ヲ研究シ二年ニシテ周平去ル珉平勉メテ止マズ
 所有ノ地ヲ賣テ資金ニ充ツ親族勇左衛門其篤志ヲ感シ爲メニ十
 六町ノ地ヲ購フテ之ヲ與フ又之ヲ賣ル勇左衛門更ニ貸スニ資金
 ナ以テス時ニ珉平ノ弟恒左衛門ナルモノ村長タリ亦家産ヲ抛テ
 其業ヲ資シ珉平竟ニ恒左衛門ニ燒窯ヲ托シ自ラ工事ヲ督シテ甞

勉措カス天保九年茶褐釉鬱白釉ヲ創製ス同十三年藩主峰須賀氏
 之ヲ聞キ屢親臨督勵シ資ヲ出シテ官窯ヲ築キ珉平ヲシテ統督セ
 シム同十四年ニ支那青華陶画高麗及ヒ艶黒ノ諸釉ヲ發明ス此時
 ニ當リテ初製ノ黄釉陶遠近ニ開ケ一時収入ノ價金ハ近隣十一村
 ノ収稔米價ト相埒シカリシト云フ安政三年恒左衛門死ス文久二
 年珉平病アリ業ヲ恒左衛門ノ子三平ニ托ス慶應三年三平又官窯
 ヲ督ス明治三年珉平卒スルニ當ツテ家ニ資産ナク陶業上ノ負債
 尙數千圓アリト則チ一事業ヲ起スノ實ニ容易ナラサルヲ知ル然
 レモ今日我邦ノ一大物産トナリ珉平燒ノ名世ニ籍々タルモノハ
 即苦心ノ成績ニシテ亦得易スカラサルノ事ト爲ス之ヲ繼續スル
 モノ逾奮勉以テ其功績ヲ永遠ニ傳ヘスンハアル可ガラス今之ヲ
 繼續スルモノ加集三平(元ト賀集ノ字ヲ用ケ今加集ニ改ム)樺田善
 次郎トナス三平ハ明治五年官窯ヲ購テ獨立シ善次郎ハ珉平ノ男

力太ノ多病ニ因リ廢業スルヲ惜ミ十六年七月本窯ヲ購フテ之ヲ
 回復シ共ニ幾分ノ進歩ヲ今日ニ示セリ
 明治十六年五月全郡津名郡洲本ニ一窯ヲ創築シテ珉平燒ヲ業ト
 スルモノアリ田村久平ト云フ初メ珉平窯ノ工人ナリ

第六 長崎縣

三河内窯ハ肥前國東彼杵郡折尾瀬村三河内ニ在リ世上此窯ノ製
 品ヲ呼テ平戸燒ト云フ當時平戸侯松浦氏ノ特窯タリシヲ以テナ
 リ慶長征韓ノ役韓人巨關頓六ノ輩數名平戸藩主ニ隨テ歸化ス之
 チシテ北松浦郡中野ニ陶業ヲ開カシム其土赤色ナルヲ以テ黒褐
 釉ノ器皿ヲ造レリ巨關後藩藉ニ入り今村ヲ氏トス慶安中中野ノ
 人中里茂右衛門ノ母某其子茂右衛門ヲ携テ三河内ニ移居シ陶窯
 ヲ開ク時ニ巨關ノ子今村三之丞其子如猿ヲ拉テ之レニ尾シ來リ
 別窯ヲ築ク後如猿東彼杵郡江上村三ヶ嶽ニ良土(網代土)ヲ發見シ

始メテ青華陶器ヲ製シ中里今村ノ二家殊ニ親密ノ交ヲ爲シ力ヲ
 陶業ニ盡セリ之ヲ三河内窯ノ創始トス子孫相繼キ陶業ヲ善クセ
 リ而シテ如猿ノ兄弟子孫後チ木原江永ニ分業ス之ヲ平戸ノ三皿
 山ト稱セリ
 正徳二年三河内ノ人横石藤七兵衛肥後天草郡深江村ノ砥石(長石
 ナリ)ヲ試ミ三ヶ嶽ノ網代土ニ混和スルヲ悟リテヨリ磁質創メ
 テ精ナルニ至レリ寶曆中藩主窯ヲ此ニ置キ藩臣及ヒ工人ヲ移シ
 テ陶業ノ傳習ヲ受ケシメ各世祿ヲ與ヘ此ニ優等無比ノ青華磁器
 ヲ製出ス乃チ猥リニ沽賣スルヲ禁シ單ニ貢獻贈遺ノ資ニ充ツ
 然シテ中里今村ノ二家ハ別ニ補助ヲ與ヘ他人ノ磁器ヲ求ムルヲ
 レハ必先ツ二家ニ命シテ造ラシメ以テ祖先創業ノ功ヲ空フセサ
 ラシム是ニ於テ平戸燒ノ名頓ニ邦内ニ傳播スルニ至レリ
 全村木原ニ別派ヲ立ツル數工アリ歸化ノ韓人巨關等北松浦郡中

野ヨリ折尾瀬村吉ノ元ニ移リ又柳ノ元ニ築窯シ赤土ヲ用ヰテ黒
 褐釉ノ雜器ヲ製セルヲ始メトシ今村如猿カ三ヶ嶽ノ網代土ヲ發
 見セルノ後石丸彌一右衛門(歸化ノ韓人李參平ノ孫ニシテ初メ吉
 ノ元ニ家ス即今ノ石丸六郎ノ祖)樋口頓一(歸化ノ韓人頓六ノ孫頓
 一ノ子ナリ頓六中野ヨリ東松浦郡唐津椎嶺ニ移リ製陶スルヲ二
 十餘年ニシテ西松浦郡曲川村南河原山ニ轉シ折尾瀬村吉ノ元ノ
 陶場興ルニ當テ更ニ移居セリ二子アリ兄ヲ頓一ト云ヒ弟ヲ頓二
 ト云フ頓一氏ヲ樋口ト改ム實ハ火口ナリト即今ノ樋口五郎作樋
 口甚次郎等ノ祖ナリ)等當時ノ有志者ト謀リ網代土堀采ノヲ藩
 廳ニ請ヒ準許ヲ得爾來青華陶器ヲ製ス數年ナラスシテ資ヲ失ヒ
 業衰フ時ニ小山田佐兵衛ト云フモノ力ヲ併セテ舊業ヲ回復ス正
 徳二年韓人某ノ子孫横石藤七兵衛(今ノ横石恒太郎横石兼治郎横
 石鹿吉等ノ祖)ト云フモノアリ市ニ鬻ク所ノ天草深江村ノ砥石ヲ

網代土ニ混用スルヲ案出シ是ヨリ白手燒(即磁器)ノ業始メテ盛ナルニ至レリ

全郡下波佐見村稗木場ノ陶窯ハ本石八郎兵衛福田源之丞福田助兵衛外數名相謀リ寛文二年ニ創起シ上波佐見村永尾山ノ原石ヲ用テ唯暗灰粗糙ナル釉料ヲ施シテ日用厨具ヲ多製スルニ始マリ天明元年ニ至リテ本石平七(今ノ本石平七ノ先代)福田十右衛門(今ノ福田彌左衛門ノ先代)福田忠左衛門(今ノ福田勝左衛門ノ先代)福田清右衛門(今ノ福田清右衛門ノ先代)等一種ノ氷裂釉ヲ案出シ燒青ヲ用テ桃ヲ画ケル茶碗ヲ造リ之ヲ大村藩主ニ捧シ爾後例シテ每年上巳ヲ期シ藩主ヨリ長崎奉行ヲ經テ幕府ニ納ル、所トテ此器頗ル雅致アリ文久慶應以降天草小田床村ノ原石ヲ用テ五島對馬ノ土石ヲ取テ釉料トナシ青華磁器ヲ兼製ス明治六年福田伊右衛門下云モノ百餘年前福田清右衛門ノ製セシ形打画付ノ器

ヲ檢出シ爾後此法ヲ用ウルモノ多シ

全郡上波佐見村三股窯ハ慶長二年ニ起リ中尾窯ハ正保元年ニ創リ永尾ハ寛文六年ニ開ケリ共ニ大村藩主ヨリ吏員ヲ派シテ管理シ寛文六年ニ至テ更ニ皿山役所ヲ建テ惣奉行ヲ置キ以テ之ヲ統督セリ此諸場ハ原土及ヒ釉料ヲ全村砥石川ニ採リ燒青画ヲ施セル諸器ヲ製ス又近來天草石ヲ調和シ釉料ニハ五島ノ粘土ヲ和合シ粗糙ノ廉價磁器ヲ製セリ

第七 新潟縣

越後國新發田上町保科謙吾ハ明治十年十一月中草水三光二村ノ土ヲ用テ黃土ヲ調和シテ表面深黒色ノ土器茶具ヲ製ス其質軟ニシテ泥臭アリ

佐渡國雜太郡相川町三浦小平次伊藤富太郎等ノ製スル朱泥燒ハ弘化ノ初年伊藤甚平ト云モノ其金坑内ニ産スル無名異ヲ用テ一

種ノ樂燒ヲ造リタルニ創リ安政四年伊藤富太郎業ヲ起シ明治七年三浦小平次モ亦築窯ス其無名異ハ之ヲ清水ケ平ト稱スル地ニ采リ小平次ハ別ニ中尾産出良好ノ無名異ヲ和調ス然レモ當時ノ品ハ其質脆弱ヲ免レヌ明治十三年ニ至テ始テ支那朱紫泥ニ類スル較堅實ノ製ヲ得タリト云フ

越後國北蒲原郡太子堂村原隆治ハ明治三年ニ創始ス初メ西京製陶家ニ從事セル工人ヲ僱使シ爾後毎ニ西京ノ工人ヲ雇用ス其原土ハ魚沼郡廣瀬谷字澁川穴澤ノ白土及ヒ北蒲原郡草水村赤阪山及ヒ三光村等ノ白土ヲ撰取シ十四年ニ至リ岩船郡大須戸村長坂山ノ白石ヲ發見シ遂ニ土石中ノ鉄分ヲ除去スル法ヲ發明シテ稍磁器ヲ製スルニ至レリ近來天草信樂土等ヲ調和シ又西京ノ良工清水七兵衛外二十一名ヲ聘シテ始テ越後陶磁ノ一產物ヲ興シ越後全州ヨリ兩羽及函館ニ搬送スルニ及ヘリト云フ

第八 埼玉縣

此縣陶器ノ創業ハ天明五年淡路國ノ産科醫澤立堂ト云モノ武藏國比企郡熊井村根岸仙之助ノ家ニ來寓シ好シテ樂燒ノ法ヲ談セシテ仙之助傳習起業ナシタルニ在リ今工豐三八即チ其流ヲ趁フモノナリ

武藏國高麗郡飯能陶器ハ天保元年飯能町雙木清吉ト云モノ全村愛宕ヨリ原土ヲ發見スルニ始ル然レモ土質ノ堅硬ナラサルヲ以テ嘉永年間雙木新平ト云モノ全郡荊生村赤根嶺ノ産土ヲ混和シ煇テ能ク耐火ノ雜器ヲ製スルニ至レリト云フ

全國比企郡松山町横田次郎吉ハ横見郡北吉見村羽黒山ノ原土ヲ用ニ稍飯能陶器ノ地質ニ全シキ耐火陶器ヲ近製セリ

第九 茨城縣

常陸國西茨城郡手町村ニ製スル日用陶器ハ天保中同村山口勘兵

衛ノ創業ニ係リ其子勘重之ヲ繼キ嘉永間稍販路ヲ擴ム身老ルニ及ンテ漸次衰頽シ殆ト廢絶ニ歸セシテ明治三年其子松之助之ヲ興シ以テ今日ニ至ルト云

全郡石井村田中友三郎ハ固ト商賈ニシテ十年間各地ノ陶場ヲ經歷シ明治三年創メテ製陶ノ業ヲ起ス蓋シ山口勘兵衛ノ製ニ據テ改良スルモノナル可シ而シテ山口松之助モ亦此時ニ當ツテ再興スルヲ知ルニ足ル何トナレハ其陶質大同小異ナレハナリ

第十 朽木縣

下野國芳賀郡益子村製陶ノ原始ハ嘉永六年大塚啓三郎ト云モノ全村大津澤ニ陶土ヲ發見シ之ヲ試ミテ好結果ヲ得タルニ抑リ爾後村人此業ニ從事スルモノ日ニ多ク乃チ今日ノ旺盛ヲ致スト云而シテ其製品ハ土瓶ヲ以テ第一トス

第十一 三重縣

此縣ニ著名ナルハ萬古燒ナリ抑萬古燒ハ元文年間伊勢ノ人沼浪五左衛門カ奇古ナル交趾様ノ樂燒ヲ製スルヲ創起トス天明六年五左衛門幕府ノ命ヲ奉シテ江戸小梅村ニ卜居シ或ハ薩摩古壘器ニ類スル釉面ニ彩画ヲ着セル一種ノ陶器ヲ製シ之ニ萬古ノ銘ヲ歴印シタリ(後世之ヲ江戸萬古ト呼フ)然シテ此陶法ヲ繼クモノナク一代ニシテ絶滅セリ

伊勢國朝明郡小向村ノ骨董舖ニ森與五左衛門ト云モノアリ性土器ヲ好シ天保三年遂ニ一窯ヲ築キ無釉有釉ノ酒茶器ヲ造リ尋テ浮起画及ヒ淡紅彩料ヲ案出ス當時他ニ此彩料ナキヲ以テ大ニ世賞ヲ博シタリ又茶注ノ内型ヲ造リ型ノ表面ニ蟠龍ヲ織刻シテ製器ノ内部ニ龍形ヲ現出セシム世人之ヲ珍トシ販路日ニ廣シ又曾テ沼浪五左衛門ノ孫五郎兵衛ニ請ヒ其製器ニ萬古ノ銘ヲ印スルヲ得又萬古不易有節等ノ印ヲ押ス(有節ハ當時ノ實名ナリ明治十

一年以後之ヲ通稱トス今ノ有節ハ其男ナリ然レ正沼浪万古ト其陶法ヲ殊ニシ別ニ風致淡雅ナル一機軸ヲ出セルナリ之ヲ萬古中興ノ祖トス

此製器盛ニ世ニ行ハル、ニ至テ漸次其法ヲ傳ヘ三重郡末永村ノ山中忠左衛門射和村ノ竹川竹齋ハ嘉永ニ興リ東阿倉川村ノ堀友直ハ文久元年ニ四日市ノ河村又助ハ明治八年ニ伊藤庄八及桑名ノ松村清吉ハ十二年ニ三重郡濱田村ノ生川善作ハ十三年ニ其他爭テ開窯スルモノ數名アルニ至レリ但有節ハ小向村名谷ノ赤白土桑名郡播磨村ノ白土ヲ用キ其他ハ阿倉村庚申山ノ白土羽津村一本松ノ白土及小向村柿村繩生村等ノ赤白土ヲ用ウ

全國飯高郡下村ノ陶窯ハ文久二年杉山多兵衛ノ創築ニ係リ其後ヲ主テ易ルニ數回明治十七年七月遂ニ全村佐久間平四郎ノ所有ニ歸ス製品ハ日用ノ土瓶茶碗行平鍋等ニシテ土ヲ全村西ノ莊ニ

取リ伊賀國石川村産ノ石川砂ヲ中糲トシ天草石ヲ表糲トス伊賀國阿拜郡丸柱村ハ四面皆山ニシテ北ハ近江國甲賀郡信樂ノ莊長野村ト山脉連續シ土質モ亦太々相似タリ故ニ丸柱中古以前ノ製品ハ信樂燒ニ類スル砂器ノ一種ナリシ其地口碑ノ傳フル所ニ據レハ丸柱窯ハ天平寶字ニ創起シ中世廢絶ナシタルヲ享祿ニ至ツテ次郎太夫太郎太夫ト云フ兩人之ヲ再興スト延喜太神宮式ニ伊賀國ヨリ神酒二缶ヲ毎年二回太神宮ニ獻スル式アリ此酒ヲ盛ル缶ハ其國ニテ造レルヲ必セリ延喜ノ天平寶字ニ後ル、ヲ百四十餘年ニシテ當時尙此窯アリシヲ以テ徵ス可シ又或家藏スル所ノ手爐ハ頗ル奇古ニシテ其器底ニ昌泰二年石山寺ノ七字ヲ彫セリ昌泰二年ハ延喜元年ニ先ダツテ僅ニ二年是亦一證タリ工藝志料ニ建武年間伊賀國ニ於テ始メテ製出ス云々蓋シ其建武ト云ヘルハ世ニ古伊賀ト稱スル末茶壺アリ尾張破風窯製ノモノト甚

タ相類似ス破風ハ則チ建武ノ頃ニアルヲ以テ此古伊賀ノ器物ヲ
 モ建武ノ創起ト爲スモノ、如シ前ニ陳スル昌泰ノ製器モ表釉畧
 相似テ唯坯質堅剛ナラサルノミ然レモ建武ノ昌泰延喜チ距ル
 四百三十年建武ヨリ享祿ニ至ル亦一百九十年ナル時ハ其間果シ
 テ幾興廢アリシヤチ知ル可カラス
 傳統ノ纒ニ追測シ得可キハ寛永以後トス寛永十二年藩主藤堂高
 虎京師ノ工人孫兵衛傳藏等ヲ召シ茶器ヲ作ラシム當時小堀政一
 アリテ工人ニ教示シ古傳ニ據テ造ラシメタル茶器チ後世呼テ遠
 州伊賀トシ高虎ノ指揮ニ成ルモノチ藤堂伊賀ト唱ヘ共ニ世ニ珍
 賞セラレ該地ノ陶工岡本定八全定五郎ノ家ニ藏スル二個ノ銅印
 ハ高虎ノ與フル所ト稱シ製器ノ表面ニ壓押スルチ例トス其印圖
 ノ如シ
 窯印二個 多ク土瓶ノ横面前後ニ壓押ス銅製ナリ

伊賀或瓦程粉

今盛ニ製スルモノハ陶質ニシテ暗黄釉ヲ製フ陶工彌助定七等
 之チ創製スト云蓋シ信樂陶ニ倣フモノナリ是チ製造一變ノ時ト
 爲ス而シテ本會出品人中ニ就テ調査スレハ其十代以前ヨリ陶業
 ニ従事スルモノ一戸五代前ヨリノモノ一戸餘ハ皆二三代繼續ス
 ルモノト今工ノ創業トニシテ其何ノ年ニ改正セシヤチ證ス可キ
 ナシ姑ク疑チ存スルノミ
 因ミ云雲根志ニ燒物藥石ハ伊賀國阿拜郡石川村ノ山中ニ在
 リ性質柔ニシテ石ノ如ク土ノ如ク色白ク光澤アリテ美ナリ昔
 同郡丸柱村白土山ニテ陶ヲ造ル世ニ伊賀ト稱スルモノ是ナリ
 後世此處チ禁セラレテ外ナル山ニテ燒ク古今トモ此藥石チ用

ウトアリ今案スルニ白土山ハ今官林中ニ在リ伊賀燒ニ適スル
釉土ヲ出ス然レモ猥リニ之ヲ採ルヲ禁シタリ又丸柱村洞ヶ谷
ニ再製窯ノ趾アリト云

丸柱村ノ三十余戸ハ原土ヲ本村殿白及ヒ南出ニ採リ釉料ヲ下出
ニ取ル榎山村ハ天保十二年創メテ丸柱ニ學ヒ村前ノ谷下田等ノ
原土ヲ用キ五六年前十餘戸ニ至リシモ今ハ減衰シテ僅ニ四戸ア
ルノミ石川村ハ明治五年ニ開キ陶工四戸アリ皆川谷村燒尾ノ土
ヲ用ウ玉瀧村ハ十三年ニ創メ今一戸ニシテ土ハ丸柱ニ同シ此四
村ノ用土ハ其質皆信樂ニ類シ強堅ニシテ能ク火ニ耐ヘ庖厨用具
ヲ製スルニ適セリ

第十二 愛知縣

尾張國東春日井郡瀬戸窯ノ創始ト沿革トノ如キハ工藝志料及ヒ
第一回内國勤業博覽會報告ニ詳悉掲載スルヲ以テ今再ヒ記スル

ヲ須ヒス

全郡赤津村品野村ハ瀬戸村ニ鄰リ其創業ノ歲月ヲ詳ニセスト雖
モ加藤景正ノ子孫相分レ陶業ノ盛ナルニ隨テ遂ニ四鄰ノ村落ニ
及ホシタルモノニシテ蓋シ應仁慶長ノ間ニアルヘシ而シテ磁器
ヲ創製ナシタルハ貞享ノ初メ津金庄七ノ教示スル所ニ係リ文化
四年加藤民吉肥前ヨリ歸リ柳テ瀬戸ニ善良ノ磁器ヲ出スニ當リ
漸次其法ヲ傳ヘタルナリ村内加藤唐三郎ノ解説ヲ閱スルニ元龜
天正ノ際景正十八代ノ孫唐三郎其弟仁兵衛ト共ニ亂チ美濃土岐
郡郷ノ木村ニ避ケ製陶ヲ業トス慶長十五年徳川義直ノ名存屋ニ
封セラル、ヤ瀬戸陶祖ノ傳統ヲ調査シテ唐三郎ヲ宗家トシ御窯
屋ト稱シ赤津村中ニ於テ窯場八反五畝二十四步高二十石ヲ除地
トシテ毎年金二拾兩ヲ與フ寛永中名古屋城ノ外郭内御深井ト稱
スル地ニ陶窯ヲ築キ後又江戸外山ノ邸内ニ築窯シ共ニ唐三郎等

チシテ從事セシム之ヲ御深井燒又御庭燒ト稱ゼリ今工ハ即景正
 三十代ニ當ルト云フ
 常滑窯ハ相傳フ天正ニ創始スト當時製スル所ノ器物ヲ觀ルニ南
 蠻ト稱スル砂器ニ類シテ粗糲ノモノタリ降テ文政ノ長三郎天保
 ノ八兵衛等共ニ點茶用ノ建水雜器ヲ作ル皆良工ノ名ヲ得タリ
 犬山窯ノ起原ハ實ニ寶曆二年ニ在リ犬山城ヲ距ルコト一里今井
 村ニ築窯ス當時製スル所ノ器物ニハ犬山ノ文字アル長方形ノ小
 印ヲ押捺セリ文化七年窯ヲ城東丸山ニ移ス故ニ丸山燒ノ別稱アリ
 其吳洲赤繪ニ擬シタル諸器ハ天保六年陶工道平ノ創製ニ係ル該
 工ハ殊ニ陶面ヲ善シ摸シ得テ眞ヲ欺ムケリ當時製スル所ノ質ハ
 石器ナルモ近製ノモノハ粗質ニシテ却テ安南陶ニ類セリ
 灰色ノ陶器ニ櫻花楓葉ヲ画ケルモノハ天保十一年領主成瀬正任

ノ創意ニ出テ當時三光寺殿中ニ陶工陶面工ヲ召集シ小窯ヲ庭内
 ニ築キテ調製セシム時ニ兼松所助ト云フ者アリ捏作陶面ニ巧ナ
 リシヲ以テ大ニ此製ノ聲價ヲ得タリ

第十三 静岡縣

志戸呂燒ハ遠江國榛原郡横岡村ニ製スル陶器ナリ其創始ハ大永
 年間全郡志戸呂村ニ起ル然レモ其横岡村ニ移窯スルノ時ヲ知ラ
 ス徳川氏ノ初代ニ當リ尾州瀬戸村ノ人三名遠州濱松ノ近傍引佐
 郡井伊谷郷ニ轉住シ陶業ニ從事ス家康ノ駿府ニ移ルヤ亦從フテ
 駿州ニ赴シモ陶事ニ適スルノ地ナキヲ以テ遂ニ居テ志戸呂村ニ
 トス是ヨリ志戸呂燒稍改良ノ蹟アリト今工鈴木兼四郎ハ原土ヲ
 本村南田ノ地ニ取ルト云

第十四 滋賀縣

信樂陶ハ近江國甲賀郡長野村神山村等ニ於テ製ス其創起沿革ハ

工藝志料ニ詳ナリ故ニ贅セズ從前ニ在テハ彼ノ七度燒ノ茶壺ヲ製スルモノ長野村七戸ニシテ各自窯ヲ有シ他ハ製スル能ハサルノ製アリシモ今其制解ケタリ長野村石野常吉ハ即七戸中ノモノタリシト云此陶ノ原土ハ皆自村ニ取レリ

第十五 岐阜縣

美濃國不破郡赤阪村ノ瓦器ハ嘉永二年清水平七號温故ノ創業スル所初メ御勝山燒ト唱ヘ後温故燒ト改稱ス全村金生山ノ赤土御勝山ノ白土ヲ合和シ無釉赭褐色ノ細小煎茶具ヲ製セリ其弟勇助石仙ト號ス明治二年別ニ一戸ヲ爲シ河野忠次(號大雅)ト共ニ三家トス

全國土岐郡駄知村陶器ノ創始ハ文化元年塚本源右衛門(今ノ源右衛門ノ祖父)全村松本山ニ産スル二種ノ粘土ヲ質トシ土岐郡小里村ノ石粉及ヒ全郡肥田村上洞山産土(方言水落)ノ三種ニ雜灰ヲ和

シ細料トナシタル絲目土瓶松皮土瓶ヲ製ス天保元年岩村藩主松平能登守命シテ陶商長谷川平七ニ專賣センメ以テ岩村物産ノ名ヲ負ハシム當時頗ル盛昌ニシテ工人夥多アリシモ磁器ノ盛ナルニ迄ヒテ漸ク製磁業ニ轉シ今僅ニ七戸ヲ存セリ

飛驒國大野郡高山町芳國社製ノ陶器ハ原土ヲ全郡清見村嘉平林ニ採リ吉城郡神岡村石谷産ノ磁土ニ木皮灰ヲ和シテ細料トスルモノニシテ從來製造ノ種類ト敢テ異ル所ナシ全地ノ製陶ハ元和年間京都ノ工人源十郎ト云モノ大野郡江名子村(今大名田村)江築窯スルヲ始トス然レハ一代ニシテ廢絶セリ文政中ニ至テ高山町細江三郎右衛門ト云モノ西之一色村(今大名田村)西小絲ニ新窯ヲ築キタルモ亦久シカラスシテ衰廢ス天保年間尾張瀬戸ノ工人戸田柳造ト云モノ飛驒郡代豐田藤之進ノ奨勵ニ因リ上岡本村(大名田村)澁草ノ地ニ築窯シテ赤繪陶磁器ヲ製ス之ヲ澁草燒ト稱セ

リ柳造没スルノ後漸次衰頽シ數年ニシテ遂ニ廢ス明治十一年高
 山町三輪源次郎平瀬市兵衛阪田長五郎永田吉右衛門ノ四名相謀
 リ此陶場ヲ購得シ芳國社ト稱シテ陶磁ヲ兼製ス(今ハ源次郎一名
 ナリ)其陶器ハ灰色中鑿ノ青華器ヲ佳トス磁器ニ於テハ近來大ニ
 改良ス從來澁草磁器ノ原料ハ其陶器ノ土石ニ異ルコトク唯多量
 ノ戸谷石ニ嘉平林土二分ヲ調和シ川釉ハ戸谷石ニ栗皮灰ヲ加フ
 ルモノニシテ粗質暗釉ナル雜器ヲ製セリ明治十一年此社ノ創立
 スル其製器改良ニ汲々タルモ苦慮破裂頗ル多ク爲メニ資金ヲ耗
 費シ十三年十四年ニ至リ全盟漸ク離解シ只三輪源次郎一人アル
 ノニ然ルニ源次郎少シモ屈撓セズ獨力支持シ十五年柳メテ徑二
 尺餘ノ平碟ヲ造レリ(東京博物館ニ獻スルモノ)此器付スルニ淡青
 磁ノ稱ヲ以テス然レモ余ノ見ル所ニ據レハ實ニ青磁釉ヲ施スニ
 非ズ蓋シ白磁ノ未ダ皎ナラサルモノニ強テ此稱ヲ負ハシメタル

ナラシ全年九月吉城郡細江村ノ粘見山ニ磁石ヲ發見シ谷石及ヒ
 美濃惠那郡苗木村ノ産土ヲ加ヘ其釉ハ栗灰ニ換ルニ構灰ヲ以テ
 シ十七年九月始テ白磁ヲ製スルヲ得タリ又青磁ハ益田郡下呂村
 ニ瓦石ヲ得シヨリ漸ク改良ノ緒ニ就ケリト云
 美濃國土岐郡多治見笠原諸村磁器ノ起原ハ文化元年大阪ノ陶商
 西川屋茂平ト云モノ肥前製奈良茶碗及ヒ瓣花狀ノ茶碗ヲ傳シテ
 多治見村ニ來リ之ヲ見本トシテ磁碗ヲ造ラシムルヲ創始トス其
 原料タル粘土即蛙目ト稱スルモノハ全郡笠原村ノ元窯下石村ノ
 浦山土岐口村ノ砦山ニ産シ原料并ニ釉料ニ適用スル長石即廣見
 石ト稱スルモノハ全郡萩原村笹ノ平ノガ阪柿野村小里村ノカチ
 レ山久尻村ノ深澤三河國加茂郡三箇村大平村白川村廣見村及ヒ
 石疊一色土合市野々北曾木ノ諸村ニ出ツ又磁石即鳥屋根石ト稱
 スルモノハ多治見村ノ鳥屋根及ヒ原山妻木村ハシカス及ヒ崇禪

寺等ニ採ル初メ近傍諸山ノ紺青ヲ採テ画料トナシ縵ニ青華磁器
 ナ製セシモ今ヤ青磁其他ノ彩器ヲ造リ且錦窯画ヲ施スニ至レリ
 蓋シ文化元年ハ加藤民吉肥ヨリ歸リ瀬戸磁器大改良ノ時ナルヲ
 以テ此地亦之ニ倣フコトヲ得ルナリ
 因ニ云延喜ノ朝美濃ヨリ陶器ヲ調貢スルノコトアリ然レモ其何
 ノ地ヨリ出テシヤヲ知ルニ由ナシ永祿元龜間瀬戸ニ加藤四郎右
 衛門景春ト云モノアリ六男ヲ生ム五郎右衛門景豊與三兵衛景
 光源十郎景成伊右衛門景興茂右衛門景定勘六郎景住ト曰フ天
 正二年ノ春與三兵衛景光土岐郡高田莊鱒村(元角錐ノ字ヲ用ウ
 慶長年間ニテハ郡尻ト書ク今ハ久尻村ト云)ニ來リ清安寺ノ後
 山ニ一窯ヲ築キ陶業ニ從事ス其器ハ土燒ニ淡黄ナル白釉ヲ施
 シルモノニシテ之ヲ白藥様ト唱フ嘗テ茶壺一個ヲ織田右府ニ
 獻ス右府賞シテ朱印ヲ賜フ後退隱シテ僧トナリ清安寺ヲ修シ

テ之ニ居ル年七十三ニシテ寂ス景光三男アリ四郎右衛門景延
 彌左衛門景頼太郎右衛門景貞ト曰フ別ニ兄五郎右衛門景豊ノ
 第二子ヲ養テ四男ト爲シ庄右衛門景忠ト呼ヘリ長子景延父業
 ヲ繼ギ諸弟ト謀リテ大ニ清安寺ノ伽藍ヲ建ツ領主其功ヲ賞シ
 景延ニ筑後ノ稱ヲ與フ
 後陽成天皇ノ朝正親町上皇景延ノ製品ヲ徵ス景延白藥ノ茶
 碗ヲ上ツル上皇勅シテ筑後ノ朝日燒ト名ケラル爾後每時之
 ナ貢獻シ慶長二年七月五日筑後守ニ任セラレ
 時ニ肥前唐津ノ浪士森善右衛門ト云フモノ清安寺先住ニ関ノ
 親族タルヲ以テ此地ニ來リ景延ノ燒窯ヲ觀テ其得失ヲ論シ遠
 ニ景延ヲ携歸シテ唐津ノ窯法ヲ熟覽セシム景延ノ歸ルヤ邸内
 ニ築窯シ一ニ唐津ノ法ニ倣ヒ且他人ノ之ニ模擬セノコトヲ恐レ
 テ四壁ヲ高峻ニシ容易ニ窺フコトヲ得サラシム是ヨリ製器大ニ

改良ノ功ヲ奏セリ瀬戸赤津ノ工人某々等之ヲ聞キ往テ一見ヲ
 求ム許サズ時恰モ新年ニ會ス乃チ一策ヲ畫シ某々相携ヘテ正
 チ其家ニ賀シ酒宴己ニ酣ナルヲ候シ赤津村松原太郎藏ノ子仁
 兵衛ヲシテ窃ニ壁ヲ踰ユ其窯狀ヲ探知セシム景延覺リ怒テ之
 チ追フ仁兵衛狼狽シテ逃レ歸ル是ヨリ瀬戸赤津ニ唐津窯ヲ築
 シモノアルニ至ルト云フ

是ヨリ先キ元祿中幕府窯株ノ制ヲ定メ課スルニ輕稅ヲ以テス此
 時ニ方リ多治見村(本村及ヒ市ノ倉組)笠原村(瀧呂組)久尻村(高田組)
 下石村等ノ窯數ヲ二十四基トス文政間製磁ノ業漸ク盛ナルニ至
 リ妻木駄知ノ二村ヲ併セ三十五基即三十五ノ株數アリト雖モ其
 製器ハ概シテ瀬戸物ト稱シテ美濃燒ノ名ヲ顯スコト能ハス然ル所
 以ノモノハ當時尾藩ノ嚴制ヲ受ケ其藏元ト稱スル名古屋十二戸
 陶商ノ手ニ蒐集シ以テ關ノ東西ニ輸送スルカ爲メニ時人ハ瀬戸

ノ製スル所ト同視スルコト猶肥前諸窯ノ製品ヲ概シテ伊萬里燒ト
 スルカ如シ維新以降此制解ケ貿易亦盛ナルニ際シ目今ニ於テ
 ハ一百八十八窯ノ多キヲ致シ自由販賣ヲ得テ始メテ美濃燒ノ名
 チ世上ニ播スルコト至レリ
 今更ニ一表ヲ掲ケテ其窯ノ所在及ヒ窯數床數營業人員ヲ示ス窯
 ノ容積勾配各所構造ヲ異ニシ窯床ノ如キモ亦同一ナラス大概最
 下床ハ幅三尺深サ六尺許ニシテ上床ニ登ルニ從ヒ幅員深度モ亦
 漸ク増加シ最上床ニ於テハ幅五尺ヨリ六尺ニ及ヒ深サハ一丈六
 尺乃至二丈四五尺ナリトス

郡	村	窯數	自上下床總數	營業人員
土岐郡	多治見村	三十四基	三百十六床	五百九十八
全	笠原村	二十九基	二百九十一床	九十六人
全	妻木村	二十基	二百三十床	五十四人

小器ニ止リ尾張肥前諸窯ノ如キ巨皿大瓶ヲ出スヲ又美術上
ノ製品ナシトス

笠原村ニ松原領右衛門ト云モノアリ其先慶長二十年二月始テ陶
業ヲ開ク而シテ當時ノ製品ハ左鉢屑便ズンベ等ノ粗陶ナリ文化
中ニ至ツテ創テ大白茶碗ヲ燒キ爾後磁器ヲ製スルニ至レリト云

第十六 福島縣

岩代國大沼郡本郷村北會津郡會津製陶ノ起原沿革ハ正保二年美
濃ノ人水野源左衛門奥州若松ニ來リ藩主松平正之ニ仕ヘ世祿ヲ
受ク尋テ大沼郡本郷村ニ移リ陶場ヲ開ク蓋シ藩命ヲ奉スルナリ
是ヲ本村製陶ノ規メトシ今ニ至テ十世聯綿繼續シ今工ヲ多門ト
云フ其當時製スル所ノモノハ想フニ一ノ陶質ニ止マルノミ
寛政中全村ニ佐藤伊兵衛ト云モノアリ曾テ心ヲ青華磁器ニ委テ
藩命ヲ帶ヒテ關西九州ニ歴遊シカメテ磁器ノ製法ヲ學ヒ歸來別

窯ヲ開キテ衆工ニ傳習ス藩主其功ヲ嘉シ陶器ノ棟梁師ヲ世襲セ
シム是ヲ會津磁器ノ創始トス爾後其法近傍各地ニ傳播シ今日ニ
至テハ製磁ヲ以テ業トスルモノ窯主傭工ヲ併セテ六百七十人ノ
多キニ及ヘリ

磐城國宇多郡中村ツ相馬燒ハ砂器ノ一種ニシテ其創始ハ明曆ノ
初年ニ在リ是ヨリ先キ慶安元年相馬氏ノ臣田代某藩主ニ從テ京
師ニ到リ主命ヲ以テ野々村清兵衛ニ就キ御室燒ノ陶法ヲ學ヒ居
ルヲ七年ニシテ歸リ陶窯ヲ中村ニ築ク蓋シ當時製スル所ノモノ
ハ近今ノ相馬燒ト同種ナルヤ否ヲ知ラス
狩野尙信ノ此地ニ來遊スルヤ相馬義胤ノ需メニ應シ燒青ヲ用井
テ末茶碗ニ走馬ヲ画ケリ蓋シ相馬氏ノ徽章ニ取ルナリ爾後製ス
ル所ノ大小茶碗ハ馬蹄ノ狀ヲ爲スモノ多シ
磐城國標葉郡大堀村ノ日用粗陶器ハ全村ノ士半谷順之助ノ祖休

開ノ創製ニ係ル元祿ノ初メ休閑ノ家奴ニ左馬ト云モノアリ全郡
 井手村美シ森ニ砂土ヲ發見シ之ヲ休閑ニ告ク休閑竟ニ陶業ヲ起
 シ又之ヲ近隣ノ士人ニ教授シ爾後漸次相傳ヘテ百有餘戸ニ追ヒ
 大堀井出小ノ田三村ノ人士ハ陶業ニ從事セサルモノ罕ナルニ至
 レリ且藩廳之ヲ資テ陶器役所ヲ置キ又江戸函館ニ販賣店ヲ設
 ケテ保護振興セルモ維新已後此制廢絶シ現今ニ在テハ二十餘戸
 ニ減セリト云フ
 全國磐前郡赤井村ノ工人慶應中ヨリ製スル所ノ粗陶モ亦大堀村
 ノ製ニ倣フモノナリ
 岩代國安達郡二本松ノ萬古摸造陶器ハ其窯全郡成田村ニアリ用
 土モ亦全村ニ取ル嘉永年間黒釉ノ粗雜器ヲ製シ萬古ノ摸造ハ明
 治ノ初年ニ創ルナリ
 全國南會津郡田嶋村ノモノモ亦此製ニ倣ヒ明治二年ヨリ製造セ

此他岩瀬郡長沼村ニ陶器ヲ出シ安積郡福良村ニ粗糙ノ陶器ヲ産
 スルモ本會ニ出品ナカリシ

第十七 岩手縣

陸中國東磐井郡下折壁村小山文三郎ハ今ヲ距ル三十年前西京ニ
 遊ヒ樂燒ノ法ヲ田中吉左衛門ニ受ケ歸來全郡藤澤村本郷ニ産ス
 ル粘土ヲ取テ創製スト云
 全國南岩手郡仁王村宮田謙次郎ハ全郡上米内村紫波郡赤林村ノ
 土ヲ用テ本縣勸業場内ノ陶窯ニ就キ明治十四年ヨリ雜器ヲ製造
 スト云
 全國稗貫郡南萬町目村古館忠兵衛ハ四代前ノ創業ニシテ原土ヲ
 全村四本杉ニ取リ雜器ヲ製ス其陶質畧高取燒ニ類スルモノアリ
 全郡臺村小瀬清志ハ二十年前ノ創業ニシテ全村饅頭山ノ土ヲ用

井粗磁ヲ製ス其質稍石器ニ近シトス
 第十八 青森縣
 此縣砂器ノ創製ハ陸奥國中津輕郡下湯口村石岡林兵衛ト云モノ
 文化三年羽後國十二所ヨリ陶工ヲ聘シ中津輕郡下湯口村扇田ニ
 一ノ工場ヲ設ケシモ當時粗惡ノ播盆德利等ヲ製スルニ止リシカ
 天保六年筑前ヨリ來レル舟師ニ謀リ全國ノ陶工五郎七ト云モノ
 ナ迎ヘ竟ニ目的ヲ達スルヲ得ルト云其原土ハ全村及ヒ相馬村南
 津輕郡早瀬野村等ニ取ル頗ル高取陶ノ趣アリ今工林兵衛ハ其子
 ニシテ巧手ナリ
 第十九 秋田縣
 羽後國南秋田郡保戸野愛宕町佐伯貞治ノ父孫三郎ハ從前本縣下
 ニ陶産ノ乏シク偶全郡寺内村其他兩三所ニ雜器ヲ造ルモノアル
 モ未ク茶具等ノ製造ナキヲ憂ヒ各地ノ土石ヲ試ミ竟ニ全郡寺内

村山中ノ赤土新藤田村ノ粘土及ヒ川邊郡手島村ノ青色粘土ヲ取
 リ萬古燒ニ類スル瓦器ヲ創製シ全郡泉村ニ築窯シ明治五年福島
 縣下二本松ニ萬古摸造ヲ製セル村田鉄之助ヲ雇ヒ一年間三重縣
 下桑名ニ派シ萬古燒ノ製ヲ傳ヘシメ歸來士族ノ子弟五十餘人ヲ
 募リテ此業ニ就カシメ明治八年鉄之助ヲ解傭シ全十五年窯ヲ自
 宅ニ移シ以テ今ニ至ル又十五年八月ヨリ磁器ヲ試ミ全郡岩見山
 仙北郡卒田村雄勝郡山谷村山中平鹿郡八澤木村袴形村等ノ原石
 ナ用井岩代ノ會津及ヒ美濃多治見ノ工人ヲ傭フモ未ク好果ヲ見
 ス十七年九月貞治自カラ會津ニ赴キ中村兼三郎ヲ携歸シ爾來稍
 其緒ニ就クト云フ
 第二十 山形縣
 羽前國最上郡新庄金澤町村浦井彌瓶ノ陶窯ハ天保十三年其父彌
 瓶ノ開業ニ係リ全村金澤山ノ土ヲ取テ日用粗陶ヲ製セリ明治六

年今工美濃磁器ノ法ヲ傳ヘ全郡萩野村朴澤小以良川等ノ白石ヲ
用キテ青華磁器ヲ創業ス其器ハ美濃青華磁ノ透明質ニ非スシテ
却テ西京傳ニ倣フモノ、如シ

第廿一 石川縣

加賀國金澤春日町大樋燒ノ創始ハ寛文六年コアリ此歲三月宰相
前田綱紀京師ノ點茶家千宗室及樂燒工土師長左衛門ヲ召シ土器
窯ヲ金澤大樋町ニ設ケテ末茶器ヲ製セシム長左衛門ハ宗室考案
ノ形ニ據リ樂燒諸器ヲ造レリ此時其地名大樋ヲ以テ氏ト爲スト
云フ抑長左衛門ノ家系ハ寛平法皇ノ雜掌勘解由次官長三安敏(長
五道安五代ノ孫)ト云モノ菅原道具ニ仕フ道具左遷ノ時河内國ニ
隨ヒ竟ニ全國土師村ニ留住シ地名ヲ氏トス二代土師長三安記延
喜中陶業ヲ起セリ蓋シ當時土師村ハ陶器ヲ調貢スルノ地ニシテ陶
工多カリシヲ以テナリ十六代長左衛門道時應永以降ノ變乱ニ遭

ヒ流離シテ他國ニ遁ル十七代長左衛門道吉ノ時諸國亂始メテ平
キ文明八年舊里ニ歸住ス二十三代長左衛門明曆二年京師ニ出テ
二條瓦町ニ住シ樂吉左衛門(號一入)ニ就テ樂陶ヲ業トシ後加州候
ニ召サル是ヲ大樋窯ノ始祖ト爲ス今工道忠ハ長三安敏二十九代
ノ孫ナリ明治二年前田家東京ニ移ルノ後竟ニ廢業シ十七年十二
月更ニ今ノ春日町ニ開窯スト云其製スル所ノモノハ多ク末茶用
具ト會席膳具トニシテ原土ヲ加賀國河北郡春日山及ヒ法光寺村
ニ採リ又越中産ノ白土ヲ用ヅ
金澤山之上町加藤長壽ハ其父吉右衛門ノ傳ヲ受ケ安政三年ニ開
業ス原土ヲ法光寺村山之上村淡儀所村及ヒ能美郡小野村ニ採リ
樂燒ヲ事トス頗ル大樋燒ノ本色ヲ得タリ
金澤枝町青木榮五郎ハ其祖父栗生屋源兵衛文政十年樂窯ヲ築キ
茶器雜器ヲ製シ頗ル巧手ノ名アリ二代源右衛門業ヲ繼ギ今工ハ

其三代ナリ嘉永安政ノ間藩主ノ命ニ應シテ懸燈ヲ造リ又富山藩主ノ爲メニ硯匣及ヒ茶爐ノ長板ヲ製セリ文久二年國事多端ノ際藩廳ノ徵ニ應シ一時廢業スルモ頃日再ヒ開窯スト云フ

金澤鷺町原與三兵衛ハ吳山ト號シ點茶ヲ善クス文久中金澤卯辰山麓ノ鷺谷ニ隱居シ後園ノ土ヲ採リ樂窯ヲ築キテ點茶用ノ器物ヲ製ス明治十一年 聖駕北巡ノ時同地ノ博物館ニ於テ獻茶ノ舉アリ用ケル所ノ黃天目茶碗三個ハ其手製ニ係ル當時岩倉右府其製ヲ嘉シテ一碗ヲ携歸セラルト云現今ニ於テハ江沼郡荒谷村能美郡鍋谷村佐野村ノ産石ト卯辰山及ヒ能美郡井口村山田村近江ノ信樂山城ノ粟田等ノ粘土ヲ用ニ釉料ヲ元九谷村及ヒ肥ノ天草ニ採レリ

以上皆土器ニ係ル

加賀國ニ陶器ヲ産スルノ古史ニ載スルモノヲ觀ス蓋シ吸阪燒ヲ

扱トス寛永中大聖寺藩田村權左衛門藩主前田利治ノ命ヲ受ケ九谷窯ヲ開クノ前既ニ吸阪ノ地(大聖寺近接ノ地今黒瀬ト云)ニ陶窯アリテ茶器雜器ヲ製山セリ亦權左衛門ノ築ク所ト此陶罕ニ見ル所ニシテ九谷初窯ノ製品ニ異リ一種ノ雅品ニ止マレルナリ

金澤鷺町横萩徳松一光ト號ス其先陶磁器ヲ業トス徳松業ヲ父金三郎ニ受ケ慶應三年西京五條阪ニ開業ス明治元年金澤卯辰平兵衛ノ囑ニ因リ其製磁場ニ從事シ全三年能登國小津村桃山ニ新窯ヲ築キ四年鷺町ニ歸リ獨立築窯シテ陶磁器ヲ製シ七年再ヒ西京ノ舊地ニ開業ス十四年金澤勸業場ニ勤務シテ磁器ヲ造リ十六年九月ニ至ツテ又鷺町ノ舊窯ニ歸リ加賀越中十數所ノ土石及ヒ信樂加茂川天草等ノ土石ヲ用ニテ專ラ日川ノ廉價器ヲ製セリ

石川郡末村小松彌三郎ハ明治ノ初メニ開業シ全村小山ノ粘土ヲ採リ日用雜器ヲ製セリ

以上皆陶器ニ係ル
 本縣ニ在テ最ニ著明ナルモノハ九谷焼ナリ抑九谷焼ハ慶安中大
 聖寺侯前田利治ノ創意ニシテ其臣田村權左衛門ヲシテ江沼郡九
 谷村ニ開窯セシムルニ擬マリ萬治中利治ノ子利明其臣後藤才次
 郎ヲ肥前有田ニ遣リ磁器製造ヲ傳ヘ久隅守景ニ画圖ヲ造ラシム
 ルニ進歩ノ后廢絶ニ歸セシモ文化中大聖寺町ノ商吉田屋傳右衛
 門ガ九谷村ニ築窯再興シ后チ全郡山代村ニ移窯シテ交趾風ノ陶
 器ヲ製スルルニ一變シ大聖寺ノ商飯田屋八郎右衛門ガ金彩赤繪ヲ
 新製スルルニ再變ス此製頗ル絶美ニシテ大ニ九谷陶器ノ名ヲ顯ス
 安政五年ニ永樂善五郎京ヨリ來リ赤繪金襴ヲ製スルノ法ヲ傳フ
 當時ノ画工皆之ニ倣ヒ金光赤色相掩映シテ爛燦タルニ至ル是ヲ
 三變トス(工藝志料ヲ參觀ス可シ)明治ノ初ノ此器世ニ行ハレ竟ニ
 海外輸出ノ盛昌ヲ致セリ全十五年商況ノ不振ニ遭ヒ同盟一致シ

九谷

心ヲ改進ニ委テ大ニ其功ヲ奏スルモノ、如シ
 然リ而シテ九谷焼地質ノ變化ヲ考フルニ寛永創始ノ製器ハ瀬戸
 ニ類セル黒褐色代赭色ノ陶質ニシテ末茶壺水指ノ各種ヲ製シ(吸
 阪焼ヲ云)萬治已降其製二種アリ一ハ土質粗ク白釉微紅ヲ帶ル一
 種ノ陶器ニシテ之レニ彩画ヲ着シ一ハ土質密ニ釉色青白ニシテ
 之ニ青華ヲ着シ後彩画ヲ恰モ肥前製器ニ青綠黃紫ノ彩画ヲ爲ス
 モノ、如シ文化ニ至リ吉田屋窯ノ製器ハ陶質ニシテ試ニ之ヲ破
 碎スレハ土質殊ニ粗ク坏心淡黒ニシテ光澤ナシ之ニ燒青ヲ用井
 テ画キ青黃綠紫ノ軟釉ヲ製過スルモノナリ其八郎様ト稱スル金
 彩赤繪ヲ付スルニ暨テハ陶ニ非ス磁ニ非ス實ニ一種ノ石器ニシ
 テ他ニ比類ナキモノナリ今日ノ製器ヲ閱スルニ此種ノ如キハ甚
 タ稀ニシテ吉田屋窯ノ器ニ摸倣スルモノ、外ハ皆純粹ノ磁器ニ
 改進スルニ至レリ其變革略此ノ如シ次ニ每郡區ヲ分ツテ其創始

沿革ヲ述ヘ且毎工ノ履歴ヲ掲ケントス
 江沼郡ハ九谷窯ノ根本ナリ(前ニ述ル所ノ如シ)全郡大日山麓九谷
 村領ニ長土ヲ發見シ築窯スルニ始リ爾後屢隆替アリ吉田屋傳右
 衛門其廢絶ヲ歎シ文化七年九谷村川向ノ地ニ陶窯ヲ再築スルモ
 山路險惡ニシテ運搬不便ナルヲ以テ全十一年窯ヲ山代村越中谷
 ニ移シ宮本宇右衛門ヲシテ主管セシム之ヲ九谷二代ノ窯元ト云
 天保間宇右衛門ノ兄理左衛門此窯ヲ繼續ス之ヲ三代ノ窯元トス
 時ニ飯田屋八郎右衛門ト云モノ此窯ニ通學シテ陶画ヲ事トシ遂
 ニ古九谷赤繪ニ據リ一種ノ赤繪ヲ創製ス其製赤酸化鉄ヲ以テ織
 密ナル紋様ヲ描キ其上ニ金線ヲ畫ス之ヲ八郎様ト呼フ今日世ニ
 行ハレテ九谷赤繪ト稱セラルハモノ皆此時ニ溯ル(八郎右衛門ハ
 嘉永二年ニ病没ス)宮本屋ノ業衰ルニ當リ三藤文次郎藤懸八十城
 等之ヲ繼續スルモ數年ナラスシテ塚谷淺(竹軒ト號ス)大藏清七壽

樂ト號スニ讓ル二人別ニ築窯シテ其盛大ヲ謀ル是ヲ五代ノ窯元
 トス明治十二年飛鳥井清カ九谷陶器會社ヲ創立スルニ會シ此兩
 窯ヲ購ヒ以テ六代ノ窯元ト爲レリ
 九谷陶器會社ハ大聖寺本町ニ在リ其舊社長タル大聖寺藩士族飛
 鳥井清ハ工業ニ熱心ナルモノニシテ明治九年米國費府大博覽會
 ノ舉アルヤ金澤ノ商圓中孫平ニ從テ渡航シ歸來九谷陶器高岡金
 澤銅器ノ振作セサル可カラサルヲ思ヒ獎勵頗ル努メタリ全十二
 年石川縣令ノ内諭ヲ得テ竟ニ此社ヲ創立シ身社長ノ撰ニ當リテ
 其事業ヲ確定シ前窯ノ所有主タル大藏清七塚谷淺ノ男六三郎ヲ
 陶工部ノ主管ニ竹内吟秋淺井一毫ヲ画工部ノ主管ニ充テ青赤兩
 様ノ古九谷器ヲ試製シテ本業ノ改良ヲ致シ第二回内國勸業博覽
 會ニ有功二等ノ賞牌ヲ受領シ十七年奈良博覽會岩手縣博覽會ニ
 出品シテ各一等賞ヲ得タリ

竹内吟秋ハ舊大聖寺藩士族ニシテ大聖寺鷹匠町ニ住ス明治十一年仕ヲ致シ陶画ヲ專修ス頃日九谷陶器ノ名ハ八郎様ノ密描赤繪ニ歸シ偶青画アレハ亦吉田屋窯ノ樊籬ヲ脱スルコトナク所謂古九谷ノ陶法ヲ傳フルモノナシ吟秋謂テク宜ク回復擴張スルヘシト爰ニ用彩釉法ヲ考ヘ會心スル所アリテ維新舍ヲ設立シ生徒ニ課シテ陶画法ヲ授ケ飛鳥井清ノ九谷陶器會社ヲ立ルニ會シ其請ニ應シテ維新舍ヲ捨テ生徒ヲ率テ會社ニ入り創業ノ事務ヲ所理シ陶畫工ヲ主管ス事緒ニ就クノ後退身自營ス第二回内國勸業博覽會ニ有功三等賞牌十七年岩手縣博覽會ニ二等賞ヲ獲タリ爾后飛鳥井清ニ謀リ益々九谷陶器ノ改良ヲ事トスルモ清ノ病没スルニ遭ヒ吟秋陶器會社ヲ管理シ兼テ全業者ヲ獎勵スト云

淺井一毫ハ大聖寺鍛冶町ニ住ス嘉永三年歲十四ニシテ窯元宮本屋理右衛門ニ通學シ八郎右衛門ノ遺風ヲ慕ヒ專ラ赤繪ヲ習ヒ竟

ニ八郎右衛門所藏ノ画譜ヲ傳ヘ陶画ニ從事スルコト三十七年明治十二年九谷陶器會社ニ入テ畫工ヲ主管シ十四年全社ノ改革ニ際シ退去自營ス第一回内國博覽會ニ鳳紋賞牌第二回ニ有功三等ノ賞牌ヲ獲タリ

能口清次郎ハ大聖寺荒町ニ住シ陶畫ヲ業トス工人六名生徒四名ヲ置キ盛ニ著書スト云

須田與三郎ハ山代村ニ住ス九谷陶器會社青華器ノ畫工ナリ明治八年此縣ノ勸業試驗場ニ入り同場ノ傭工西京人西村多四郎ニ就キ青華畫ヲ修ム同十三年卒業スル以來他ノ傭工トナレリ

大藏清七ハ山代村ニ住ス曾テ業ヲ松山彦左衛門ニ學ヒ又永樂善五郎ニ就テ其術ヲ修ム明治二年越中谷四代ノ窯元藤懸八十城ノ廢業セントスルニ際シ其讓與ヲ受ケ江沼九谷五代窯元トナリ營業ス九谷陶器會社ノ創立ニ遭ヒ遂ニ此窯ヲ該社ニ讓リ入テ陶工

部ヲ主管ス十四年會社改革ノ時更ニ窯ヲ越中谷ニ築キ自營スト云
 北出宇與門木谷半與門ノ二人ハ榮谷村ニ住ス共ニ大藏清七ノ徒弟ニシテ明治八年同村牛ヶ谷ニ築窯自營スト云フ
 東野總次郎前川忠五郎ノ二人ハ勅使村ニ住シ南出文三郎ハ茶屋村ニ住ス共ニ大藏清七ノ徒弟ニシテ後卒業シ各自村ニ築窯スト云
 中野忠次郎ハ上野村ノ陶畫工ナリ慶應元年九谷莊三ノ門ニ入り明治七年卒業自營ス忠次郎ノ門弟ニ上田友吉前野三太郎等アリ皆同村ニ住シ自營ス
 以上江沼郡ノ坏匠ハ九谷荒谷五國寺鍋谷諸村ノ石及ヒ隨所ノ粘土ヲ采テ原料トスト云
 能美郡磁器ノ創始ハ實ニ安永八年ニアリ全郡若杉村ノ村長ニ林

能美

八兵衛ト云モノアリ全郡花阪村六兵衛山(一ニ曰モロミ山)ニ磁器ノ原料ヲ發見ス時ニ肥前島原ノ八本多貞吉ト云モノアリ諸國ヲ遊歴シテ金澤ニ來リ春日山ノ陶家ニ割シ後チ林八兵衛ノ家ニ客タリ陶磁ヲ善クス(全郡ニ原石ヲ發見スル實ハ貞吉ナリト云)八兵衛貞吉ヲシテ有田様ノ登窯ヲ築キ製磁ノ業ニ從事セシム寛政八年貞吉花阪村アザラヤマニ原石ヲ發見シ六兵衛山ノモノニ混和シテ逾々精ヲ加ヘ多ク青華器ヲ製セリ(當時造ル所ノモノ磁器ト稱スレド實ハ一種ノ石器ナリ)文政二年貞吉病沒ス年六十一業ヲ取ル丁四十有一年二子アリ清兵衛榮吉ト云フ文政八年二子其徒弟ニ謀リ貞吉ノ履歷ヲ記シテ一碑ヲ若杉八幡ノ村界ニ建ツ後年其家系絶ルト云貞吉卒スルノ後三年ニシテ八兵衛其業ヲ罷ム全七年金澤ノ人橋本屋安兵衛遺業ヲ襲キ貞吉ノ徒弟八兵衛久兵衛忠次郎ヲ指揮シテ青華器及白磁ヲ製造ス國主前田氏大ニ資ヲ與ヘ

之ヲ獎勵セリ全九年京師ノ名工青木八十八(木米下云)茲ヨリ來遊シ
 磁器ヲ製ス全十年阿波ノ畫工勇次郎ト云モノ來テ赤繪ヲ描ク頗
 ル巧ナリ(時人稱シテ赤繪ノ勇次郎ト云)爾後陶畫工勇次郎ノ畫風
 ナ學ヒ漸次傳播スルニ至レリ是ニ由テ之ヲ觀レハ能美郡ノ磁器
 ハ江沼九谷ノ傳ニ據ラヌ獨派ノモノニシテ其磁器ニ類セル一種
 ノ石器ヲ創製セルモ亦江沼九谷ノ諸窯ニ比スレハ最モ早キヲ知
 ル可キナリ

松本佐平ハ小松龍助町ニ住スル陶畫工ナリ其父菊三郎天保六年
 同町粟生屋源右衛門ニ就キ樂燒ヲ法ヲ傳ヘ又九谷陶畫ヲ全郡佐
 野村齋田伊三郎ニ習ヒ后ナ京攝ノ陶場ニ修學シ竟ニ全郡一針村
 ノ陶場ニ營業ス居ルコト二年今ノ地ニ移居ス曾テ古九谷青畫ヲ法
 ナ起サントシ蓮代寺村ノ陶窯ニ就キ專ラ青畫ヲ描ク此窯製スル
 所ノモノハ隣郡山代村吉田屋窯ニ專製スル交趾様ノ坏ニ倣フ粟

生屋源右衛門之カ職長タリ此製器(青九谷)大ニ世ニ行ハル後ナ隣
 村本江村ニ移窯シ三年ニシテ休廢スト云當時佐平ハ專ラ赤繪ノ
 法ヲ修メタリ近頃之カ改良ヲ圖リ明治十年金澤ノ畫工徳田適(寛
 所ト號ス)ヲ自家ニ聘シ先ツ畫ヲ學フコト三年新古ノ畫幅書籍及ヒ
 陶磁ノ鑒本ヲ蒐集シ或ハ有志者ニ謀リテ展覽會ヲ開キ又八幡村
 松原新助等ニ陶窯ノ改良ヲ勸メ遂ニ改築ノ功ヲ奏シ資ヲ助ケテ
 製坏改良ヲ謀ラシム又商工弊害ノ矯正ヲ圖リ明治十四年企業ノ
 盟約ヲ設ケテ一郡ノ團結ヲ遂ケ陶畫ニ從事スル工人生徒ノ試験
 法ヲ設ケテ實試スルコト既ニ二回又品評會ヲ興シテ企業相會ニ研
 究意ヲスト夫レ佐平ノ能ク此ノ如キモノハ管廳勸誘ノ善キハ言
 フヲ竣スト雖モ一ハ納富介次郎カ明治十五年該地ニ赴キテ其方
 法ヲ傳ヘ團結ノ利益ヲ衆工ニ説キ自カラ試験ヲ行ヒ品評ヲ爲セ
 シニ起因スルモノニシテ佐平其他ノ有志者カ奮勵ノ氣象ヲ鞏固

ナラシメ能ク所思ヲ遂ルニ至ラシムルハ勸業課吏員宮崎豐次等
 其レ與リテ力アリト謂フ可キナリ
 石田平藏ハ小松泥町ノ陶器工ナリ文政七年父平吉若杉村橋本屋
 安兵衛ノ陶窯ニ到リ彼ノ赤繪勇次郎ニ就テ陶器ヲ修メ后ヲ丹波
 龜山ニ往キ製陶ニ從事ス天保二年越前阪井ニ赴キ又大聖寺吉田
 屋窯ニ入り天保四年若杉村ニ開業シ后ヲ今ノ地ニ移ル平藏業ヲ
 父ニ受ケ專ラ青九谷ノ法ヲ修ム明治ノ初石川郡松任村ノ畫工松
 泰ニ就キ畫術ヲ研究シ漸ク筆勢畫ヲ試ム明治十五年納富介次郎
 ノ陶器試驗ヲ觀テ其法ヲ習ヒ又松本佐平等ト謀リテ全業團結ノ
 局ヲ結ビ陶器改進ニ汲々タリト云
 酢屋久平ハ小松泥町ニ住スル陶商ナリ祖先已來米酢醸造ヲ業ト
 ス其父久元ト久平ト云退隱シテ久ト改ム陶業ニ志アリ文久元年
 本郷村粟生屋源右衛門所有ノ陶窯ヲ購ヒ數名ノ工人ヲ傭フテ磁

器ヲ製セシムルモ得失償ハス之ヲ廢ス慶應元年肥前尾張製陶磁
 販賣ノ業ヲ起ス明治十年以后九谷陶器ノ販路ヲ擴張セントシ先
 ヅ其改良ヲ圖ル十三年小松町ニ展觀會ノ舉アリ久該會ノ委員ニ
 加ハリ陳列ニ從事ス其品皆粗濫ニシテ精巧ノモノ甚ク少シ是ニ
 於テカ逾弊害ノ矯正セサル可カラサルヲ確信シ松本佐平石田平
 藏ニ謀リ純粹品ヲ齎シテ神戸ニ赴キ其賣路ヲ開ケリ明治十五年
 納富介次郎ニ會シテ其說ヲ聞キ全業盟約ヲ結フノ主唱者トナリ
 竟ニ其功ヲ奏セリ全十六年久隱居シテ神戸ノ出店ニ赴ク久平業
 ヲ父ニ承ケ益々改良ヲ要シテ松本佐平ニ謀リ品評會ヲ設ケテ諸
 工ヲ誘導スト云
 輕見宗次郎ハ小松茶屋町ノ陶商ナリ慶應中蚕絲商タリシモ加州
 著名ノ九谷陶器衰頽ニ歸センコトヲ憂ヒ明治十六年以後製陶改進
 ノ事ニ從事シ十七年二月陶磁ヲ專業トシ本年東京ニ支店ヲ開キ

益々九谷陶器販路ノ擴張ヲ圖ルト云
木村彌四郎ハ文久二年ヨリ石田平吉ニ就キ陶書ヲ學ビ明治十一
年自家小松本折町ニ開業ス
二木喜助ハ小松大文字町ニ住ス其家從來染工ナルヲ以テ紋様ヲ
描クノ道ヲ知ル明治六年歳甫メテ十二松本佐平ノ門ニ入り全十
三年其業ヲ卒フ尋テ松本ノ工人トナリ全十五年自家ニ錦窯ヲ築
クニ至レリト云
川尻喜平ハ小松寺町ニ住ス父七平ハ橋本屋ノ窯ニ從事シ赤繪勇
次部ノ書法ヲ學ビ弘化三年自カラ開業ス今工ハ安政四年石田平
吉ニ陶書ヲ學ヒ万延元年今ノ地ニ開業スト云
小槌重作ハ小松龍助町ノ骨董舖ナリ性書ヲ好ミ自カラ揮灑ス九
谷陶器ノ販路ヲ擴張スルコトニ從事スト云
此他小松ノ陶書工ニハ龍助町ニ竹中賢生佐々木梅松越田久平

皆松本佐平ノ徒弟ナリ全町ノ薄井駒次郎ハ松本ノ傭工トナリ
明治十六年開業自營シ京町ノ高田小太郎ハ書ヲ松本ニ學ヒ十七
年開業ス龍助町ノ一針與三松ハ下村甚三郎ニ學ヒ十七年七月卒
業ス全町ノ久々津徳松ハ木村彌四郎ニ習ヒ十六年開業ス全町ノ
神田次作ハ寺井村田中清助ニ學ヒ十年ニ開業スト而シテ尙ホ二
十餘名ノ出品アリタリト雖モ其長ヲ恐レテ姑ク省畧ニ付ス
綿野吉二ハ寺井村ノ陶商ナリ文政二年全郡小野村ニ敷六右衛門
ト云フモノアリ其居村ニ陶窯ヲ築キ川尻嘉平等磁器ヲ製シ書工
九谷莊三齋田道開北市屋平吉(石田氏)川尻屋七兵衛等皆茲ニ從事
ス然レモ販路開ケス大ニ困逼ス六右衛門業ヲ營ムコト二十餘年窯
ヲ一針村善太夫ニ讓ル善太夫亦十餘年ニシテ罷メ此窯遂ニ廢絶
ス弘化元年綿野吉二ノ父源右衛門九谷陶器ノ擴張ヲ圖リ他ノ業
務ヲ廢シテ倉谷嘉六ト相議シ共ニ陶器ノ賣路ヲ開ケリ文久三年

全郡五國寺村ニ瓦石ヲ發見スルニ會シ各地ノ有志ニ勸メテ各所
 ニ陶窯ヲ開ク運代寺本郷八幡ノ諸村皆此時ニ創始ス是ヲ以テ寺
 井村ノ商估陶器店ヲ開クモノ數十戸ノ多キニ及ヘリ爾後未曾有
 ノ販路閉塞ヲ來セル時アリテ全業十ノ八九其店ヲ閉鎖ス源右衛
 門撓マス益々販路ノ開通ヲ謀ル明治四五年ニ至ツテ稍外國輸出
 ノ途ニ就キシモ猶未ク盛昌ト謂フ可ガラス明治九年米國博覽會
 ニ出品ノ後求需日月ニ多キヲ加ヘ其三月兵庫湊町ニ支店ヲ設置
 ノ尋テ讚岐多度津港ニ一店ヲ置キ十年六月神戸港ニ支店ヲ設ク
 爾後二三年ヲ經ルニ隨ヒ粗造濫賣ノ弊百出ノ販路塞リ物價下リ
 亦從前ノ面目ナシ十三年九月兵庫神戸ノ二店ヲ鎖シテ更ニ横濱
 ニ一店ヲ開ク十五年九谷陶商中締盟ノ舉ニ際シ吉二父業ヲ繼キ
 之カ頭取ノ撰ニ當リ十六年四月香港ニ至リ其近傍ノ製陶所市場
 ナ巡視シ爾後海外ニ管理者ヲ送り以テ九谷陶器ノ販路ヲ擴張セ

シトスト云

綿谷平兵衛ハ寺井村ノ陶商ナリ平兵衛ノ祖父平兵衛ハ天保中ノ
 陶器商ナリ親戚九谷庄三ハ陶畫ヲ修メ其弟嘉平ハ坏工タリ倉谷
 嘉六ハ陶商ヲ營ム陶業ノ稍起ルニ至ルモ未ク盛昌ノ域ニ達セズ
 弘化元年親戚三名ニ謀リ創メテ九谷陶器ノ商業ヲ開ク文久中五
 國寺村ノ原石ヲ得各地ノ陶業開クニ及ヒ頗ル盛況ニシテ陶畫
 工ハ數百人ノ多キニ至リ商估モ亦數十戸ヲ増加ス然レモ二三年
 ニシテ忽チ瓦解シ商店多ク閉鎖ス慶應元年平兵衛卒シ其子平兵
 衛業ヲ繼キ大ニ改良ヲ企圖ス明治十五年全業團結締盟シ輸出ノ
 増加ヲ計ルカ爲メ十五年十二月平兵衛隱居シ今ノ平兵衛家政ヲ
 取リ十六年十二月横濱本町ニ開業スト云
 九谷庄三ハ寺井村ノ陶畫工ナリ其先農家ニ出ツ曾祖ヲ庄助ト云
 ヒ祖ヲ庄三郎ト云フ庄三郎農事ヲ省セス常ニ畫ヲ嗜ミ閑アレハ

畫術ヲ學ヒテ遂ニ染工ノ上繪或ハ陶器ニ燒青畫ヲ着シ之ヲ業ト
 スルニ至レリ年四十二ニシテ没ス是ヲ初代トス二代庄三ハ文化
 十三年十二月ニ生ル庄三郎ノ没スルヤ庄三尙幼ナリ時ニ若杉村
 橋本屋窯ニ勇次郎ト云フモノアリテ陶畫ヲ善クス赤繪ニ巧ナリ
 庄三郎若杉村ノ叔父某ニ養ハルヲ以テ之ニ通學スルコト九箇月
 其技上達ス窯主其天稟ヲ稱シテ入學セシメ學資飯價ヲ要セス青
 華畫ニ從事スルコト六年江沼郡山代村宮本屋利八ノ家ニ入り赤繪
 ヲ學ブコト一年半天保四年能登小山西照寺ノ僧庄三ヲ携歸シ陶窯
 ヲ設ケテ陶器ヲ製シ庄三ヲシテ着畫セシム又居ルコト一年余爾後
 各地ニ遊ヒ陶土彩料ヲ試験ス偶火打谷村ノ山間ニ黒色ノ土ヲ得
 再四之ヲ試ムルニ黒色鮮明ニシテ頗ル着畫ニ適ス是所謂能登燒
 青ニシテ今日九谷畫工一般ノ必需品トナルモノハ實ニ庄三ノ發
 見スル所トス又越中ニ遊ヒ數箇月ニシテ歸リ業ヲ開ク然レモ商

路狹隘僅ニ一擔ヲ製スレハ之ヲ携テ金澤ニ鬻クニ止マレリ故ニ
 得失相償ハス全村倉谷嘉六ノ陶商トナリ販路ヲ開クニ會シ又一
 富豪家ノ贊助ヲ得テ持据怠ラス天保十二年小野村敷六右衛門カ
 有田様ノ登窯ヲ築クニ及シテ庄三此窯ニ入り青華黒ヲ製ス文久
 三年堤防改築ノ舉アリ五國字村松谷ノ土ヲ采ル庄三曾テ此地土
 石ノ製磁ニ適スルヲ知ルト雖モ發掘ニ便ナラス此舉アルヲ聞キ
 十村役植田村田中三郎右衛門ノ巡檢スルニ隨行シテ之ヲ發見ス
 今日九谷磁器要用ノ材料ト爲ルモノ亦庄三ノ功績ナリ是ヨリ陶
 業日ニ旺シ月ニ盛ニ庄三ノ門ニ入り其畫陶ヲ受クルモノ十ヲ以
 テ數フルニ至ル庄三子ナシ弟子某ヲ養テ嗣ト爲ス今工庄三是ナ
 リ庄三年十一教ヲ其師庄三ニ受ケ年二十一ニシテ業ヲ卒シ明治
 十五年八月三代庄三没ス年六十八三代庄三業ヲ繼キ以テ今ニ至
 ル云

中川三作ハ大長野村ニ住シ陶畫ヲ業トス全村ノ農中川次郎右衛門ノ第四子ナリ文久三年二月歳十四ニシテ九谷庄三ニ師事シ七年ニシテ卒業ス明治三年自家ニ業ヲ開ク全五年金澤ノ畫師佐々木泉龍ヲ師トシ畫術ヲ講究シ全九年畫師飯山華亭ヲ師トシ又學フコ茲ニ四年華亭病没ス時ニ飛驒高山ノ畫士垣内有鄰來テ金澤ニ寓ス又之ニ就テ學ヒ以テ今ニ抵ル明治十五年納富介次郎陶畫生徒ノ試験ヲ爲スニ當リ仁作之レカ品評委員ト爲リ十六年一月カヲ全業規約ノ締盟ニ盡シ十七年第二回生徒試験ヲ行フニ當リ亦品評員ト爲リ勉メテ陶畫ヲ改進セントスト云

八木甚作ハ粟生村ノ陶畫工ニシテ文久三年全村市川嘉右衛門ニ學ヒ慶應二年ヨリ金澤内海吉造ニ從學ス明治四年自家ニ開業シ全十五年生徒試験ノ品評委員ト爲レリ

越塚甚藏ハ一針村ノ陶畫工ナリ万延元年辻重作ニ就キ修學スル

五年慶應元年ニ開業ス

橋田與三郎ハ佐野村ノ陶畫工ナリ齋田道閑ニ陶畫ヲ學ヒ慶應三年開業ス

松原新助ハ八幡村ニ自窯ヲ有スル陶工ナリ(窯元ト云)文政五年若杉村林八兵衛ノ窯業ヲ罷ルヤ橋本屋安兵衛之ヲ襲キ本多貞吉ノ徒弟陶工八兵衛九兵衛忠次郎等ヲシテ磁器ヲ製セシム天保七年陶工八兵衛(林トハ別ナリ)後ヲ窯主ノ家號ヲ受ケ橋本屋八兵衛ト云花阪村新山ニ原石ヲ得又全村八枚田ニ陶土ヲ檢出セル時ニ際シ此窯火ヲ失シ鳥有ニ歸ス大ニ村人ノ忌嫌ヲ來シ此年ヲ以テ隣村八幡村土山ニ移窯シ益業務ヲ擴張セリ是ヲ八幡村開業ノ創始トス新助業ヲ橋本屋八兵衛ニ受ケ文久元年佐野村中川源左衛門ノ窯場ニ赴キ陶法ヲ鍊磨シ山代其他各地陶場ノ傭工トナリ明治三年歸村シテ一窯ヲ開キ若杉村ノ窯元川尻嘉平ト相議シ數多ノ

工人ヲ養成シテ九谷陶器ノ盛大ヲ期ス此年阿部碧海ノ囑托ニ應
シ抑メテ外國輸出品ヲ製スルモ慣熟ナラサルヲ以テ苦嶽斜曲多
シ是ニ於テ逾奮勉シテ明治六年澳國博覽會出品ヲ製スルニ至リ
爾後外國輸出ノ諸器囑托日ニ加ハル全十五年全業川尻嘉平若藤
源次郎ニ商議シ居村金ケ市ニ一大圓窯ヲ創築ス當時宇都宮技長
ノ來遊ト納富介次郎ノ赴シアリテ試驗修業シテ良品ヲ製スルニ
至リ又陶工試驗法ヲ介次郎ニ承ケ之ヲ實試シ尋テ全業盟約ノ事
ニ關シテ川尻嘉平ト東西ニ奔走シ遂ニ其局ヲ甘結スト
川尻嘉平ハ若杉村ノ窯元ナリ初メ八幡村ノ窯元橋本屋安兵衛(若
杉村ヨリ八幡村ニ移窯ノ後ナルヲ以テ八幡村窯元ト云フナルヘ
シ)ニ就キ陶法ヲ學ヒ万延元年山代村ノ陶場ニ賃備シ窯主木崎千三
郎ノ教ヲ受シ後該窯爭起スルニ際シ江沼郡松山本郡佐野村及ヒ
其居村ノ諸窯ニ賃備シ明治元年遂ニ自窯ヲ築キ松厚新助ニ謀リ

爾後外國輸出ノ諸器ヲ製セリ全十三年縣廳嘉平ヲシテ九谷陶器
會社長飛鳥井清ニ同行シ肥前有田ニ赴キ製磁上ノ實檢ヲ爲サシ
ム嘉平能ク有田ノ製法ヲ見聞シ歸來第二回勸業博覽會出品ヲ製
ス十四年瀬戸ニ過リテ其陶法ヲ質シ又松原ニ謀ツテ共有ノ登窯
ヲ八幡村金ケ市ニ築ク爾後松原等ト共ニ生徒試驗全業團結ノ事
ニ關リ第二回生徒試驗ニハ其品評委員ト爲リ九谷陶器ノ改良ヲ
圖レリト云フ
若藤源次郎ハ若杉村ノ窯元ナリ文久元年山代村赤崎千三郎ノ窯
ニ就學シ又佐野村ノ窯元中川源左衛門ニ師事スル十三年後各處
ニ賃備シ慶應二年自窯ヲ開ク川尻松原ノ開窯ヲ得テ共ニ業務ノ
盛大ヲ圖リ九谷陶器ノ改良ヲ務メ遂ニ二工ト協同シテ八幡村ニ
登窯ヲ新築ス後全業ノ盟約ニ關シテ其局ヲ結ヘリ
若林彌作ハ若杉村ノ窯元ナリ文政元年其父彌右衛門幼ニシテ本

多貞吉ノ門ニ入ル翌二年貞吉卒ス其子清兵衛榮吉尙ホ業ヲ繼ク
 ナ以テ其教授ヲ得タリ二子不幸ニシテ卒シ窯モ亦廢ス彌右衛門
 奮然窯趾ニ一窯ヲ築キ業ヲ取ルヲ茲ニ六十八年常ニ貞吉ノ靈ヲ
 祭ル明治十七年石川縣書記官徳久某其碑ノ保存ヲ圖リ爲メニ若
 干金ヲ寄附スト云今工彌作文久元年父業ヲ繼キ明治二年肥前美
 濃西京ノ諸窯ヲ歴觀シ爾後改良ヲ圖ルト云
 倉重太助ハ湯谷村ノ窯元ニシテ慶應元年ニ開窯ス出品ノ土瓶ハ
 普通品ノ稍上位ニ屬スルモノナリ
 山本太平ハ湯谷村ノ窯元ナリ文久二年小松大文字町石田千吉ニ
 就キ修業スルヲ九年明治四年開窯ス
 中出千松石田權吉ノ二名ハ埴田村ノ窯元ニシテ共ニ明治十五年
 ニ開業スト云中出ノ窯ハ全村宮之谷ニ在リ
 高山吉右衛門ハ小野村ノ窯元ナリ敷六右衛門佐野村ニ磁材ヲ發

見シ文政二年五月藩廳ノ保護ヲ得テ築窯シ貞吉ノ徒弟八幡村ノ
 義兵衛粟生村ノ忠助等ヲシテ素磁ヲ作り鍋屋榮吉ヲシテ着書セ
 シム是ヲ此村築窯ノ始トス今工吉右衛門ハ六右衛門ノ子ナリ
 北村與三右衛門ハ小野村ノ窯元ニシテ其先農家ナリ慶應三年四
 月創メテ製陶ニ着手スルモ農間ノ餘業ニシテ且見聞少ナク澳國
 維納府出品ノ素磁ヲ燒製スルヲ始メトシテ博覽會アル毎ニ他ノ
 需求ニ應シテ調成スルモ未ダ美良ノモノヲ得ス十五年宇都宮工
 部技長及ヒ納富介次郎ノ到ルアリテ其窯法製法ヲ説クヲ聞キ心
 切ニ改良ヲ圖リ全縣松田與八郎ノ曾テ東京山下門内勸業寮試驗
 場ニ入り石羔型ノ用法ヲ傳ヘ又江戸川製陶所ニ在テ之ヲ實施ス
 ルモノナルヲ聞キ松田ヲ訪ヒ宇都宮技長竈窯改良説ノ筆記ヲ得
 ルモ松田其輕舉ス可カラサルヲ戒ム後ニ松田カ鹽竈ヲ改良スル
 ノ報告ヲ聞クニ薪材消費ノ減額十分ノ五ニ至ルモノアリ是ニ於

テ益陶窯改築ヲ決意シ十六年一月松田ヲ聘シテ先ッ素燒窯ノ改築ニ着手シ或ハ従前ノ法ヲ折衷シテ新窯始メテ成ル之ヲ試焚スルニ薪材百分ノ三十八ヲ減シ三時間ヲ短縮スルヲ得始メテ改良ノ急要ヲ知ル其十二月竟ニ本窯ノ火床ニ漏孔ヲ設置シ烟突ヲ建テ素燒窯ノ如クス十八年數回試験スルニ窯内火床ニ灰燼ヲ留メズ爲メニ空氣ノ流通ヲ得熱度隨テ高ク焰色鮮清ナルヲ以テ頗ル鎔解ノ度鑑查ノ便アリ製坯モ亦損壞少ナキヲ覺フ窯ノ改良既ニ此ニ至レハ製坯ノ改良亦無ル可カラズ再ヒ松田ニ謀リ其法ヲ傳ヘンリテ囑ス十七年春松田到リ專ラ石膏型ニ據テ器皿ヲ製ス然レモ之ヲ焚燒スレハ十ノ八九損壞ス蓋シ外套ノ製宜キヲ得ザルナリ因テ外器ヲ折衷改製シ始テ十分ノ七八着書ニ堪ヘキ器物ヲ製スルニ至レリト云

此他小野村横山宗次郎古府村濱秋清右衛門佐野村南仁三郎高橋

金澤

仁八山本千藏等皆窯元ニシテ白磁器ヲ製セリ

金澤區内ハ從來磁器ノ産出ナシ蓋シ天保間金澤藩士武田友圓ト云モノ春日山ニ陶窯ヲ開キ民山ト號スルヲ創トス明治七年五月該縣勸業試験場ノ設アリテ其分科中製陶ノ科目ヲ置キ造坯製釉燒窯着書及ヒ顔料ノ諸工ヲ雇ヒ生徒ヲ集メテ授業シ陶窯ヲ築造ス今岩花堂ノ有ニ歸スルモノ是ナリ此他區内陶窯ノ有無ハ得テ知ル可カラズ何者本會出品解説中唯此一窯ヲ檢出スルニ止マリ他ハ皆能美江沼兩郡ノ製ヲ取リ書彩ヲ施セル陶畫工ノ出品ノミナレバナリ

阿部碧海ハ舊金澤藩士族ニシテ味噌藏町ニ住シ今陶器商ヲ業トス維新前後九谷陶器ノ業頓ニ衰頽スルヲ憂ヒ明治二年碧海其邸ヲ開キテ陶場ニ充テ業室ヲ區分シテ每區工師ヲ置キ遍ク有名ノ陶畫工ヲ集メテ部長ト爲シ畫工生徒八十余名ヲ分チテ工師ニ附

屬シ別ニ窯室ヲ建テ錦窯ヲ築キ費用ヲ吝マズ良器ヲ造ラシム然
レモ能美郡諸窯ノ白磁ハ依然舊ヲ改メズ碧海爲メ肥前有田及
ヒ三河内製ノ磁器若干ヲ購ヒ之ヲ諸窯ニ配寄シテ鹽本ト爲シ自
カラ各村ノ間ニ奔走シテ改良ヲ説キ且外國輸出ニ適スル咖啡茶
具食皿菓皿酒鍾烟具ノ類ヲ造ラシムルモ固ヨリ創製不熟ナルヲ
以テ完形十ノ二三ニ過キサルモ棄廢ノ器物ヲ併セテ買收シ工人
ヲシテ搥屈セス漸ニシテ磁質描畫ノ較適合ヲ觀ルニ至ル碧海又
若杉村ノ陶窯ニ囑シテ三尺ノ花瓶ヲ造ラシム成ラズ既ニシテ二
尺五寸許ノ花瓶二個ヲ送り來ル因テ長大ノ錦窯ヲ築キ畫部長内
海吉造ニ描カシム一瓶先ツ成ル錦窯ノ巧甚タ誤ル更ニ一瓶ヲ試
ミテ成功ヲ得タリ現今容易ニ大器ヲ製スルハ爰ニ始メテ衆匠ノ
感覺ヲ發生スルノ結果トス明治三年以來製品ヲ齎シテ神戸長崎
ニ往來シ或ハ支店ヲ各地ニ開キ歐米需用ノ適否ヲ探知シ屢製趣

ヲ改良スルニ至テ始メテ囑需ヲ増殖シ全五年澳國出品ヲ製シテ
賞詞ヲ得又御器ノ咖啡具酒茶具ヲ製スルノ榮ヲ蒙ル夫レ此ノ
如キ現況ナルモ或ハ他商ノ猾策ニ陥リ或ハ製器ノ損破ニ遭ヒ之
ニ加フルニ商業ノ不熟ヲ以テシ得失ノ償ハサル其債萬ヲ以テ數
フルニ至リ遂ニ維持ノ方策ヲ失ヒ場ヲ閉テ工ヲ散シ家財ヲ併セ
テ負債ニ殉ス然リ而シテ尙未タ念ヲ陶磁ニ斷ツ能ハス一小店ヲ
補營シテ陶磁ヲ陳シ考案ヲ與ヘテ新器ヲ造ラシメ一回二回ノ内
國勸業博覽會及ヒ十一年佛國巴里博覽會ニ出品シ共ニ優等ノ賞
牌ヲ受ク但巴里ノ會ニ在テハ出品概テ賣約スルノ後暴風ノ災ニ
罹リテ列品悉ク破碎シ又一物ヲ全フセス實ニ不測ノ損敗ナリ全
十五年納富介次郎ノ縣ニ赴クヤ主トシテ商工團結ノ功用ヲ説ク
碧海夙ニ其意ヲ領シ爲メニ工商ノ間ニ奔走シ又時好ノ遷移ヲ考
ヘテ物品ノ面目ヲ一新セシメテ圖リ有志ノ諸工ヲ會シテ計畫セ

シメ以テ今日ノ改良ヲ致スト云 眞此履歷ヲ記スルニ當リ涙涕先
ツ數行下レリ然ル所以ノモノハ何ソ 眞ノ身上頗ル之ト相似タレ
ハナリ 眞囊ニ納富介次郎ヲ贊シテ江戸川製陶所ヲ創立セシメ河
原忠次郎ト共ニ各地諸窯ノ生徒ヲ養ヒ石膏型ノ用法ヨリ燒窯ノ
得失原土用釉ノ鍊和ニ至ルマテ一々之ヲ傳習シ創メテ全國ノ陶
場ニ石窯型ノ便益ヲ知ラシム然リ而シテ此舉タル固ヨリ射利ノ
計畫ニアラス唯陶家ニ裨益シテ國利ノ増進ヲ望ムニ外ナラサレ
ハ收支ノ償ハサルハ 眞ノ豫想スル所如何セシ經費胸算外ニ出テ
之ニ加フルニ場ハ風災ニ罹リ自家ハ祝融ノ怒リニ遭ヒ遂ニ維谷
ヲ訴テ瓦崩スルニ至レリ碧海ノ辛苦ハ 眞能ク之ヲ知ル碧海亦 眞
ノ辛苦ヲ知ル可シ涙涕ノ下ル其レ豈偶然ナランヤ
内海吉造ハ河原町ニ住スル陶畫工ナリ初代丈右衛門家號ヲ鍋屋
ト云江沼郡ニ住シテ村吏タリ常ニ陶畫ヲ學ヒ寶曆中此ヲ本業ト

シ三代ノ丈助ハ丈右衛門ノ男ナリ金澤ノ人森寬齋ニ北宗畫ヲ學
ヒ自カラ松下堂黃影ト號ス寛政中江沼郡九谷ニ陶畫ヲ業トス赤
繪ハ萬曆風ニ據リ青畫ハ交趾ニ倣フ後能美郡若杉村ニ轉シ又小
松驛ニ移リ時ニ九谷ニ赴テ業ヲ取リ子弟ニ教ウ三代吉兵衛松下
堂文篋ト號ス金澤春日山ノ陶家武田民山ノ招キニ應シ天保十一
年金澤ニ移居シ傍ラ門生ヲ教授ス嘉永中金澤小立野ナル辰巳屋
某石川郡熊走山ニ開窯スルニ際シテ之ヲ助ケ往テ畫事ヲ監シ後
又歸テ營業ス今工吉造ハ四代ナリ幼ヨリ父ニ學ヒ嘉永三年金澤
藩ノ畫師佐々木泉竜ニ就テ修學シ松齡堂陶山ト號ス慶應三年金
澤ノ陶商悉ク九谷赤畫ノ畫工ヲ招集シ職業研究ヲ爲セシ時吉造
頭取ノ撰ニ當リ後阿部碧海ノ工場ニ工長ト爲リ又九谷錦窯ヲ改
良シ赤顔料ノ用法ヲ新ニシ明治十三年ニ畫工ヲ拔擢シテ爲絢社
ヲ立テ社長ノ撰ニ當リテ計畫宜キヲ得タリ干今三十名ノ門生ニ

教授スト云
 國中孫平ハ片町ノ一商ニシテ加能越三國ノ物産ハ其手ニ上リ内
 外市場ニ販賣ヲ試ミサルモノナシ最モ九谷陶器金澤高岡ノ銅器
 及ヒ蚕糸ニ熱心シテ幾回カ改良振作ノ實効ヲ奏シテ三國ノ物産
 ト休戚ヲ俱ニセントスル精神ハ今茲ニ喋々スルヲ須タス世人ノ
 之ヲ知ルル必^眞ヨリモ詳カナルモノアルナリ
 錦木太平ハ下堤町ノ陶器商ナリ文政元年ヨリ太平ノ先代此業ヲ
 開ケリ安政五年金澤藩物産方ノ諭示ニ隨ヒ金澤下新町ニ九谷燒
 工場陶器問屋ヲ置キ同業ノ盟約ヲ爲シ金澤市街ノ赤番工ヲ一
 二集メ分業法ヲ以テ製造ス當時内海吉造ヲ以テ番工頭取ト爲シ
 精品ヲ製シテ長崎等ニ輸致ス明治二年此盟約ヲ解キ離散セリ現
 今職工ヲ増加シテ時好ヲ趁ヒ製造ノ隆昌ヲ圖ルト云
 松田與八郎ハ舊金澤藩ノ士族ニシテ觀音町ニ住ス明治八年該縣

勸業試驗場費ヲ以テ生徒ヲ東京ニ派シ澳國維納府大博覽會中傳
 習事業ノ再傳ヲ受ケンカ爲メ山下博覽會事務局ノ實施試驗所ニ
 入ラシム與八郎亦生徒ノ一人ニシテ納富介次郎河原忠次郎ニ就
 キ製陶ノ術石膏型ノ用法ヲ學フ全九年該縣此傳習生徒ヲ罷ムル
 ニ遭ヒ更ニ自費留學ス全十年官實施試驗ノ業ヲ廢ス納富介次郎
 ノ江戸川製陶所ヲ建ルヤ試驗所ノ事業中廢シ石膏型用法ヲシテ
 煙滅ニ歸セシメス且生徒ノ企望ヲ空フセサラシカ爲メナルヲ以
 テ茲ニ舊新生徒ヲ養成シテ其法ヲ傳フ與八郎亦製陶所ニ入リ業
 ヲ修ムルモ此年十二月與八郎該縣勸業試驗場陶器授業師ト爲リ
 傳習ノ業ヲ卒ヘスシテ歸リ該場ニ在テ傳習ノ陶法ヲ施行ス是ヲ
 該地石膏型ヲ用ウルノ創始トス現ニ宮内省調度肉皿等ノ該地製
 造ニ係ルモノハ皆松田ノ傳フル石膏型製ニシテ功用ノ速カナル
 其レ徵ス可シ全十三年該試驗場ノ廢止トナルヤ士族結社ニ原品

器械ノ購買ヲ請ヒ該場ヲ借與シテ岩花堂ト稱シ士族ノ子弟ニ授業ス與八郎社員ト爲リ陶器部ニ從事ス十五年宇都宮工部權大技長該縣ニ赴キ陶窯改良ヲ説ク與八郎共圖ヲ寫シ其説ヲ筆記シ先ツ岩花堂ノ窯ヲ修シ後小野村ノ窯元北村與三右衛門ノ窯ヲ改造ス十五年十一月八幡村金ケ市ノ陶場ナル松原川尻若藤等ノ囑ニ因リ歐洲風ノ蹴轆轤壹基ヲ貸與シ石膏型ヲ用ヰテ肉皿等ヲ造リ之ヲ試燒シタリ而シテ其結果ヲ知ラスト雖モ今日所製ノ肉皿ハ多ク石膏型ニ成ルヲ見レハ爾後其法ニ據ルモノトス十七年七月小野村ニ到リ石膏型製陶器業ヲ興シ旁ラ北村ノ工場ヲ管理ス但此村ニ此業ヲ興スハ前年北村ノ依囑アルモ當時鹽竈改良ノ命ヲ得テ能登ニ到リ歸來其約ヲ履ムニ由ルト云

岩花堂ハ上柿木島新建ニアリ元石川縣勸業試驗場ナリ明治十三年三月士族横濱宜徳與村政佑士族授産ノ方法ヲ設ケ該場中ノ原

品器具購求ヲ請フテ允許ヲ得該場ヲ借受シテ業ヲ開キ後社ト爲シ岩花堂ト名ク蓋シ九谷陶ノ原石ハ江沼郡九谷村岩花山産出シ以テ第一ノ材ト爲スニ取ルナリ

清水清閑ハ石浦町ニ住スル陶書工ナリ嘉永元年ニ開業ス此工殊ニ密拙ニ巧ナリ

赤丸雪山ハ片町ノ陶書工ナリ慶應元年金澤ノ陶書工高山嵩山ニ謀リ其家ニ工場ヲ設ケ能美郡ノ陶書工ヲ募集シ相共ニ赤繪器ヲ製ス明治五年分離シテ自家ニ工場ヲ開キ自カラ雪山堂ト稱セリ今傭工生徒ヲ合セ四十餘名ヲ養成スト云

竹内安久ハ彦三五番町ノ陶書工ナリ笹田藏二ノ門人ニシテ明治四年開業シ誠山堂ト稱ス今生徒十七八名ヲ教育スト云

金子誠馬ハ長町五番町ノ士族ニシテ陶書ヲ業トス其男ヲ佐太郎ト云フ本年十二歳密拙ヲ善クシ兼テ考按奇巧ナルモノナリ

友田安清ハ松本町ノ陶畫工ナリ明治五年畫ニ池田九華ニ師事ス
 師没スルノ後陶畫工飯山他家次ニ就キ始メテ陶畫ヲ學ヒ紋様及
 ヒ彩料調和法ノ如キハ教オ内海吉造ニ受ク全十四年自家ニ業ヲ
 取リ今猶十五名ノ生徒ニ教授スト云
 宮莊一藤ハ高岡町ノ陶畫工ナリ池田九華ニ隨テ畫ヲ學フコト五年
 畫事ヲ以テ業トス明治二年陶畫工トナル初メ北丘堂ト云ヒ今北
 山堂ト改ム
 松原太三郎ハ白銀町ニ住スル陶器商ナリ明治八年開業シ全九年
 横濱ニ支店ヲ設ク現今宮莊一藤松下市太郎笠間彌一郎其他十二
 名ノ画工ノ自宅ニ托シ六十余名ノ工人ヲ僱使シテ器物ヲ製セシ
 ムト云
 小寺藤兵衛ハ池田町四番町ニ住スル陶画工ナリ幼ニシテ畫ヲ好
 ム其父喜左衛門家貧ニシテ毎ニ學資ナキヲ憾ム藤兵衛意トナリ

ス染繪工高木伊右衛門ノ家ニ往來シ繪畫ヲ觀ルヲ娛樂トス十歲
 ニシテ狩野派ノ畫人松浪景榮ニ就キ始メテ畫事ヲ學フ藤兵衛謂
 ラク尋常畫工タル可カラス苟モ繪畫ヲ要スル製品ハ或ハ圖案ヲ
 造リ或ハ直ニ描キ以テ百工ノ考案家タル可シト安政三年佐々
 木泉龍(金澤藩ノ畫員)ノ門ニ入り刻苦勵精シ竟ニ門生ノ主坐ヲ占
 ルニ至ル慶應元年松根屋長左衛門(金澤藩染畫ノ用ヲ勤ムル者)ノ
 囑需ニ由リ染畫ノ圖案ヲ作ル其畫流派ノ筆意ヲ以テシ敢テ染畫
 ノ舊慣ニ據ラス時人之ヲ賞シテ爲メニ染畫ノ販路ヲ廣充ス是ニ
 於テカ染畫工ノ其門ニ入ルモノ日ニ加ル尋テ大聖寺ノ染畫工石
 田茂平(大聖寺藩ノ用ヲ勤ムルモノ)ノ招キニ應シ大聖寺ニ赴キ染
 畫ヲ一變シ生徒ヲ教授ス後七尾染畫工ノ聘ニ應シ又往ク明治二
 年阿部碧海ノ陶畫工場ヲ創スルヤ往テ之ニ從事シ描畫ノ一部ヲ
 統理シ八年以後勸業場ノ陶畫教授ニ舉ケラレ十三年岩花堂陶畫

部ヲ統理シ兼テ生徒ニ教ウ十五年納富介次郎該縣ニ赴キ藤兵衛等ヲシテ陶器ノ圖案ヲ作ラシム十六年該縣勸業博物館臨時開館ニ際シ出品中著名ノ古器及ヒ摸範ト爲ル可キモノヲ摹寫シ之ヲ該館ニ蓄フ今自家ニ在テ繪畫ヲ生徒ニ授クト云亦九谷陶畫家中ノ良工ナリ

此他金澤區内ノ陶畫工及ヒ陶商ニシテ工ヲ兼テルモノ尙ホ十三四名ノ出品アリタルニ稍尋常ニ近キヲ以テ此卷ニ歴舉セズ

第廿二 福井縣

越前國坂井港ニ在テ製陶ノ創始ハ明和年間坂井郡喜寶町札場嘉右衛門ト云モノ京都ニ赴キ樂燒ノ法ヲ傳ヘ歸リ此業ヲ興スニ由ル二代ヲ太平ト云ヒ三代ヲ半左衛門ト云ヒ四代ヲ半三郎ト云ヒ五代ハ即チ今工半次郎ナリ半左衛門ノ時ニ至リ國産ノ地位ヲ占メ札場燒ト稱セラレ半三郎ノ時九谷燒ヲ試製セリト今工半次郎

ハ原土ヲ同郡陣ヶ岡ニ取リ捏造ヲ專ラトシ當時ノ樂陶法ニ據ラズ雲鶴青磁ニ擬似スル陶器ヲ製セリ

同國丹生郡小曾原村山内伊三郎ハ同村猿橋ト云フ地ニ往昔ノ窯趾今尙ホ存スルモ其久廢ヲ悼ミ明治九年有志者ト謀リテ新窯ヲ築キ近處ノ土ヲ用ヰテ製陶ス製作釉料略長門ノ深川燒ニ類スルモノアリテ技術健快ナリ

若狹國遠敷郡三宅村小西龜吉造ル所ノ土器ハ嘉元元年其養父藤兵衛ノ創製ニ係リ同村北下袋ノ地ニ小窯ヲ築キ村內森前ト稱スル田地ノ底土ヲ取リ日ノ岡ヲ合和シテ赭黑色ナル無釉ノ手捏小器ヲ製ス未タ巧熟ト云フニ至ラズ

第廿三 島根縣

樂山窯ハ出雲國島根郡西川津村ニ在リ地ヲ樂山ト云フ因テ名ク慶安中ニ創起ス延寶中長門ノ人倉崎權兵衛重義ト云モノアリ長

門松本ノ陶工高麗左衛門ノ門弟ニシテ製陶ヲ善ク松江侯之ヲ
 聞キ長州侯ニ依頼シ召テ陶師トナシ樂山窯ヲ改良セシム權兵衛
 乃チ長門某村ノ粘土ト周防某山ノ釉石トヲ齎シ來リ製陶ニ從事
 スルト十八年元祿七年病没ス嗣子尙幼ニシテ其業ヲ繼シ能ハス
 權兵衛ノ門弟加田半六ト云モノ藝キニ長門ヨリ從ヒ來ル亦製陶
 ニ巧ナリ侯之ヲ擧テ權兵衛ニ代ラシム亦二代ニシテ絶ユ
 寛政中國主松平治郷致仕シテ不味ト號ス茶事ヲ善クシ自ラ茶式
 チ定ム人は是ヲ雲州流ト稱セリ(松江藩ニ於テハ御流行ト唱ヘタリ)
 治郷古器ノ鑒識ニ富ミ多ク其妙處ヲ取リ又自ラ意匠ヲ盡シ命シ
 テ茶用ノ諸器ヲ造ラシム(後世其品ヲ呼テ不味好ミト云フ)當時ノ
 陶工長岡住右衛門治郷ノ指揮ニ隨テ陶窯ヲ再興シ高麗傳ニ倣ヒ
 茶器ヲ製ス頗ル良工ノ名ヲ博セリ文化十三年住右衛門藩主ノ別
 墅ナル江戸大崎ノ園中ニ別窯ヲ築キ專ラ茶器ヲ造ル二代住右衛

門空齋ト號ス三代住右衛門皆樂山ニ在リ四代庄之助ト云フ今
 工長岡國ハ即五代ナリ年幼ナルヲ以テ祖父住右衛門陶事ヲ管理
 スト云フ是樂山窯ノ沿革ナリ而シテ今工製スル所ノ器物ハ皆祖
 宗ノ遺法ニ據リ同國大原郡三代村小畑産ノ白土ヲ坏トシ各種ノ
 釉料ヲ施シテ點茶用器ヲ造ル然レモ新意ヲ出スモノナシ
 布志名窯ハ同國意宇郡布志名村ニアリ明和元年船木與次兵衛村
 政(布志名判官ノ臣船木與兵衛次二十二代ノ孫)ノ創始スル所二代
 新藏安永二年ニ業ヲ繼キ三代覺三郎ハ享和三年ニ四代健右衛門ハ
 文政八年ニ繼續ス今工健右衛門ハ其五代トス初メ與次兵衛同郡
 福留村ニ住シ數代天目樂燒ヲ事トス寛延元年布志名村ニ移居シ
 其子平八嘉助新藏ト共ニ製陶ヲ業トシ竟ニ良土ヲ得テ新窯ヲ開
 キ軟釉光滑ナル陶器ヲ製出ス
 寛政中松平治郷大ニ陶業ヲ振起ス是ヨリ先キ寶曆中御立山ニ樂

燒工土屋善四郎芳方ト云ラモノアリ召テ陶師トナヌ安永中布志名
 〇移住シ此ニ至テ治郷ノ指揮ニ隨ヒ茶用雜器ヲ造ル當時巧手ノ
 名ヲ得タリ爾後布志名陶ノ名四方ニ傳播シ工人隨テ増加ス二代
 善四郎文化三年業ヲ繼キ三代善六ハ文政十二年ニ四代善六ハ安
 政元年ニ今工傳太郎ハ明治九年ニ繼續ス是五代ナリ即今他ノ備
 工トナルト云フ
 全村船木良右衛門ノ初代船木九藏ハ文化八年ニ開業シ二代夫助
 嘉永二年ニ業ヲ繼キ三代即チ今工良右衛門ハ慶應元年ニ繼續ス
 ト云其製スル所ノ器物ハ船木健右衛門等ニ同シ
 全村船木淺太郎ハ弘化二年其父平兵衛船木健右衛門ノ家ヨリ分
 戶シ明治十年今工業ヲ繼クト云其製品ハ健右衛門等ト同種ナリ
 同村澤太一郎ノ祖嘉助ハ寛政二年ニ開業シ二代市右衛門文化元
 年ニ業ヲ繼キ三代嘉助ハ天保十四年ニ五代太一郎則チ今工ハ明

治五年ニ繼續スト云フ製品船木健右衛門ニ同シ
 全村澤寅之助ノ祖先藤右衛門ハ寛政十二年嘉助ノ家ヨリ分戶開
 業シ二代藤右衛門ハ天保元年ニ三代藤右衛門ハ文久三年ニ繼續
 ス今工ニ至テ茲ニ四代船木健右衛門ト同種ノ物類ヲ製セリ
 全村永原永助ハ祖先與藏享和二年ニ開業シ二代與藏天保十年ニ
 之ヲ繼キ三代即チ今工永助元治元年繼續シ舊藩廳用ノ獻品等ヲ
 製セリ現今ハ他ノ備工トナルト云
 布志名窯ノ用土ハ樂山窯ノモノニ同シト雖モ製鍊細密ニシテ火
 度モ亦淺ク表釉極メテ軟滑ナルカ爲メニ光澤頗ル美ナリトス
 同郡松江堅町ノ製陶ハ明治十六年中同村高田讓太郎ノ創始スル
 所同郡古志原村乃木村津田村大原郡三代村ノ産土ヲ用テ茶器及
 ヒ雜器ヲ製スルト云
 同國能義郡西母里村隅田彌一兵衛ノ製スル砂器ハ原土ヲ同村字

井戸ノ畑地ニ採リ微細ノ砂ヲ合和ス明治十二年ノ創業ニシテ初
 メ五層ノ窯ヲ築ケルモ十四年二月深雪ノ爲メニ破壊シ十七年六
 月更ニ一窯ヲ築クモノニシテ未タ精塾ニ至ラズト云フ其製スル
 所ノ擬鉄器ノ如キハ頗ル佳ナルモノアリ
 同郡新町秦莊右衛門出品ノ青華磁器ハ明治五年但馬出石ノ陶工
 又助ト云モノヲ備使シテ創製スル所原石ヲ意宇郡星上山及能義
 郡上土佐村ノ奥谷ニ採リ土ヲ同郡富田村牧谷ニ取ル而シテ其工
 場ハ富田村盤谷ニ設クト云
 石見國美濃郡白上村野田庄太野田元藏ハ元長門阿武郡小畑村ノ
 人ニシテ今ヲ距ル二十六年即萬延元年白上村ニ磁石ヲ發見セ
 リ從來雲石二州ニ磁器ナキヲ以テ相謀テ本村ニ移居シ工場ヲ設
 ケ津和野藩物産方ノ附屬ト爲リ資金ノ貸與ヲ得テ製磁ヲ事トス
 而シテ其釉料ハ舊地小畑村ノモノヲ用ヅルモ其青華磁器ノ如キ

ハ未タ良質ト爲ヌヲ得ス
 同國邇摩郡那賀郡等ノ各村ニ於テハ製陶ヲ業トスルモノ居多ニ
 シテ一々之ヲ評論スルニ違アラズ因テ姑ク畧表ヲ製シテ坯質用
 釉ノ異同ヲ示ス

質	原	土	創業年月	地	名	人	名	製造高
陶質	溫泉津村粘土真砂土同村關 石出雲意宇郡來海村產	寶永年間	石見國邇摩郡小濱村	松村寬之助	五三六			
全	全	全	全	溫泉津村	森山理一郎	五三六		
全	全	全	全	全	多田長太郎	一四二一		
全	全	全	全	全	中島宗吾	六四〇		
全	全	全	全	全	多田三郎外四 名聯合窯	四八〇		
全	天河内村粘土真砂土溫泉津 村關石出雲產來海石	製瓦ノ餘業 明治十五年	全	馬鈴村	小川榮吉	一一四		
全	松代村粘土靜岡村真砂土	嘉永元年	全	松代村	石田嘉三郎	四六		

法ヲ受ケ爾後世々之ヲ業トスト云フ今工房造ハ稻器物ヲ製スル
 熟ス只坏質ノ少シク軟脆ナルヲ惜ム
 第廿四 鳥取縣
 因幡國八上郡久能寺村ノ製陶ハ今ヲ距ル一百六十年前京都ノ陶
 工六兵衛本村ニ來リ尾崎治郎右衛門(今工尾崎安五郎ノ祖)蘆澤與
 兵衛今工蘆澤梅藏ノ祖ノ二人ニ御室燒ノ陶法ヲ授ケタルニ擬リ
 爾後陶戸四家相競争シテ陶質品位ヲ改良シ藩主ノ保護ヲ得テ營
 業セシム慶應年間ニ至リ大ニ衰ヘ即今尾崎蘆澤ノ二戸アルニミ
 其製品ハ日用ノ粗雜器ナリ
 同郡牛戸村ノ陶窯ハ嘉永三年同村人山本佐平ノ創築ニ係ル佐平
 二年ニシテ罷ム時ニ同村ニ小林梅五郎ト云モノアリ初メ石見國
 那賀郡嘉久志村山形友右衛門ニ就テ石州風ノ陶法ヲ傳ヘ後ヲ佐
 平ノ備工タルヲ以テ此廢窯ヲ購得シ嘉永五年ニ再興シ村內大日

ノ下耕地ノ白土ヲ坏トシテ日用陶器ヲ製ス今工熊三郎ハ其子ナリ
 同郡曳田村ノ陶窯ハ安政三年同村田村甚次郎製瓦ヲ創起シ日用
 陶器ヲ兼製スルモ明治五年ニ至テ罷ム時ニ同村松田和平ト云モ
 ノ初メ石見國那賀郡郷田村和泉長九郎ニ就キ石州風ノ陶法ヲ學
 ビ後ヲ甚次郎ノ備工トナレルヲ以テ遂ニ工場ヲ讓與營業ス而シ
 テ原土ハ村內權現ノ前耕地ノ白土ヲ取リ造坏釉藥ノ料トナスト
 云

同國邑美郡湯所村松田治三郎ハ曾テ但馬國出石郡出石町竹田屋
 伊八ニ就テ製磁法ヲ學ビ文久三年ニ歸郷ス時ニ出雲國ノ工人來
 ルニ會ヒ共ニ鳥取藩主ノ命ヲ受ケ同郡濱阪村ノ古窯趾ニ新窯ヲ
 築ク此趾ハ往昔筑前高取ノ工人來リ陶スル所ナリ爾後因伯數所
 ノ土質ヲ試ミ中ニ就テ因幡國岩井郡田後村ニ産スル田底土ノ適
 合ナルヲ以テ遂ニ製陶ニ從事スルモ出入償ハ三年ニシテ廢ス

治三郎罷メス更ニ岩井郡海士村ノ土ヲ用ヰテ樂燒ヲ製シ以テ今ニ至ルト云

伯耆國會見郡落合村ノ製陶ハ寛政五年全村松浦助六ト云モノ各地ノ陶場ニ赴キテ陶法ヲ傳ヘ歸村シテ村内切明下塔ニ開窯シ日用粗陶ヲ製造スルヲ初トス其用土ハ同郡西村高見畑ノモノヲ取リ釉料ハ出雲國能義郡東母里村大木ノ石ヲ購入スト云今工久次郎ハ助六ノ孫ナリ

同郡徳長村ノ製陶ハ嘉永間古曳嘉重ト云モノ廉價陶器ノ製造ヲ思念シ各地ノ陶業ヲ目撃シテ後チ村内三崎谷尻ニ開窯スルヲ創始トス其原土釉料ハ松浦久次郎ノモノニ同シ今工喜市ハ嘉重ノ孫ナリ

第廿五 岡山縣

備前國和氣郡伊部村ノ製陶場ハ從來原土ヲ同村ニ採リ之ニ邑久

郡磯ノ上村ノ粘土ヲ和シ坏成ルノ後和氣郡島田村ノ田土ヲ塗抹ス其白燒土ハ伊部村ノ田土ヲ用ウルト云フ

抑備前ニ土器ヲ製スルヲ其來ル甚古シ紀元六百年代(即西曆紀元前後)ニ在テ既ニ土器ヲ製出セリ 垂仁天皇ノ朝殉死ヲ禁スルニ當リ出雲ノ人野見宿禰奏シテ出雲ノ土部一百人ヲ召シ之ヲ督シテ土偶土馬等ヲ造リ生人馬ニ易ヘ以テ皇后日葉酢媛ノ陵墓ニ樹ツ 天皇其功ヲ賞シテ始メテ土部職ヲ置キ宿禰ヲ以テ土師ノ長官ニ任シ姓ヲ土師ト賜フ此時製陶ノ地ヲ定ム是ヨリ後子孫永シ出雲及諸國ノ土部ヲ督シテ朝ニ仕ヘタリ其督下ニ備前邑久郡土師郷アリ 雄略天皇ノ朝西曆四百年代(諸國陶器ヲ製スルニ至リ備前モ亦隨テ陶器ヲ出スニ至レリ然レモ當時ノ窯ハ各所ニ散在シ果シテ何ノ地タルヤヲ詳カニスル能ハス應永年間伊部村ニ三窯ヲ築ク其榎原山麓ノモノヲ南窯ト呼ビ不老山下ノモノヲ北窯

ト云ヒ育王山畔ノモノヲ西窯ト唱ヘ盛ニ農具諸器ヲ出セリ是
 ヲ大窯ト云フ天正間其業大ニ進歩シ抹茶壺點茶椀及ヒ床飾ノ物
 象ヲ製セリ當時紫駝色ギンツミイロノモノアリ個ハ赤阪郡石上村ノ田土ヲ用
 ヒテ製スルナリ天明年間木村庄八ト云モノ創テ方形ノ酒壘ヲ製
 シ爾來今ニ及テ盛ニ世ニ行ハル天保三年別ニ小窯三所ヲ築ク一
 ハ不老山下ニ於テシニハ榎原山下ニ於テス而ソ今日ニ至リテハ
 大窯廢絶シ小窯ノミヲ用ウルト云フ此地ノ工人古來六家アリ森
 氏木村氏順宮氏金重氏大饗氏寺尾氏トス而シテ前時ニ比スレハ
 業務衰微ノ現状ヲ呈シ共進會ニ出品スルモノ僅ニ森琳三木村平
 一郎木村光太郎ノ三家ノミニシテ頗ル寥々タルモノナリシ
 備前國邑久郡蟲明村ノ陶器ハ同村森彦一郎ト云モノ播磨國野田
 村永田宗右衛門同國東山田村赤松平右衛門ニ陶法ヲ學ヒ文久三
 年茲ニ開窯ス明治二年京都ノ陶工眞葛香山來遊シ居ルコト二年彦

一郎之ニ師事ス既ニシテ香山横濱太田ノ不二山下ニ移リ築窯ス
 同十三年彦一郎來リ就學スル一年許今ニ至テ尙ホ之ヲ業トス其
 製原土ヲ邑久郡長濱村ノ小津及ヒ奥浦ニ采リ播磨國西二見ノ産
 土ヲ調和ス其白色器ヲ製スルニハ和氣郡八木山ノ白土ヲ用ウル
 ト云製器較伊部窯ノモノニ類シ或ハ虫明ノ印ヲ押捺ス
 備中國後月郡川相村向井重平ハ明治九年ニ開業シ原土ヲ備後國
 蘆田郡樽磨村ニ采リ之レニ土灰赤酸化鍍ヲ調和シテ鉢茶碗等
 砂器ヲ製ス未タ拙ヲ免カレサルナリ
 備中國川上郡成羽村山根勇ハ同村龍王山及ヒ窪屋郡山手村山新
 田ノ土ヲ用ウ此窯明治十二年ニ創築シ全十四年山手村ノ原土ヲ
 得ルノ後稍緒ニ就キ漸次販路ヲ開クト云フ
 美作國久米北條郡宮部下村大林センハ同村岡田ノ白土眞島郡総
 村ノ黒土西北條郡田邑村ノ白土ヲ混用ス其創起文政元年ニ在リ

頭初同村中尾直七ト云モノ伊部ノ陶工ヲ備使セシモ嘉永二年ニ至リテ損益償ハズ破産休業ス時ニセシノ先代大林實藏之ヲ繼キ以テ今日ニ至ルト云フ其製器ハ伊部陶ニ類スル日用器ナリ此他陶窯アルノ地ハ備中賀陽郡仕方畝全國阿賀郡桑原全國淺口郡里見村全國窪屋郡酒津村美作西北條郡津山全國真島郡草加部村及ヒ美甘村ノ數所トス中ニ就キ里見村ハ工人三百五十餘名ニシテ其窯モ亦十一所アリ草加部村ハ一窯ニシテ工人八十餘名他ノ數所ハ一二窯ニ止マリ其工人モ二名乃至十四五名ナリト而シテ此諸窯ハ共進會ニ出品ナキヲ以テ其種類ヲ知ルニ由ナシ宜ク他日ヲ俟テ調査可キノミ

第廿六 廣島縣

備後國深津郡福山ノ製陶ハ天保二年舊福山藩主阿部某ノ慇懃ニ因リ柳テ同郡引野村岩谷ニ一窯ヲ築キ磁器ヲ製造ス後チ神野利

右衛門高橋勘介等相繼キ吉田徳右衛門ト云モノニ至ツテ遂ニ製磁ヲ廢シ專ラ陶器ヲ製山ス明治七年ヨリ十六年ニ至ルマテ引野村桑田武一郎之ヲ繼キ十七年以後福山東町ノ士族三谷忠繼續シテ日用陶器ヲ製シ又別ニ黑色ナル土器ノ茶具ヲ製ス其土器ハ引野村陶場内ノ粘土及ヒ赤土黒土ヲ用ニ猶灰ト酸化鉄トチ水ニ解キ之ヲ製フテ製スルナリ

安藝國高宮郡飯室村熊谷爲之助ハ明治十六年九月開窯シ同國山縣郡今吉田村ノ粘土ヲ坏トシ製釉セル粗陶器ヲ製セリ

同國賀茂郡原村石丸品藏ハ安政元年ニ陶業ヲ起シ刻苦スルニ五年其果ヲ得ス是ニ於テ美作國久米北條郡宮部村大森實藏ニ從學シ同場ニ在テ京都ノ工人井上千吉ニ就キ京陶ノ法ヲ學フニ五年尋テ美作國大庭郡鍋屋村岡本保次郎ノ工場ニ赴キ製陶ニ從事スルニ茲ニ十年明治十三年歸村自營ス其原土ハ原村東光路ノ白土

赤土同村前長澤ノ釉石及ヒ豊田郡萬里村ノ鑄土ヲ取リ日用ノ粗陶ヲ製スト云

第廿七 山口縣

萩密ハ永正年間ニ創築ス其古器中近製ノモノニ比スレハ土質緻密ナルモノアリ而シテ高麗左衛門ノ所製ニ係ル器物中ニハ砂器ニ類スルモノモ亦少シトセズ近製ノモノハ却テ砂質ノモノ多キニ居レリ

文祿征韓ノ役毛利輝元韓人李敬ヲシテ嚮導タラシム後凱旋ノ時李敬其妻ヲ率ヒテ從歸ス輝元其陶工タルヲ聞キ命シテ製陶ノ適地ヲ相セシム李敬乃チ長防各地ヲ歴探シ遂ニ長門國阿武郡椿郷東分村松本ニ良土ヲ得タリ是ニ於テ輝元居所山地ヲ與フ李敬居チ松本ノ中倉ニトシ名ヲ助八ト改メ後又高麗左衛門ト稱セリ(一説ニ李夕光ト云モノ輝元ニ請ヒ其弟シヤムカンヲ召サシムシヤム

カン歸化シテ名ヲ高麗左衛門ト改ムト未ダ就レカ是ナルヲ知ラス案スルニ夕光ハ李敬ノ字ナルヘシ其弟ヲ招キタルモ或ハ眞ナルカ如シト雖モ姑ク其後裔阪道輔ノ解説ニ從フ屋後ニ山アリ人呼テ韓人山ト云フ是輝元ノ與フル所ニシテ採土伐薪ノ用ニ充ツルノ地ナリ高麗左衛門周防吉敷郡臺道村ノ粘土佐波郡三田尻淨野村ノ釉石長門國見島郡見島本村ノ粘土及ヒ韓人山ノ土ヲ用キ彼ノ高麗韋登(地名)ノ製ニ倣フテ茶碗其他ノ小器ヲ製セリ是チ松本萩ノ創始トス爾後代々士藉ニ列ナリ今工阪道輔ニ至テ九代依然舊地ニ住シテ自營シ祖先發見ノ土石ヲ取テ茶用ノ飲食器雜器ヲ製セリ
寛文中大和三輪村ノ人某歴遊シテ長門ノ萩ニ到リ國主毛利氏ニ仕ヘテ製陶ヲ事トス國主之ニ休雪ノ號ヲ賜ヒ阿武郡椿郷東分村ニ居地ヲ與フ其三年休雪窯ヲ松本ノ地ニ築キ樂燒萩燒ヲ兼製ス

其原土ハ、臺道村見島本村及ヒ居村小畑ノ地ニ採リ浮野山頂ノ釉石ヲ用ヰテ良器ヲ製ス蓋シ亦高麗左衛門ノ遺法ニ據ルナリ享保明和間四代休雪頗ル良手ト稱セリ今工三輪泥助ハ其八代ニシテ亦奇巧ノ茶用諸器ヲ製スト云

長門國阿武郡須佐村陶業ノ創始ハ詳カナラス同村應運社ハ明治十四年ノ創立ニ係リ同村金子嶺ノ粘土ヲ坏トシ又此土ニ硅石酸化銅ヲ合和セル青黒釉ヲ製ス

天和元祿間長門國大津郡深川湯本村三ノ瀬ニ一種ノ陶器ヲ製出ス亦松本ノ法ヲ傳フルナリ今工新庄織江ノ祖先ハ天和元年ニ倉崎音四郎ノ祖先ハ元祿五年ニ開窯シ共ニ創業ノ舊家トナシ能美半左衛門ノ先人ハ寶曆十年ニ阪倉加助阪倉多吉ハ安永四年ニ阪田鈍作田原謙次山下孫六等ハ天明ニ開業シ各舊藩ノ世祿ヲ受ケ箕裘ヲ繼グモノナリ其用土ハ同村ノ河原ト西深川村ノ御所原ト

ニ採リ大同小異ノ器物ヲ製セリ

周防國豐浦郡小月村松永庄太郎ハ同村ノ土石ヲ用ヰテ慶應元年ニ開業ス現今各種ノ釉法ヲ用ヰテ雜器ヲ製スルコトニ勉メタリ

同郡八道村松尾藤兵衛ハ安政六年ニ開業シ同村金ヶ壘ノ白色粘土ヲ用ヰテ雜器ヲ製セリ

同國佐波郡西之浦ノ工人吉田陶作ハ臺道村大原ノ粘土ト同所ニ産スル釉石(馬齒石ト云)ヲ用ヰテ嘉永五年ニ表釉粗裂アル軟陶ヲ製ス近頃之ニ青繪赤繪ノ工ヲ施セリ

同郡佐野村中司重次郎ハ(開業未詳)同郡大崎村ノ田土ヲ用ヰテ松本同種ノ器ヲ製ス

同郡江泊村林俊吉ハ安政五年ニ開業ス村内末田ノ田底土其他赤土ヲ質トシ釉石(方言キマチ)ニ本灰ヲ和シタル粗釉ヲ製過シ日用厨器ヲ製セリ

長門國阿武郡椿郷東分村東光寺境内ナル尙象社ハ明治十三年士族五名相謀リ磁器製造ニ着手ス其年八月東光寺山ニ釉石ヲ發見シ之ヲ試ミテ水裂釉ヲ得爾來結社セシモノニシテ二種ノ磁器ヲ兼製ス原石ハ同村小畑ニ採ルト云近來型繪ノ青華器ヲ多製シ地方ノ需用ヲ便スルモ該社ノ内情ハ衰兆ヲ呈セルカ如シ

同村岡田淳輔ハ明治七年其父良輔全村前小畑ノ地ニ陶器製造ヲ創業シ十年以後磁器ヲ製ス其原料ハ即チ前小畑ニ取ルト云フ

同國豐浦郡田耕村和田恒太郎ハ其父孫四郎安政元年ニ開窯シテ磁器ヲ製ス原土ハ居村河曲ニ採リ釉石ハ伊豫國浮穴郡小濱村高野川ニ購フト云

同郡瀧部村古瀬灌一ハ其父虎七弘化三年西村伊兵衛ノ創築スル一窯ヲ購入シテ磁器ヲ改良ス原土ハ和田恒太郎ノモノニ同シ

同村森村幸兵衛ハ文政六年其祖父長作ノ起業ニ係リ磁器ヲ製ス

原土ヲ同村砥場ニ取リ釉石ハ和田ニ同シトス

同郡神田下村西仙藏ハ元治元年ニ起業シ全村附野肥中及ヒ阿川村龜ヶ原ノ土ヲ採リ釉石ハ和田ノモノニ同シ

凡ソ右ニ掲クル諸工ノ製器ハ尙象社ノ製スルモノニ同シノ型繪青華ノ粗糙磁器ナリ

此他周防國都濃郡上村富田村戸田村鹿野上村ニ六窯全國佐波郡三田尻村ニ三窯吉數郡臺道村ニ一窯全郡陶村ニ三窯厚狹郡郷村外三箇村ニ六窯豐浦郡小月村外三ヶ村ニ六窯阿武郡椿郷東分村小畑ニ三窯アリト雖モ共ニ本會ニ出品ナキヲ以テ之ヲ詳カニスルコト能ハス

第廿八 徳島縣

阿波國麻植郡川島町東貞吉ハ天保十五年ニ陶業ヲ起シ同郡桑村ノ岡山及ヒ南寺ノ土ヲ用テ雜器ヲ製スルヲ勉メ明治二年以後鑄

製ニ擬スル土瓶ヲ創製スルモ尙ホ未ダ佳妙ナラス
此他阿波國大谷ノ西山田ニ窯全東山田ニ一窯池ノ谷大石ニ一
窯アリト雖モ出品ナキヲ以テ之ヲ詳カニスル能ハス

第廿九 高知縣

此縣陶場中古窯ニシテ世ニ名ヲ知ラルモノハ尾戸焼トス承應
二年三月國族山内忠義ノ創意ニ由リ此ニ陶業ヲ起ス時ニ京都ノ
良工野々村仁清ノ弟子ニ久野正伯ト云モノアリ大阪高津ノ近傍
ニ家ス亦巧手ノ名アリ忠義之ヲ召テ陶事ヲ督セシム既ニシテ正
伯阪地ニ歸リ弟子山崎平内ヲ留メテ已レニ代ラシム後山崎ノ分
家森田光久命ヲ受ケ大阪ニ至リ正伯ニ就テ陶法ヲ學ビ居ルヲ數
年善シ其業ヲ卒ヘ延寶七年更ニ京攝ニ往來シテ茶事ヲ研究シ又
各地ノ陶器ヲ訪ヒ京都ノ御室音羽御菩薩ヨリ尾張ノ瀬戸赤津美
濃ノ久尻遠江ノ志登呂及ヒ伊勢伊賀等ノ諸場ヲ歷遊シテ本國ニ

✓
9

歸リ朝鮮繪御本ニ類セル茶器雜具ヲ製ス亦仁清ニ倣フナリ其松
竹梅画茶盃ノ如キハ後世ノ茶家殊ニ珍愛スル所トナレリ其子光
長ヨリ光福光次光爲相續テ陶業ニ従事ス文政三年五月國族命シ
テ磁器製造所ヲ設立シ光爲ヲシテ其法ヲ探究セシム光爲伊豫ノ
西條松山戸部等ノ陶窯ヲ訪ヒ數閱月ニシテ歸リ本業ノ餘暇磁器
ヲ製出セリ其子光繁其孫綠山等相繼キ今工森田潤森田光義ハ共
ニ八代ノ孫タリ尾戸窯ハ文化中土佐郡鴨部村能茶山ノ傍ニ移ル
世稱シテ能茶山焼ト云フ蓋シ原土ヲ茲ニ采ルヲ以テ其便ヲ圖リ
テ移窯セシカ
土佐國土佐郡鴨部村士族市原定直ハ藩政ノ時常職ノ餘暇ヲ以テ
陶事ヲ研究シ慶應二年十月解職シテ陶窯ヲ開ク初メ素焼ノ諸器
ヲ造リ又樂燒ヲ試ム戊辰ノ役銃ヲ員テ東西ニ奔走スルモ陶窯ア
ルノ地ニ至レバ必ス訪フテ其法ヲ記ス明治六年兵役ヲ辭シ本窯

四床ヲ築キテ業ヲ盛ノコト八年又二床ヲ増加スト其原土ハ能茶
山ニ採リ釉料ヲ改製シ傍ラ巨器ヲ造レリト云
同國安藝郡赤野村田村久太郎ハ明治十五年ノ開業ニ係リ自村ノ
赤土ヲ用ヰテ日常厨器ヲ造レリ本村唯此一窯アルノミ
同郡田野村ノ陶窯ハ文政ノ初メ今工手島常次ノ祖六兵衛ト云モ
ノ京都ノ陶工四名ヲ備ヒ同村大野山ニ開窯スルヲ創始トス今工
川井林太郎ノ祖父幸次郎ノ如キハ其傭工ノ一人ト云フ原土ヲ大
野山ニ採リ日用ノ粗雜器ヲ製ス本村唯手島常次ノ一窯アルノミ
ニシテ雇工八人ヲ使用スト云
此他同郡井ノ口村ノ内原野ト云フ地ニ三窯土佐郡赤石ニ一窯ア
ルモ本會ニ出品ナキヲ以テ調査スルニ由ナシ
第三十 愛媛縣
讃岐國香川郡大工町赤松喜平ノ樂燒ハ創始天正五年ニ在リ今ニ

至ルマテ原土ヲ山田郡屋島ニ採ルト云フ即今製スル所ノ諸器ハ
表釉蟹爪紋アルモノ多キニ居レリ
同國山田郡西瀧元村三谷林造ノ陶器ハ明和三年其祖林造志度浦
ニ開窯シ屋島村古戰場ノ土ヲ用ヰテ製作ス同七年平賀源内ニ謀
テ改良ヲ加ヘ享和三年高松侯ノ命ニ應シテ今ノ地ニ移居スト願
ラニ從前屋島燒ト稱スル器物ハ交趾陶ニ擬スルモノ多ク又京都
ノ名工木米ノ製器ト相類スルモノアリテ其製頗ル奇巧ヲ呈セリ
今日製器ノ用釉等ハ蓋シ其遺法ナル可シ
同國阿野郡福家村河野通介ハ明治十三年製陶ヲ創業シ原土ヲ香
川郡勅使村ニ採リ雜器ヲ造ル其質最モ耐火ノ効アリ
伊豫國越智郡上徳村田村良助ノ土器ハ明治六年ノ開業ニシテ土
ヲ同郡國分村山口村ニ採リ素燒ノ軟質ナル茶具ヲ製セリ
同國新居郡萩生村飯尾策市ノ樂窯ハ明治十三年全村岸之下ノ地

築キ自村ノ土砂ヲ用井茶器ヲ製ス未タ完全ヲ得サルカ如シ
 同國下浮穴郡五本松村向井和平ノ製スル磁器ハ寛政八年祖父向
 井源次ノ創起スル所初メ全郡外山村砥石工場ノ石片ヲ用井
 良器ヲ得ス享和元年全郡川登村河底ノ白石ヲ見テ其脈ヲ探リ竟
 良石ヲ得タリ文政申父和平ノ時始メテ純白ノ磁器ヲ製出ス明
 治六年ニ至リ今工和平全郡大平村高法師及ヒ全郡久谷村ノ原石
 ヲ購入シ釉料ハ高野川村ノ砥石ヲ用井全十一年画工ヲ西京ニ
 送り幹山傳七ニ就テ彩畫法ヲ學ハシメ十七年水車機械ヲ設ケテ
 彩料ヲ磨研スル等大ニ業務ヲ擴張ス近年又肥前様型繪青華ノ粗
 磁ヲ多製シ大ニ地方日用品ノ本縣下ニ輸入スルモノヲ減セリト
 云
 同郡岩谷口村守本勇二郎ノ父忠助文政三年製磁ノ業ヲ起ス安政
 五年勇二郎其業ヲ繼キ万延元年ニ水車機ヲ設ケ元治元年同郡高

野川村ノ釉石ヲ發見シ明治四年大平村高法師ノ原石ヲ創掘シ製
 具ヲ改良シテ少シク進歩ヲ致シ又明治三年肥前有田ノ工人宮原
 幸吉ニ石羔型ノ用法ヲ受ケ今多ク鑄製型造ヲ事トス其製スル所
 ノ諸器ハ多ク川登村ノ原石ヲ用ウト云
 同郡七折村ノ磁器ハ天保十三年佐川友助始メテ本村ニ起業ス嘉
 永五年阪本源兵衛川登村ノ原石ヲ採テ此業ヲ繼クモ文久元年病
 沒スルニ及ントテ遂ニ廢ス慶應元年伊豫郡濱村ノ人入川佐七更ニ
 之ヲ繼續シ三年ニシテ又罷メタリ明治二年ニ至テ今工阪本源吾
 其父源兵衛ノ遺業ヲ興シ全十年其密ヲ改築シ十一年石羔型ノ用
 法ヲ習ヒ又窯ノ上層ニ素燒窯ヲ設ケ大ニ柴薪ノ費ヲ減セリト云
 同國伊豫郡市場村金岡定藏ノ磁器ハ用料前工ニ同シク文化中祖
 父音右衛門ノ開窯スル所初メ黒燒物ト稱スル最下ノ雜品ヲ製シ
 文政ノ初年ニ至リ始メテ磁器ヲ製スルヲ得タリト云

此他尙ホ各地ニ數窯アルモ共ニ出品ナキヲ以テ之ヲ詳カニスル
 由ナシ
 因ニ言フ讃岐國ニ陶業ノ起ルヲ頗ル古シ初メ大阪ノ人森島半
 彌重芳ト云モノ江州信樂ニ來レル漢人ニ就キ陶法ヲ學ヒ家業
 トス二代作兵衛重利ハ京都栗田口ニ移リ父業ヲ繼ケリ松平頼
 重ノ高松ニ轉封スルヤ重利ヲ召シ俸祿ヲ與ヘ香川郡中村ニ居
 リ製陶ニ從事セシム實ニ正徳四年ナリ慶安二年氏ヲ紀太ト改
 ム亦國侯ノ命ニ因ルト云紀太理兵衛ト云モノ巧手ノ名アリ爾
 後其陶ニ負バシムルニ理兵衛燒ノ名ヲ以テスルニ至レリ八代
 岩之亟嗣ナシ河野郡福家村河野某ノ弟理平ヲ婿シテ嗣トナス
 理平京都ニ遊ヒ高橋道八ニ從學スルヲ六年歸リテ業ヲ繼ク後
 理平事故アリテ生家ニ復ス河野通介ハ理平ノ姪ナルヲ以テ繼
 愆シテ陶業ヲ起サシムルト云而シテ本會ニ香川郡中村紀太陶

6

場ノ出品ナキヲ以テ觀レハ理平生家ニ復歸シ後其迹絶タルモ
 亦未ダ知ル可カラス且理兵衛燒ト唱フルモノ、如キモ陶質ノ
 如何ヲ知ラス記シテ後ノ調査ヲ俟ツ

第三十一 福岡縣

筑前國福岡區博多瓦町岡平藏ハ其祖先慶長年間ニ開業シ今ニ至
 テ十三代トス同町大坪久次郎ハ天保間ニ起業シ今工ハ二代ナリ
 共ニ樂燒ヲ事トシ就中素燒品ニ長セリ原土ヲ同國那珂郡野間若
 久高宮横手五十川ノ諸村及ヒ早良郡鳥飼村席田郡青木村等ニ採
 ルト云
 同國早良郡鹿原村柳瀬甚平全郡西新町中川武平同町早川嘉平ハ
 其先全國上坐郡小石原村ニ開業ス享保元年五月福岡侯黑田某小
 石原ノ工ニ命ジテ鹿原村西新町ノ兩地ニ移窯セシメ今呼テ西皿
 山上云資ヲ貸シ業ヲ助ク甚平ノ先代勘兵衛武平ノ先代某嘉平ノ

先代嘉平モ亦此時ヲ以テ移窯スト其製品ノ原土ハ白土ヲ全郡七隈村鹿原村ニ釉石ヲ金武村長尾村ニ採ル諸工ハ皆聯合窯ヲ用非其製スル所ハ即チ往昔高取焼ト稱スルモノナルモ用釉形狀ノ如何ニ至テハ遠ク古製ニ及ハサルカ如シ抑高取焼ハ慶長ニ創起シ寛文ニ進歩ス寛永七年窯ヲ穂波郡白旗山麓ニ移シ寛文七年又上坐郡鼓村ニ移窯スト(工藝志料ニ詳ナリ故ニ畧ス)是ニ由テ之ヲ考フルニ寛文七年ヨリ享保元年ニ至ル其間五十年而シテ寛文ニ鼓村ニ移窯シ享保ニハ既ニ小石原村ニテ製陶スル時ハ其小石原ニ移リシハ果シテ何年ナリシヤ或ハ又別窯ナルカ今詳カニ知ル能ハス姑ク記シテ疑ヒチ存スルノミ同國上坐郡小石原村士族高取茂記ハ其先寛政七年ニ創業シ同村柳瀬春造ハ其先寶曆二年ニ柳瀬原土ハ全村ニ取リ又同郡赤谷村ノ釉石ヲ用ウ而シテ茂記ノ製スル所モ亦高取ノ遺製ニシテ春造

ノ白磁器ハ蓋シ中野磁器ノ遺製ナル可シ此地モ亦聯合窯ヲ以テ燒成スト云

同國那賀郡野間村ノ陶器ハ安政三年藩廳京都ノ陶工佐々木與三ヲ招キテ陶業ヲ起スニ創ル明治十二年與三ノ歸京ニ際シ同村澤田舜山其工場ヲ購ヒ日用雜器ヲ製シテ于今繼續ス原土ヲ同村柳河内ニ取リ釉料ハ天草其他五島深江ノモノ及ヒ本村近傍多尾村ノ地ヨリ買收スト云

豊前國田川郡上野村ノ製陶ハ文祿元年十時甫快ノ創始スル所細川忠利封ヲ肥後ニ轉スルニ當リ甫快ノ男忠兵衛三男藤四郎之ニ從フ二男孫左衛門甫久留ツテ家ヲ繼ク之ヲ二代トス爾後ノ製造ハ皆藩費ヲ以テシ製品ハ藩主ノ倉庫ニ納メ世祿トシテ玄米十五石雜穀二石及ヒ扶持米五口ヲ與フ寶曆七年十一代孫左衛門甫好專賣ヲ請ヒ許サル故ヲ以テ爾後雜穀ヲ給セス是ヨリ陶業大ニ振

文化元年孫左衛門甫紹命ヲ藩主ニ承ケ京工忠兵衛ニ就キ樂燒ノ法ヲ傳フ藩主功ヲ賞シテ駿馬從者ヲ許ス天保五年藩制他國ノ工人ヲ僱使スルヲ禁ス明治五年此禁解ケ現今他工ヲ雇使スト古今此窯ノ製器ヲ上野燒ト稱ス其原土ハ同郡市津夏吉ノ兩村ニ取ル今工ヲ十時器八郎ト云フ其技稍先代ニ及ハサルカ如シ而シテ上野ハ此一窯アルノミ

同國企救郡水町村吉田彦六ハ同村高坊ノ土ト同郡上城村ノ白土ヲ取リ少許ノ砂土ヲ混シテ黑釉ノ陶器ヲ製ス明治八年十一月少開業ニ係ルト云

此他筑前國御笠郡石崎村糟屋郡須惠村筑後國下妻郡水田村上妻郡藏敷村豊前國田川郡高野村等ニ各一窯アリト雖モ本會ニ出品ナキヲ以テ其種類創起沿革ヲ詳ニスルヲ能ハス

第卅二 佐賀縣

下宿

真手野

肥前國藤津郡下宿村北島佐太郎ノ陶器ハ原土ヲ本村ニ採リ全郡岩屋川内村ノ土ヲ以テ釉料ト爲ス文久元年父業ヲ繼グト云フ此村陶器ノ創始詳ナラスト雖モ口碑ノ傳フル所ニ據レハ歸化ノ韓人其業ヲ起シ人民之ニ就テ學ヒ當時土砂ニ乏シク後磁器ヲ製スルモノアリシモ振ハス文政以降漸ク衰微シ明治ノ初メニ至テハ將ニ廢滅セントスル景況ナリシト云今ハ日用至廉ナル雜器ヲ製セリ但磁器ニ係ルモノハ後ニ別記ス

全國杵島郡真手野村丸田彌助ノ陶器ハ粘土ヲ全村ニ採リ天草石ヲ釉料ト爲ス此村ノ陶製ハ應永年間ニ創起スト云フモ之ヲ徵ス可キノ書ナシ本工ノ祖先陶業ニ從事シ祖父ノ時ニ在テハ唯粗糙ノ器物ノミヲ製シテ販路未ダ廣カラサリシモ當時藩主ノ命ニ因リ製スル所ノ黑釉土瓶ハ之ニ金面ヲ着スルヲ例トシ價直甚ク貴カリシ此製三十年前ニ於テ之ヲ罷ノ爾後日用雜器ヲ專製スト云

全國養父郡白壁村山崎嘉六ノ陶器ハ粘土ヲ全村明神山ニ採リ天
草石ヲ折半ニ調和シ氷裂青瓷ヲ製ス天保間ニ開業スト云
全村武富眞胤ハ陶磁兩種ヲ製ス其陶器ハ山崎ノモノニ同シ但磁
器ハ後ニ記ス

全國西松浦郡大川内村ハ慶長以降歸化ノ韓人居住セシモ耕地ニ
乏シキヲ以テ遂ニ陶業ヲ此ニ開クト云フ享保中國主鍋島某岩屋
川ノ藩窯ヲ移シ陶工ヲ士藉ニ墜シ且其原石ヲ有田ニ取リ資ヲ抛
チテ良磁ヲ造ラシメ以テ貢獻贈答ノ品ニ充テ私賣ヲ禁シタルヲ
以テ其品實ニ最美ニシテ且意匠餘アルモノアリシモ此制一タヒ
廢シテヨリ其業頓ニ衰ヘ耕サント欲スルニ地ナリ陶セント欲ス
ルニ資ナクシテ工人ノ窮困今日ヨリ甚シキモノアラヌ幸ニ其地
ニ氷裂青瓷ノ原料アリテ古來製造シ來レルニ因リ之ヲ製シテ纔

ニ飢寒ヲ免ルニ得ルト云其氷裂青瓷ハ原石ヲ天草ニ取ルモノ
アリ有田ニ購フモノアリ本村ノ土ヲ用ウルモノアリ釉用ノ土石
ハ皆之ヲ本村ニ採ル
以上皆陶質ニ係ル次ニ磁器ヲ製スルノ諸窯ヲ舉ク可シ
全國西松浦郡有田皿山ハ泉山ノ溪間ニアリ市坊六多クハ陶戸ナ
リ有田ニ磁器ヲ製スルモノハ原石釉料ヲ全村泉山ニ取ル抑有田
磁器ノ創始ヨリ其沿革ニ至ツテハ既ニ工藝志料ニ載セ又十年内
國勸業博覽會ニ山本五郎氏ノ報告スル所アレハ今復々之ヲ掲ク
ルヲ須ヒス若シ其レ工人ノ事蹟ハ序ヲ趁テ之ヲ左ニ掲ク可シ
香蘭社ハ深川榮左衛門主トシテ設立スル所ナリ榮左衛門ノ家々
ル祖先以來二百三十有餘年聯綿陶業ニ從事シ安政三年榮左衛門
父業ヲ繼キ内國用品ヲ專製セシモ外國貿易ノ開ケヨリ以降即
チ明治元年創メテ外國輸出品ヲ製シ大ニ盛價ヲ得タルヲ以テ心

ナ外輸品ニ傾テ全年長崎出島ニ支店ヲ置キ明治八年有志者ト謀
 リテ香蘭社ヲ設立ス此香蘭社ノ名義タル從來全村辻勝藏ノ家ニ
 在テ禁裏供御ノ御器ヲ製造スル場名ナリ勝藏モ亦此新社ニ加
 ハリタルヲ以テ遂ニ舊社名ヲ用ウルニ至ルト云明治十一年榮左
 衛門自カラ佛國大博覽會ニ渡航シ全國リモ一ツユ府製ノ製土機
 械ヲ購入シ歸來事故アリテ未タ之ヲ設立運用スルニ至ラス十二
 年社員辻深海手塚等分離シテ精磁社ヲ立ルニ當リ榮左衛門孤獨
 香蘭社ヲ維持シ益精品ヲ製出スト云
 精磁社ハ明治十二年ノ新設ニ係リ手塚龜之助辻勝藏深海墨之助
 河原忠次郎等相結約シテ成ルモノトス此社ノ目的固ヨリ外國輸
 出ノ精美品ヲ製スルニアリシモ近來其目的ヲ一變シ勉メテ内外
 日用器皿ノ實用品ヲ製セントス是ニ於テ乎明治十八年佛國製ノ
 製磁機械購入ヲ請願シ特許ヲ得テ之ヲ借受シ急ニ設立セントス

計シリ嗚呼此機械ノ運用ヲ得ルニ會セハ有田磁器ノ面目ヲ一新
 スルニ至ルヲアル可シ

岩尾兼太郎ハ貳百有餘年前ニ創業シ爾後繼續シテ以テ今ニ至リ
 殊ニ品精ニシテ價廉ナラント勉メ較其功ヲ示セリト云フ
 久富源一ノ祖父與次兵衛ハ三保ト號ス天保中外國輸出品ニ注目
 シ長崎ニ出テ支那和蘭ノ商賈ニ通好シテ其嗜好ヲ考ヘ器物ヲ製
 シ他ノ画工ヲシテ適應ノ錦彩画紋ヲ描カシメ以テ售ル外商之ヲ
 賞シ大ニ貿易輸出ヲ開ケリ今工源一ハ明治三年更ニ錦様ノ工ヲ
 自家ニ興シ益海外輸出ヲ勉ムルト云
 田代助作ハ早ク已ニ外國輸出ニ注目シ安政年間長崎港ニ支店ヲ
 開ク萬延元年藩廳之ニ有田磁器外國輸出ノ專賣ヲ許シ慶應二年
 佛國博覽會ニ出品シ全四年支那上海ニ支店ヲ設ケ明治四年橫濱
 ニ出店スル等當時有田ニ於テハ貿易家ノ巨擘タルモノナリ

岩松平吾ハ天和ノ初年其先岩松三郎右衛門長磁ヲ製シテ世ノ信用ヲ得口内岩字ノ商標ヲ付スル行李ハ解カスシテ取引ヲ爲スニ至リ遂ニ幕府ヨリ用品調製ノ命ヲ受ケタリト云今尙ホ有田皿山町上幸平ノ地ニ在テ自營ス

瀬戸口富右衛門ノ祖先ハ二百餘年前ニ起業シ數代繼續者中ニハ着色等ノ改良ニ着目スルモノ甚ナカラス明治十四年今工自家工場ノ傍ニ七門ノ本窯ヲ新築スト云

田代安吉ハ助作ノ弟ニシテ明治十五年別ニ一戸ヲ爲セリ

士族南里平一ハ明治三年ヨリ錦彩器ヲ兼製スト云フ

今泉藤太ノ祖先ハ陶画ヲ業トシ爾後百餘年間錦窯ニ從事ス父今右衛門最モ巧手ノ名アリ明治六年今工藤太創メテ本窯ヲ築クト云

有田陶器工藝學校ハ有田皿山ノ白川ニ在リ初メ白川小學校内ニ

伊万里

新村

市瀬

設ケ明治十三年官許ヲ得テ本校ヲ新建ス即今生徒三十名各科ヲ分ツテ業ヲ修ムト云フ陶地ニシテ此校アルハ眞ニ喜フ可シ

全郡伊万里町ハ陶窯ナシ唯陶画工四五十名アリテ有田其他ノ素磁ニ彩画ヲ着スルニ止マレリ

全郡新村陶業ノ創起ハ其何ノ時ニアルヲ知ラス蓋シ有田ノ開ケタル後ニアル可シ本村ノ工人皆原土ヲ泉山ニ取ルト云

梶原友太郎祖先ノ開業ハ二百有餘年前ニ在リ慶應年間其父菊次郎徑四尺ノ巨皿ヲ創製ス有田ニ於テモ善ク此巨皿ヲ作ルモノ罕ナリト云

福島幸次郎ハ嘉永年間其父某徑三尺ノ平皿ヲ創製シ今工ニ至テ四尺ノ平鉢七尺ノ巨壺ヲ作ルト云

全郡大川内村市瀬窯ハ有田ヨリ分窯スルモノニシテ原土ヲ泉山ニ取ル今其創始ノ年代ヲ詳ニスル能ハス工人大串辰二竹下勝

廣瀬

南河原

セリ
 七大串茂右衛門前田鉄藏岩崎久兵衛等青華粗糙ノ日用雜器ヲ製
 全郡大木村廣瀬窯ハ慶長中國主鍋島直茂歸化ノ韓人ヲ此ニ移シ
 陶業ヲ起サシム是高麗燒ト呼フモノ、始メニシテ世ノ稱スル所
 ト爲ル後有田ノ法ニ倣ヒ分窯シテ磁器ヲ製スト云
 全郡有田郷曲川村南河原窯ハ永正年間伊勢ノ人五郎太補祥瑞(字
 ハ玩)支那國ヨリ歸航シ南河原ノ乱橋ニ陶窯ヲ開ク其傳遂ニ絶ヘ
 吳洲權兵衛之ヲ再興スト然レモ今土人ノ口碑ニ存スルモノニシ
 テ更冊ノ之ヲ徵ス可キナシ慶長間國主鍋嶋直茂歸化韓人ノ多久
 ノ地ニ在ルモノヲ此ニ移シ陶業ヲ起サシム當時移住スルモノ六
 人李三平亦此中ニ在リ是ヲ高麗燒ト稱ス元和間酒井田柿右衛門
 ト云モノアリ筑前國那珂郡博多辻堂町承天寺ノ僧某ノ紹介ヲ得
 豐臣ノ臣高原五郎七ヲ聘シ南京燒ノ法ヲ受ク然レモ之ニ適スル

原石ヲ得ス蓋シ當時陶質ナル吳洲様ノ器ヲ製スルナリ李參平ノ
 泉山ニ瓦土ヲ發見スルヤ柿右衛門率先シテ磁器ノ製造ニ着手ス
 是ヲ白手燒(磁器)ノ嚆矢トス是ヨリ磁業大ニ擴マリ有田皿山外尾
 山黒牟田山應法山廣瀬山大川内山木原山江永山三川内山等ニ傳
 播スト云
 酒井田澁之助ノ祖先ハ即柿右衛門ナリ正保三年伊万里ノ人東島
 徳左衛門ト云フモノアリ柿右衛門ニ謀リ長崎ニ赴キ支那來舶ノ
 總官ニ就キ金彩ノ法ヲ傳ヘントス總官亦給ノ法ヲ傳ヘテ金銀彩
 ノ法ヲ授ケス初メ柿右衛門赤繪傳習料トシテ總官ニ銀錢十枚ヲ
 贈レリ此ニ至ツテ大ニ憤リ苦心遂ニ其法ヲ發明ス于時加賀ノ國
 主前田筑前守之ヲ聞キ大ニ賞シ柿右衛門ヲ引見ス二代柿右衛門
 ノ時前田氏出入ノ一商橋市郎兵衛來ツテ製器ヲ購ヒ遂ニ恒例ト
 爲ルニ至レリ爾後製器ヲ長崎ニ出シ支那商關商ニ鬻ク是ヲ彩畫

磁器通商ノ濫觴トス貞享二年國主鍋島氏柿右衛門ニ濬用品ノ調製ヲ命シ明治初年ニ至テ罷ム酒井田ノ家十一代ニ至ルマテ皆柿右衛門ト稱シ製器ニ柿右衛門ノ五字ヲ印セリ今工澁之助ハ十二代ノ孫ナリ現今造坏ノ工ヲ休シ單ニ彩畫工ト爲ルト云藤仲助元和年間其祖立林甚之允高原五郎七ニ南京磁法ヲ學ヒ開業ス文久中氏ヲ改メテ藤トス今工ニ至テ十一代ト云樋口太平元和中其祖磁業ヲ高原五郎七ニ學ヒ窯ヲ開キ今ニ至ルト云

今岳

全郡今岳村ハ陶窯アルナシ陶畫工中原要ハ一種ノ墨華磁器ヲ製出ス此畫法タル明治三年ニ創意シ黒料ヲ求ムルニ奔走シテ試驗ヲ費スニ初メ赤色茶褐色ヲ發シ之ヲ再燒スレハ黃色灰色ニ變シ又他ヲ試ムレハ草色ヲ爲シ刻苦スルナシ十三年明治十五年ニ及シテ尙未タ成ラヌ一日礫石鎔解ノ際誤テ硫砒ニ觸レ遂ニ一眼ヲ

志田

盲ス而シテ尙ホ廢セズ家産ヲ盡シテ資本ニ充テ全十七年ニ至テ始メテ其製ヲ得ルニ至レリト云全國藤津郡久間村ノ志田窯ハ創始詳カナラスト雖正口碑ニ傳ル所ハ歸化ノ韓人來リ陶スルニ擬ルト云寛永間陶業衰頽ス時ニ蓮池藩主鍋島直澄致仕シテ鹽田郷五丁田村ニ居ル陶場ニ來ツテ其衰狀ヲ憫ニ數窯ヲ築キ再興セシム(當時ノ製造磁器皿鉢ノ二品ニ限ル)其地不便アルヲ以テ後西山ニ移窯セリ天保中阪路閉塞シ陶業再ヒ衰フ時ニ浦川與右衛門ト云モノアリ(今工貞壽ノ父)奮勵回復ヲ謀ル藩主鍋島直興資ヲ貸シ材木ヲ給スルヲ以テ遂ニ回復ヲ得世上與右衛門燒ノ名ヲ傳フルニ至ル本村ノ工人ハ原石ヲ肥後國天草郡深江小砂床(一)ニ曰ク小田床(二)等ニ取リ土ヲ杵島郡的野ニ取ルト云全村藤原ノ地ニ一窯アリ藤原窯ト云明治ノ初メ士族中島信成村

藤原

民ニ陶業擴張ノコトヲ説キ自カラ起業ノ事務ヲ取ル干時本村金割
 ニ原石ヲ發見ス是ニ於テ明治三年同志數名ヲ募リ陶窯ヲ築ク之
 ナ藤原窯ノ創始トス然レモ資金乏キヲ以テ同志者休業ヲ謀ル信
 成聽カス遂ニ窯床數個ヲ増築シ始メテ就産ノ功ヲ奏ス明治五年
 信成病没シ十三年相謀ツテ熊山陶器社ヲ設立スト云
 全郡吉田村皿山ノ創始ハ寛永年間蓮池藩主鍋島直澄ノ五丁田村
 ニ退隱スルニ當リ曲川村南河原ヨリ韓人ヲ徵シ本村皿屋ニ築窯
 シテ飲食器ヲ製セシメ韓人氏ヲ副島ト改メ名ヲ雲谷ト云フト土
 人ヲシテ就學セシム後陶家ヲ定メテ十八月トシ一人ヲ増ストテ
 禁ス干時茂右衛門ト云モノアリ(今工副島次作ノ祖)本村梨ノ木田
 ニ陶土ヲ發見ス直澄命シテ十八戸ノ用土トシ又他郷ヲ許サズ雲
 谷ハ創業者タルヲ以テ十八名外ニ於テ別ニ坑區ヲ與ヘ陶窯水碓
 ナ賜ヒ茂右衛門ニハ藩用ノ諸器調成ヲ命セリ本村ノ陶業是ニ於

吉田

テヤ起ル元文中副島次郎兵衛(雲谷三代ノ孫)天草石ヲ購求シテ梨
 木田ノ土ニ和シ良質ヲ得タリ(今尙此法ニ據ル)爾後盛衰アリ天保
 中副島金幸(雲谷)後今工利三郎ノ祖父窯積ミノ法ヲ改メ一重平
 面積ヲ廢シテ天秤積トナシ遂ニ伽藍積トナシ衆工皆之ニ倣フト
 云フ
 副島利三郎ハ雲谷ノ後ナリ明治十一年本郡岩屋川内村大黒山ニ
 陶土ヲ檢出ス其質天草ノ産ニ類ス因テ借區開坑ノ許シテ得テ之
 ナ取り梨木田ノ土ニ調和シ遠キ天草ノモノヲ用サス全十三年舊
 蓮池藩士族利三郎ト謀リ精成社ヲ創立ス是ヨリ先キ本村ノ製器
 ハ食椀ヲ製スルニ止リ五寸以上ノ器皿ハ製造ヲ禁スル制アリ精
 成社設立ノ後有田ノ工人ヲ雇使シ始メテ三尺以下ノ平鉢ヲ製ス
 ルニ至レリト云
 副島麟藏ノ祖先ヲ惣左衛門ト云寛永中ヨリ營業ス舊有田ノ工人

ナリト云
 牟田源吉ノ先人ハ備前岡山ノ人ニシテ八潮傳右衛門ト云土器ニ
 長セリ正保慶安間蓮池藩主召シテ蓮池ニ居ラシメ後本村大黒ノ
 地ヲ與ヘ其土ヲ取テ茶器花瓶偶像ヲ製ス藩主命シテ牟田ト改メ
 シム今工尙ホ其製器ヲ藏スト云
 副島次作ハ茂右衛門八代ノ孫ナリ其父茂右衛門青華器ニ巧ニシ
 テ支那ヲ摸シ又本邦ノ淡華磁器ヲ製シテ長崎ニ致シ支那來舶商
 ニ販賣シ天保間ニ在テハ茂右衛門ノ製器本邦ニ播シ堅實ノ名ヲ
 得タリ藩主親カラ雲月ノ二字ヲ書シテ之ニ與フ是ヨリ製品ニ雲
 月ノ記銘ヲ爲スト云
 全郡下宿村内野窯陶業ノ創起ハ唯韓人ノ傳ト云フニ止リ憑証ナ
 シ文政中ヨリ漸ク衰ヘ明和ノ初メ既ニ廢絶ニ歸セントモ有
 志者繼ニ繼續ス畢竟土砂ニ乏ク皆他ニ仰クヲ以テナリ近來原土

下宿

八本木

ヲ天草五島對馬ニ取ル十七年一月始メテ全業組合ヲ立テ協カス
 ルヲ以テ稍回復ヲ致セリト云
 全郡八本木村ノ濱山窯ハ其創始ヲ詳ニセズ士族岩永幸一ハ文久
 二年業ヲ繼キ楠田與兵衛ハ元治元年ノ創業ナリ共ニ天草郡深江
 ノ原石ヲ用ウト
 全郡古枝村ノ久保山窯ハ全村士族小野武則村中ノ同志ト謀リ明
 治十二年六月新窯ヲ築キ隣村八本木ノ工人ヲ雇ヒ開業ス是ヲ本
 村磁器ノ創始トス其原土ハ天草郡深江ニ取ルト云
 全國杵島郡小田志村陶業ノ創起ハ實ニ慶長年間トス國主鍋島直
 茂歸化ノ韓人ヲ各所ニ配置ス本村亦白木原及ヒ瓶屋ニ築窯シテ
 埴埴ヲ爲ス古述今尙ホ存ス(高麗舞山上ニ方二間餘ノ平石アリ韓
 人遊眺ノ地ト云)隣村袴野ノ韓人モ亦共ニ製セリト願フニ當時製
 スル所ハ皆陶質ニシテ後百九十年間多少ノ盛衰アルモ其業聯綿

古枝

小田志

繼續ス享保中村内弓野山ニハ既ニ磁器ノ製造アリ蓋シ志田ノ工
 ナ傳フルナリ當時之ヲ南京燒ト呼ヒ陶器ヲ指シテ並物ト稱セリ
 干時淵孫左衛門ト云モノアリ本窯弓野兩地ノ工ヲ幹ス其子七右
 衛門陶器及ヒ陶瓦ヲ製セリ又溝口市兵衛高町藤兵衛ト磁器ノ製
 造ヲ圖ルモ好果ヲ得ス且近傍諸山相支吾シ事速ニ成ラス小田志
 窯ハ藩用ノ諸器ヲ調成スルヲ以テ文化元年遂ニ製磁ノ准許ヲ得
 陶磁器ヲ併製スルモ後恭維シ僅カニ兩三家ノ故業ヲ存スルアル
 ニ至ル文政十年樋口親治淵常方等新窯ヲ築キ(今ノ本窯)其業ヲ復
 ヲ藩主親治ニ藩用磁器調製ヲ命ス既ニシテ親治業ヲ季弟治孝ニ
 ニ譲リ常方ヲシテ代ツテ藩命ヲ聞カシム治孝頗ル巧手ノ名アリ
 常方ニ議シテ大ニ販路ヲ擴張シ明治四年常方治孝及樋口親吉等
 相謀リテ新窯ヲ築カントス藩主鍋島義昌築窯ヲ命ス之ヲ古登リ
 ト云(文化文政間ノ古窯趾ニ築ク當時濫リニ築窯ヲ禁ス因テ藩築

古窯ヲ與ヘテ改築ヲ名トス故ニ此稱アリ)明治七年松尾喜三郎
 カ型繪ノ法ヲ案出スル以來諸工多ク此法ヲ用サテ盛ニニ製造ス
 是ヲ小田志窯ノ沿革トス其地ノ工人原石ヲ天草ノ小田床ニ購ヒ
 本郡神六村ノ土ヲ調和シテ坯料ニ充ツト云
 松尾喜三郎ハ幼ニシテ樋口治孝ニ從ヒ造坯着書ヲ研究スルコト
 有九年歳三十ニシテ父業ヲ繼ク後販商トナリ明治二年又前業ヲ
 復ス是ヨリ先キ慶應元年筑後國西牟田村ニ産スル鹿角製駄馬ノ
 尾懸ケニ換ルニ磁製ヲ以テシ廉價ナラシメシテ圖リ明治元年
 竣功ヲ得タリ爾來之ヲ用ウルモイ甚ク多ク隨テ全業皆之ヲ摸製
 スルニ至ル明治五年陶窯築造土ノ粗惡ニシテ高度ノ熱ニ勝ヘサ
 ルカ爲メニ一山ノ衰頽ヲ來スヲ憂ヒ辛苦土塊ヲ蒐集シテ數十回
 ノ試験ヲ施シ藤津郡下宿村ニ適土ヲ得其用法ヲ工未ダテ遂ニ築
 窯ノ資ト爲スニ至リ又窯床ノ地砂ヲ天草ニ取ルヲ憂ヒ且天草土

ノ漸ク粗悪コ及フナ憤リ數十百種ノ土砂ヲ試験シ藤津郡内野村ノ土ヲ以テ換用スルニ至ラシメ一山ニ便利ヲ與ヘ明治七年型繪ノ工ヲ案出シテ頻リニ苦心シ九年遂ニ成功ヲ得ルモ忽チ他ノ摸造ニ遭ヒ大ニ世ニ傳播セリ喜三郎能ク此ノ如ク一村ノ利益ニ汲々タルハ天稟ノ然カラシムル所ト雖モ蓋シ亦其師治者薫陶ノ善ナルニ因ル

樋口平兵衛ノ父忠左衛門曾テ淵常方ニ就テ陶法ヲ修ムル二十餘年常方業務ノ繁劇ニヨリ天保ノ末年藩命ノ製造ヲ忠左ニ托ス忠左代リ製スルト十余年嘉永ノ末年藩主邸外ノ郭門内ニ陶磁窯ヲ新築シ忠左ヲシテ統督セシム其窯ノ製器ハ皆忠左ノ手ニ成ルモノトス慶應二年十一月忠左常方ノ後ヲ承ク忠左身老ヒ平兵衛之ニ代リ後全業相議シテ新式ノ本窯ヲ築ク是ヲ東窯ト稱スト云全都蘆原村ノ地タル田園少ナクシテ民戸多キヲ以テ工トナリ商

蘆原

白壁

トナリ家ニ就テ業ヲ營ムナキニ苦ムモノ夥多ナリ明治十四年深川龜三久保忠造田中民助相謀リ久間村志田窯ノ工人中ヨリ老鍊者ヲ雇ヒ教員トシ陶窯ヲ築キテ業ニ就ク是ヲ成瀬窯ト云其原土ハ天草深江村及小砂床村ニ取リ本郡眞手野村ノ石ヲ調和セリ全國養父郡白壁村皿山ハ山間僻在ノ地タリ本村陶業ノ創起未タ詳カニスル能ハス枅谷判平佐藤半七ハ寛政二年ニ開窯シ士族武富眞胤ハ文政中ニ起業ス并ニ天草ノ石ヲ購ヒ本村明神山ノモノト合和スト云協力會社ハ明治十六年四月ノ創起トス初メ田中英一ト云モノアリ隣地皿山所用ノ土質粗悪ニシテ良器ヲ製スル能ハサルヲ以テ良土ヲ搜索スルト二年明治七年全郡立石村内野山ノ磁料ヲ得天草石ニ調和シテ製造ヲ起セリ然レモ獨力事ヲ爲ス能ハス遂ニ結社ニ至リシト云

此他本縣下ニ在テハ藤津郡五町田村美濃山ニ磁器窯ニアリ杵島
村上之分ニ三四窯アルモ出品ナキヲ以テ創起沿革ヲ詳ニスル
能ハス

第三十三 熊本縣

肥後國玉名郡南關町ノ砂器ハ韓傳ニシテ元ト小代山ノ麓ニ創起
ス文祿征韓ノ役加藤清正凱旋ノ時韓工二人ヲ以テ歸リ小代山麓
ニ居リ製陶セシム寛文九年細川忠利封ニ入り之ニ若干ノ地ヲ與
ヘ毎年林木ヲ給シテ薪料ニ充テ製器ハ其父三齋(忠興退隱後ノ稱)
ノ茶寮ニ納レシム後人呼テ小代焼ト云フ此法今ニ傳ヘテ絶ヘス
今工野田又七ノ先人其窯ヲ南關町堀池園ニ移シ一ニ松風焼ト名
ケ肥後國産ノ一物ト爲リ八代焼ト共ニ世ニ行ルト云フ
全國天草郡本戸馬場村ノ砂器ハ明和二年岡部徳三ノ創始スル所
トス素質ハ全村ノ粘土八分ニ高濱村打粉(白石粉ナリ)三分ヲ調和

20

シ之ニ栗色ノ釉料ヲ裝過スルヲ常トス今工彌四郎ニ至リテ四代
ト云

全國八代郡豊原村ノ陶器ハ寛文九年細川忠利豊前ヨリ遷封ノ時
陶工上野喜藏長男忠兵衛三男藤四郎等忠利ノ父三齋忠興ニ從ヒ
來ル忠利命シテ八代郡高田郷下豊原村ニ居ラシメ地ヲ與ヘテ陶
器ヲ造ラシム是ヨリ先キ文祿元年加藤清正朝鮮ニ赴キ凱陣ノ時
韓人尊階(一ニ云ク釜山ノ城主尊益ノ子ナリト)ヲ將テ歸リ肥前唐
津ニ留寓中尊階歸韓シ陶法ヲ傳ヘテ復タ來ル忠興相拉シテ豊
前ニ入り上野村ニ陶セシム(福岡縣ノ項ニアリ)其轉封ニ至ツテ又
肥後ニ從フナリ喜藏ノ子忠兵衛家ヲ繼キ藤四郎ハ別居ス藤四郎
二子アリ次男太郎助分レテ一戸ヲ爲シ皆俸祿ヲ世襲シテ士籍ニ
入ル干今三家鼎立シ盛ノ業ヲ營ムト云其初代喜藏ノ製器タル
赤褐ニシテ紫ヲ帯ヒ緻密ナラサル坯質ニ或ハ青黃黒ノ垂下釉ヲ

施シ或ハ坏質薄ジシテ灰青ノ釉ヲ薄襲スルモノアリ皆茶壺茶碗
 ナリ垂下釉ノモノハ帖佐燒若クハ小代燒ニ類シ灰青釉ノモノハ
 近世ノ八代陶ニ類シ之ニ比スレハ堅實ニシテ釉色甚ク濃ナリ三
 種今罕ニ觀ル所トス
 上野庭三ハ喜藏八代ノ孫トス即初代ヲ喜藏ト云ヒ二代忠兵衛實
 蓋ト號シ三代忠兵衛一風ト號シ四代ヲ忠兵衛五代ヲ忠藏六代ヲ
 忠兵衛ト云フ七代才兵衛後子洲三ト改メ今退隱シテ二代ノ號ヲ
 用キ實蓋ト稱ス庭三ハ其子ナリ
 上野治郎吉ハ喜藏第三子藤四郎ノ家ナリ四代藤四郎ニ至ツテ窯
 ノ構造ヲ改良シ黑白嵌土ノ法ヲ案出ス此時ニ於テハ釉法モ亦今
 ノ紫膠色ニ改マリシヲ知ル可シ今工ノ父ヲ東四郎ト云フ頗ル巧
 手ナリ
 上野彌一郎ノ家ハ正徳六年三月喜藏第三子藤四郎ノ次男上野太

郎助分レテ一戸ヲ爲スコ起ル初代太郎助一種ノ白陶ヲ創製ス今
 其法ニ據テ製スルモノアルモ敢テ奇ト爲スコ足ラス二代太郎助
 國主ニ隨從シテ江戸ニ出テ樂燒ヲ修鍊スト云
 吉原二分造ハ七代上野洲三ノ門人ニシテ明治四年ニ就學シ全九
 年ニ卒業スト云フ此工ノ製品中嵌土ノ法ヲ用キス篋刻ヲナシテ
 稍趣ヲ殊ニスルモノアリ
 八代陶ノ原土ハ總テ六種即葦北郡白島村ノ白石全郡千小田村ノ
 鼠土八代郡奈良木村ノ黄土全郡豊原村黒土赤土宇土郡松山村ノ
 灰色土ヲ用ヰ云
 全國葦北郡日奈久町村田英晤ハ明治十三年ニ開業ス原土ハ全村
 鳩山及ヒ全郡洲口村阪本ノモノヲ用ヰ其質略八代陶ニ類スルモ
 尙拙ナリ別ニ蟹爪釉ノ諸器ヲ製シ却テ觀ル可キモノアリトス
 全國球摩郡一勝地村右田忠吾ノ陶器ハ明和九年右田某ノ創製

係リ現今用ウル所ノ原料ハ砥石ノ粉末ニ粘土ヲ調和シ粗糙ノ日用器ヲ製セリ
全郡大村青木久米藏ハ文久三年全村ノ土ヲ取り試製シ初メ河砂ヲ混和セシモ完全ナラス後白砂ヲ和スルニ至ツテ稍良器ヲ得ルト云其製品ハ皆日用厨頭ノ雜器トス
全國宇土郡網田杜ノ磁器ハ寛政三年藩主細川某ノ創意ニヨリ肥前有田ノ工人ヲ備ヒ陶窯ヲ築キ工場ヲ建テ生徒ヲ募テ傳習セシム比年ニシテ精熟スルモノハ俸米ヲ與ヘテ從事セシメ遂ニ國産ノ一物ト爲シ幕府ニ進呈スルニ至ル令工士族田中榮、松村次三郎、平民長尾貞五郎、森本安次郎、西村太源次、中島新次郎、富永時太等ノ先ハ皆藝ニ傳習生徒タリシモノナリ製品ノ原石ハ全國葦北郡二見村白戸ノ産ヲ用ヰト云近來有田ノ土有田ノ製ニ彷彿タルモノアリ或ハ其土ヲ用ヰ其工ヲ雇フモ亦未ダ知ル可カラス

第三十四 宮崎縣

日向國北諸縣郡宮丸村寄留陶工李銀用ハ薩摩國日置郡苗代川村ノ平民ニシテ其先ハ文祿歸化ノ韓人ナリ舊藩制韓人ノ子孫ハ互ニ相嫁娶シテ他ニ交通セス且他國ニ出ルヲ許サズ明治四年以降始メテ國民同一ノ權理ヲ享有スルヲ得タリ
万延元年都城ノ領主島津久本廳下ニ陶業ヲ起サンコトヲ欲シ其臣長峯正員ヲ鹿兒島堅野ノ陶場ニ遣リ其陶法ヲ學ハシメ宮丸村ニ一窯ヲ開ク爾後隆替一ナラス近時又將ニ廢滅セントス李銀用薩摩ヨリ來リテ之ヲ支持シ傍ラ生徒ニ陶法ヲ授クト云フ而シテ製スル所ノ砂器ハ全村及ヒ樺山蓼地安久三村ノ土ヲ用ヰ砂ヲ全部西嶽村及ヒ鹿兒島縣贈啖郡財部郷今別府村ニ取り釉土ヲ全部鹿兒島郡下伊舖村ニ取ル火度緊急ニシテ農間ノ用器ヲ製スルニ適ス可シ

全國兒湯郡都農町士族鹽月米治ハ明治九年陶業傳習ノ爲メ東京
 内山下町勸業寮試驗場ニ入り、澳國傳石膏型ノ陶法ヲ學ブ十年一
 月該試驗場工部省工作分局ニ屬シ其六月廢テ全八月ヨリ江戸川
 製陶所ニ入り傳習ヲ畢ヘ陶工トナリ石膏型製造及ヒ彫刻陶磁ヲ
 專製ス全十六年七月歸縣シ陶主ヲ全郡川南村通山川北村茂生ニ
 取リ石羔型及ヒ手捏埴埴ヲ事トスト云

第三十五 鹿兒島縣

薩摩陶ハ多ク一系ニ出テ爾後各地ニ散在スルヲ以テ其傳統ヲ審
 カニセザレハ其陶法ノ異同ヲ明カニスルヲ能ハス既ニ工藝志料
 ニ創起沿革ノ畧ヲ載スルアリト雖モ未ダ明晰ナラサルカ如キヲ
 以テ其煩ヲ省ニス此ニ其傳系ヲ掲ケントス

抑薩摩陶器ノ史傳ニ於テハ先ツ島津義弘ヲ推シテ巨擘ト爲シ歸
 化ノ韓人芳仲朴平意ヲ以テ第二指ヲ屈セサルヲ得ス文祿元年豐

臣秀吉朝鮮ヲ伐ツ薩摩國主島津義弘之ニ赴ク其凱旋スルヤ韓人
 仲氏、李氏、朴氏、卞氏、姜氏、陳氏、鄭氏、車氏、林氏、白氏、朱氏、崔氏、沈氏、厲氏、
 金氏、何氏、丁氏等ノ若干名ヲ率ヒ歸リ鹿兒島ニ居ラシメ(後世此地
 ナ高麗町ト云フ)待遇甚々厚シ韓人芳仲ト云モノアリ相議シテ高
 麗傳ノ陶業ヲ開キ國産ト爲シ以テ恩ニ酬ヒントス文祿四年義弘
 大隅國始良郡帖佐ニ城キ其十二月居ヲ移ス乃チ芳仲等亦在シ居
 ナ與ヘテ陶業ニ就ガシメ芳仲ヲシテ統理セシム遂ニ帖佐郷鍋倉
 村御里(義弘居地ノ隣地ナリ今人呼テ古帖佐屋舖ト云)ニ築窯ス之
 ナ薩摩陶器開窯ノ初トス蓋シ慶長二年ノ頃ニ在ル可シ

芳仲製スル所ノ陶器ハ皆高麗傳ニシテ十八種ノ製法アリ義弘甚
 タ之ヲ嘉シ意匠ヲ助メテ茶器ヲ造ラシメ其最モ意ニ適スルモノ
 ナ舉ケテ自カラ捺印ス後世此器ヲ御判様ト稱ス又朝鮮ノ原土釉
 料及支那黃河ノ土或ハ釉料ヲ求メテ碗ヲ製ス之ヲ古帖佐ノ火計

ト稱ス其土釉チ外國ニ取リ韓人ヲシテ作ラ
 ノニ帖佐ノモノヲ用ヰルノ義ニ取ルト云
 慶長十三年義弘居城チ加治木ニ移スニ當リ其十一月芳仲ヲシテ
 加治木郷日本山村龍口ニ移居セシメ移居後帖佐窯ノ存廢詳ナラ
 ス陶窯チ築造シ以テ製陶ニ從事シ傍ラ工人ニ教ヘシム芳仲ノ男
 チ喜兵衛ト云フ義弘命シテ川原氏トス龍口ノ地ニ黒川ノ東岸
 ニ沿ヒ川原ニ瀕スルニ取ルト云是チ陶工川原氏ノ祖トナス元和
 間義弘逝スルノ後芳仲猶勉勵シ各種ノ陶器チ製シテ以テ工人ニ
 教ヘ國益チ計リ寛永十三年十月歳八十五ニシテ卒セリ
 島津某ノ加治木チ領スルヤ川原喜兵衛ノ男小右衛門チシテ山元
 ノ地ニ開窯セシム因テ山本氏チ與フ川原氏ハ二男藤兵衛ノ繼續
 スル所トナル是チ三代トス是ニ於テ芳仲ノ孫分レテ二家トナリ
 寛文四年川原山本共ニ全郡小山田村龍門司ニ移窯ス龍門司ハ龍

口ノ東北一里余ニアリ是ヨリ先キ小山田村ニ白石チ發見シ其質
 甚ク佳ナリ干時高崎(即龍門司)ノ豪農與一右衛門性陶器チ好ム遂
 ニ川原山本チ促シ經費ノ半チ補助シテ移窯セシメタリト近世山
 元ハ一戸チ存シ川原ハ繁榮シテ二十四戸ノ多キニ至レリト云
 藤兵衛三子アリ長チ源助ト云ヒ次チ十左衛門ト云十左衛門小山
 田村ニ分家ス其子十左衛門芳工ト號ス亦製陶ニ巧ナリ明和五年
 歳二十三ニシテ能ク時好ノ推遷チ考ヘ勉メテ改良チ企圖シ乃チ
 父ニ請ヒ鹿兒島堅野ノ陶場(藩窯)ニ赴キ河野仙右衛門ニ就テ陶法
 チ修ム居ルコト十二年業大ニ熟シ龍門司ニ歸リ祖先十八種ノ製法
 チ考究シ和土調釉チ試ミテ更ニ數種ノ法チ増加ス然レモ尙ホ小
 成ニ安ンセス安永八年三月領主島津久徴ニ請フテ肥前ニ赴ク久徴
 其篤志チ嘉シ特ニ銀壹貫目ヲ與フ十左衛門旅金ノ有餘チ得更ニ
 全業者ニ謀ツテ川原彌五助チ携ヘ五月ニ郷里チ出テ有田ニ至リ

磁器ノ法ヲ修メ六月歸郷シテ磁器ノ法ヲ開キ其名頼ニ傳フ寛政五年普ク諸國ノ陶場ヲ訪ヒ廣ク研究セムト欲シ旅行ヲ請フ事鹿兒島ニ聞エ國主與フルニ日當旅銀ヲ以テシ堅野ノ陶工星山忠兵衛ヲ隨ハシム六月途ニ上リ肥筑ノ諸窯ヲ訪ヒ長門ニ至リ備前ヲ經テ京ニ入リ當時ニ名アル金華山青木宗兵衛ニ到ツテ來意ヲ述フ宗兵衛曰ク先ツ諸窯ヲ訪ヒ歸途再ヒ來レ我レ教ユル所アリト因テ辭シテ尾張ニ出テ淹留數日御深井陶ノ法ヲ傳ヘ伊勢ヲ經テ復テ金華山ヲ訪テ宗兵衛京燒樂燒ノ法ヲ教フ翌年正月家ニ歸リ逾瓦器ヲ製シテ繁榮ヲ致セリ今傳マル所ノ飯燒ノ如キモ亦當時ノ新法ニ係ルト云

是ヨリ先キ慶長三年義弘歸化ノ韓人朴平意等ヲ分ツテ薩摩國日置郡串木野郷ニ移ラシム平意遂ニ下名村ニ築窯シ高麗傳ノ陶器ヲ製造ス全八年居テ伊集院郷苗代川村ニ移シ九年三月其地ニ築

窯ス是ニ於テ串木野ノ窯ハ廢絶ニ歸シタリ(今其古趾ヲ元壺屋ト云)當時製スル所ノモノモ亦芳仲所製ノ品ト大同小異ニシテ飴色黑色等ノ諸器アリ全十九年義弘平意ヲ召シ先導者ヲ隨ハシメ製陶原土ヲ國內ニ搜索ス平意左ノ數種ノ土石ヲ採テ復命ス

- 一薩摩國川邊郡加世田郷小湊村白砂
- 一全國全郡津貫村京ノ峯釉料石
- 一全國揖宿郡十二町内山白粘土
- 一全國全郡成川村白粘土
- 一全國全郡高野ニハテ白土
- 一全國全郡鹿籠村釉用楢木

義弘感賞シテ直ニ苗代川ニ製陶場ヲ建設シ平意ヲシテ陶器ヲ造ラシム器成ル義弘曰ク善ク熊川(朝鮮ノ地名)ノ製ニ似タリト是ヨリ平意陶場ヲ統理シ衆工ニ教テ義弘其男忠恒ト屢臨見シ意匠ヲ

貸シテ茶器ヲ造リ意ニ適スルモノニハ捺印スルコト帖佐ノ例ニ同
 シ(亦御判手ト稱セリ)園村遂ニ陶埴ニ從事ス是ヲ苗代川ノ創始ト
 ス工人ノ多數ハ歸化ノ韓人ニシテ爾後互ニ相婚嫁シ近年ニ至ッ
 テハ總數五百戸男女一千四百五十餘人ノ多キニ達シ苗代川ニ一
 部落ヲ爲スニ至レリ朴平意ハ寛永元年五月一日卒ス歳六十五子
 孫相繼キ今尙ホ陶業ニ從事ス而シテ代々平意ヲ以テ名トスルモ
 ノハ亦義弘ノ遺命ニ由リ祖先ノ功績ヲ後世ニ遺忘セシメサル爲
 メナリト
 義弘ノ陶工ヲ御スルヤ其技ノ巧拙ヲ檢シ其巧ナルモノニハ俸祿
 ヲ重クシ其拙ナルモノハ之ヲ輕クシ之ヲ視フ爾後世々此遺志ヲ
 繼キ褒貶スルヲ以テ大ニ陶工ノ勉強ヲ保シ多ク良工ヲ出セリト
 云
 苗代川ニ陶窯ヲ開クヤ歸化ノ韓人沈當吉(今工沈壽官ノ祖先)其技

巧ナルヲ以テ舉テ陶塲ノ主取(幹事部長等ニ當ル)トス其子當壽
 亦父ノ職ヲ襲ク當壽ノ子即チ三代當吉陶業精熟ナルヲ以テ藩主
 授クルニ陶一ノ名ヲ以テシ父ノ職ヲ襲ヒ世祿ヲ給セリ
 薩摩國鹿兒島郡堅野ノ陶塲ハ寛永年間ノ藩設ニ係ル明和中河野
 仙右衛門ト云モノアリ堅野ニ在リ最モ巧手ノ名アリ其製スル所
 ハ芳仲ノ遺法ニシテ白釉壘器及ヒ各色釉ノ器物ヲ製セリ
 寛政中國主島津齊宣堅野ノ工人ニ命シテ白陶壘器ニ金粉其他ノ
 雜彩ヲ用ヰテ巧ニ画紋ヲ描カシム之ヲ錦樣ト云フ世人甚々珍愛
 ス是ヨリ先キ帖佐ニ芳仲等ノ製スル壘器モ亦此錦樣アリ然レモ
 此時ノ巧ニ比スレハ甚々古朴ナルモノナリ天保十一年苗代川ノ
 陶工ニ朴正記ト云モノアリ其先歸化ノ韓人ナリ正記ノ男正官歳
 十六苗代川ニ錦樣ノ工ナキヲ歎シ其父ニ告テ自カラ之ニ當リ錦
 樣ヲ開カシコト乞フ正記之ヲ燒物奉行ニ告ク乃チ藩廳ニ稟シテ

錦様部ヲ置キ教授二人ヲ堅野ヨリ徵ス正官就テ學ヒ其法ヲ傳受
 藩廳教授ヲ召還シ弘化元年正官ヲ以テ錦様部ノ主取トス安政
 ノ初メ國主齊彬鹿兒島馬場清水町磯ノ邸地(田ノ浦)ニ陶場ヲ新建
 シ正官ヲ徵テ着画燒窯ヲ指揮ス正官刻苦一周年ニシテ創メテ齊
 彬ノ意ニ適スルモノヲ製出ス齊彬大ニ賞シテ苗代川ニ歸ス是ヨ
 リ苗代川ノ錦彩器大ニ進歩スト云
 以上述ル所ハ皆芳仲朴平意ヨリ傳統シ來ルモノニシテ二工ノ功
 績實ニ大ナリ然レモ二工ヲシテ其功績ヲ立テ其良法ヲ遺傳セシ
 ムルモノハ主トシテ國主ノ二工ヲ任用スル厚キト勸奨ノ周キト
 ニ因ル是國主義弘チ起業ノ巨擘ニ推ス所以ナリ但今工ニ連亘ス
 ル事項ハ今工ノ條ニ就テ觀ル可シ
 爰ニ此二工ノ傳統ニ據ラズシテ一種ノ器物ヲ製出スルモノアリ
 即チ今工清右衛門六代ノ祖ナル小野元立院是ナリ元立院ハ大隅

國始長郡帖佐郷西餘田村ノ修驗ナリ初メ元立坊ト云フ古陶器ヲ
 愛ス友人野田吉左衛門ニ謀ツテ陶場ヲ建テ國産陶器ノ衰頽ヲ興
 シテ肥前陶器ノ輸入ヲ減セントス野田之ニ應ス寛文元年十月銀
 生ヲ定メ職工ヲ求ム桑原郡山箇野鐵山ノ坑夫ニ北村傳左衛門ト
 云モノアリ周防ノ産ニシテ曾テ肥前皿山ノ陶工タリ元立院往テ
 伴ヒ歸リ試陶セシム良工ナリ遂ニ允許ヲ得テ陶場ヲ建テ磁器ヲ
 製ス藩廳其志ヲ嘉シテ銀三枚ヲ與ス大夫島津圖書使ヲ遣テ銀貳
 貫目ヲ與フ全三年十二月損益償ハス野田等退キ銀主モ亦去ル元
 立院奮然トシテ曰ク我業固ヨリ身ヲ潤スノ爲ニアラス今喪フ所
 ノモノハ皆我工人ノ有トナルナリ國ニ損スル所ナシト乃チ家産
 チ抛テ工場ニ致シ身ヲ挺テ、製陶ニ謂ラク磁器ノ原料ハ地阻リ
 テ運費甚ク多シ損益償ハサル原因ナリト遂ニ心ヲ陶器ニ傾ケ全
 五年三月製陶十二種ヲ國主ニ呈ス此年藩廳ヨリ命シテ燒物頭取

トス延寶八年燒物奉行伊藤伴五右衛門元立院ニ令シテ製造ヲ盛
 シニ他國ニ搬出スルニ至ラシム元立院製陶ヲ盛大ニス可キ要
 件八條ヲ記シテ許可ヲ請フ後チ藩廳陶器販賣所チ鹿兒島新橋ノ
 傍ニ新設シテ元立院ニ與フ亦其請ニ應スルナリ貞享元年以後年
 頭年末及國主東上毎ニ例シテ陶器ヲ獻セシム獻スル所ノ皿茶碗
 ハ十二束ヲ限トス(壹束二十個)是ヨリ陶業日ニ盛ンニ此ニ依テ生
 活スルモノ數十戸ノ多キニ至ルチ以テ郷内ノ公役チ免ス國人大
 ニ元立院ヲ愛シ之ヲ需用スルモノ多キチ加ヘ爲メニ他ノ輸入チ
 減スルヲ得タリ元祿十二年十二月元立院歲六十九ニシテ卒ス會
 テ其發明スル所ノモノハ黑褐釉ニシテ圓形ノ細裂アル砂器是ナ
 リ人呼テ元立燒ト云フ凡ソ芳仲朴平意ノ製器中其白釉黑褐釉ノ
 陶器ヲ除クノ外ハ多クハ砂器ノ一種ニシテ坯質甚タ堅實ナリ中
 ニ就テ茶褐釉上灰青色ノ凝釉斑々ナルモノアリ後世之チ蛇蝎(眞

謂ラシク元ト茶褐ナル可シ其蛇蝎ノ鱗ニ似タルチ以テ轉化シ來ル
 カト唱フ元立院亦之ヲ製ス世人或ハ誤テ古帖佐製ト爲スモノア
 リ然レモ其品格ニ至ツテハ元立ノモノ遙ニ劣レリト眞未タ元立
 院所製ノモノヲ觀ス其果シテ然ルヤ否チ知ラズ此窯其四代ニ至
 リテ大ニ衰ヘ五代ノ時小山田村龍門司即チ今工清右衛門ノ居地
 ニ移窯スト云
 是ヨリ今工ノ履歷ヲ述フ可シ

川原源助ハ大隅國姶良郡小山田村龍門司ニ住スル士族ニシテ世
 々陶業ヲ營ム即チ芳仲九代ノ孫ナリ廢藩以後一村ノ同業資金ノ
 缺乏ヲ致シ困弊管ナラス四十余ノ陶戶現時十六戸ニ至レリ明治
 十四年源助此同業者ト謀リ製品ヲ改良シ販路ヲ開キテ以テ親子
 離散ノ慘狀ニ陥ラサントス全業一モ否チ言フモノナシト雖モ
 亦奮勉ノ氣象ナク逾困ス後再次之ヲ議スルモ亦前日ノ如シ十五

年二月西京ノ陶家金華山青木宗兵衛此地ニ移住シ乃チ源助ノ説
 チ賛ケテ全業ニ論ス漸ク二三ノ賛成ヲ得ルモ亦唯若干品ヲ製シ
 テ源助ニ托ス可シト云フニ止マリ身ヲ起シテ販路ヲ求メントス
 ルモノナシ源助奮起シ自家ノ財産ヲ投シテ若干金ヲ得タリ時ニ
 加治木ノ商田中松右衛門ノ神戸ニ往クニ會シ實弟小野新助ヲ隨
 ハシム實ニ十六年三月ナリ新助陶器ノ鑿本ヲ携ヘ神戸ニ赴キ遂
 ニ外人ノ注文ヲ得又泉州堺及ヒ横濱港ニ販路ヲ開キ約チ堅クシ
 テ歸國ス是ヨリ先キ全業者源助ノ言ヲ信スルモノ少ナシ新助ノ
 書信及ヒ製品督促ノ書ヲ示スニ至リテ始テ悟リ手ヲ併セテ輸出
 品ヲ製スルヲ得今日ニ至リテハ全業間ノ疲困ヲ挽回スルノ期當
 ニ遠キニ非サル可シト云フ

青木宗兵衛ハ西京五條阪ノ陶家ニシテ三代金花山ト稱シ代々
 禁中ノ調度ヲ調製セリ明治二年宗兵衛薩摩鑿器ヲ製セリトナ思

ヒ其六月鹿兒島ニ到ル藩廳之ヲ備使シテ堅野及ヒ田ノ浦陶場ニ
 從事セシメ廢藩後尙ホ田ノ浦ニ在ルヲ六年明治八年二月米五十
 俵ヲ携ヘ陶工三人屬工二人ヲ率ヒテ大島ニ到リ窯ヲ大和濱ニ築
 キ製陶ス從來諸島需用ノ陶器ハ價直甚ク貴シ宗兵衛ノ製器ハ價
 廉ナルヲ以テ島民大ニ喜フ淹留一年工人ヲ留メテ去リ龍門司陶
 ノ改良ニ志シ川原源助ニ謀リテ十五年二月遂ニ小山田村ニ轉籍
 スト云

川原十左衛門亦龍門司ニ住スル士族ノ陶家ニシテ即チ十左衛門
 芳工ノ後トス(芳工ノ前ニ掲ク)

川原林太郎川原彌兵衛モ亦全地士族ノ陶家ナリ其先皆川原藤兵
 衛ノ子孫各分家スルモノナリ

小野清右衛門亦全地ノ陶家ニシテ元立院六代ノ孫ナリ(元立院ノ
 前ニ掲ク)

以上ノ工人ハ皆龍門司焼ト稱スル砂器ノ一種ヲ製セリ原土ハ其
 村鞍掛ノ粘土五分全郡西別府村飯森ノ黄土三分全村廣田ノ黒土
 竹子村舊極樂ノ赤土各一分ヲ和合シ釉料ハ全郡崎森村ノ砂土別
 府村及ヒ小山田村ノ土ヲ用ウト云
 沈壽官ハ苗代川ノ陶家コシテ歸化ノ韓人沈當吉十二代ノ孫ナリ
 (當吉ノ子前コ掲ク)安政四年藩設工場ノ工長ト爲リ數百名ノ陶工
 ナ督勵シテ日月盛昌ナルモ廢藩ノ令一タヒ出ルコ當ツテ忽チ廢
 場ニ歸シ尋テ會社ノ有トナルモ壽官尙ホ職ヲ工長ニ努ム明治六
 年會社瓦解コ際シテ數多ノ工人忽チ生計ノ途ヲ失ヒ疲困極ルコ
 至ル壽官茲ニ奮勵シ全年五月地ヲ苗代川藤ノ尾ニトシ陶窯ヲ築
 キテ獨立開業シ自カラ玉光山ト稱シ數多ノ工人ヲシテ業ニ就カ
 シム蓋シ壽官ノ意一ハ工人卒然ノ窮ヲ救ヒ一ハ著名ノ細壘陶ヲ
 再興シテ國益ヲ空フセス以テ舊藩主創意以來累代ノ恩徳ニ酬ン

トスルコアリ是ニ於テ數多ノ工人共ニ勉勵シ遂ニ良陶ヲ今日ニ
 再興シテ輸出ノ途ヲ開クニ至リシナリ壽官ノ功豈大ナランヤ
 其製品ノ原土ハ大隅國下桑原郡中津川村薩摩國下揖宿郡東方村
 全郡鳴川村ノ白土ヲ採リ釉料ハ全國下川邊郡加世田郷津貫村ノ
 石及ヒ全村小湊村ノ白砂ヲ用ウト此土石ノ大半ハ往時朴平意ノ
 發見ニ係ルモノナリ且ツ今古製スル所ノ細壘器ハ陶質ニシテ稍
 石器ニ近キモノトナ

國分八郎ハ鹿兒島長田町ニ住スル士族ナリ癸ニ十三歳ニシテ田
 ノ浦陶器會社ニ入り陶画ニ從事ス明治八年九月會社營業ヲ中止
 スルニ會シ尙陶器ノ販路ヲ求メテ長崎ニ出店セシモ十年西南ノ
 戰鬪ニ遭ヒ嫌疑ヲ受ケテ拘留セラレ、二十七日尋テ陸軍本病院
 ノ備トナリ又陸軍會計本部ニ奉仕シ遂ニ東京ニ出テ致仕ノ後徒
 過スル一三年全十四年歸縣シ画工伊澤鶴年ト共ニ霧島神社造營

ニ從事シ其十月再ヒ田ノ浦瀬島熊助所有地ノ陶器製造所ニ入り
 陶画ヲ描キ全十五年中電信局用ノ陶器ヲ創製スルニ石羔型ヲ用
 井サレハ成ラス百方苦慮シ逾製シテ逾粗ナリ九月ニ至ツテ遂ニ
 案出スルヲ得良陶ヲ製シテ送致シ爾後陸軍電信隊印刷局等ノ電
 氣用陶器ヲ製造シ今土砂精製ト形象注意ノ任ニ在リト云
 薩摩大隅兩國間磁器ノ製造ハ寛文二年小野元立院カ大隅國始良
 郡帖佐郷西餘田村ニ開窯スルヲ嚆矢トス事前段ニ述ス然レモ僅
 々二年ニシテ中廢シ後砂器ノ製造ニ改メタリ安永八年川原十左
 衛門芳工肥前傳ヲ以テ小山田村龍門司ニ磁器ヲ製スルモ亦遂ニ
 絶ユ今聯綿トシテ製磁ヲ業ト爲スモノハ獨リ天辰皿山ノ一所ア
 ルハ明治八年眞鹿兒高ニ巡廻ノ時一ノ藩窯ニ於テ青華稍鮮清
 ナルモ磁質甚ダ粗糙ニシテ釉色暗灰ヲ帶ルモノヲ觀タリ然レモ
 近來尙ホ製スルヤ否ヲ知ラズ天辰窯ハ薩摩國薩摩郡天辰村皿山

ニアリ原土ヲ肥後國天草郡小田床村ニ取ル初メ安永中全郡平佐
 郷白和町今井儀右衛門ト云モノ全國出水郡脇本村ニ磁器製造所
 ヲ設立シタルモ資力ノ及ハサルヲ以テ遂ニ失敗シ白和町ニ歸リ
 平佐郷ノ領主北郷某ノ吏人伊知地團右衛門ニ話ス團右衛門之ヲ
 領主ニ告ケ許可ヲ得テ有田ノ陶工ヲ備使シ天辰村ニ移窯シテ盛
 ノニ磁器ヲ製シ薩隅兩國ヨリ大島諸島及琉球ニ販賣ス明治二年
 封土奉還ノ際白和町渡邊七郎右衛門此業ヲ繼キ以テ今ニ至レリ
 從前ニ在テハ青磁、藍甲斑、蟲喰等ノ彩釉ヲ用井シモ今ハ唯日用粗
 雜ノ青華磁器ヲ製スルノミ
 全村士族柚木崎六兵衛ハ明治十一年全村中西十太郎所有ノ陶窯
 ヲ購ヒ開業ス此窯ハ十太郎カ明治七年ニ築ク所トス
 永井太左衛門ハ明治十六年士族瀬島熊助ニ陶法ヲ習ヒ以テ開業
 スト云

琉球國舊ト陶器ノ産出ナシ唯壺細工ト稱シテ土器ノ工人アルノ
 今全國泉崎村士族仲村渠致達ノ家記ヲ得テ稍其創始ヲ知ルヲ
 得タリ因テ之ヲ畧述ス
 初メ家崎村ニ仲村渠致元ト云モノアリ元祿十五年壺細工ト爲レ
 リ是ヨリ先キ本國那良ニ風呂藥家(藥鍋ノ)茶家(土瓶ノ)等ノ製
 アルモ皆土器ニシテ一ノ陶器ナシ致元心ヲ盡シテ其法ヲ研究シ
 享保八年遂ニ製造シ得テ之ヲ他ノ細工等ニ授ク是ヲ琉球製陶ノ
 創業トス是ヨリ國用大ニ廣マル
 享保九年十一月致元國命ヲ奉シテ八重山島ニ到リ島民數名ニ壺
 燒及ヒ上燒物ノ法ヲ授ク幸ニシテ島土ノ陶質ニ適フモノアリテ
 其陶那良ニ製スル所ト甚々異ナラス全十一年其製陶ヲ首府ニ
 送リ國王ノ一覽ニ供ス王其器ヲ書院ニ安置シ書ヲ賜フテ之ヲ褒

ス嶋民大ニ喜ビ又致元ノ歸府セシトテ恐レ尙ホ留ル一年ナルヨ
 テ首府ニ請ヒ准テ得タリ全十二年六月島民業熟スルヲ以テ那覇
 ニ歸リ製スル所ノ諸器ヲ王ニ獻ス王之ニ直上布二端ヲ賜ヒ其勞
 ヲ慰セリ

全十三年國命ヲ奉シ巢燒南京茶家香合花入等ヲ製シ之ヲ上ツル
 全十四年始メテ白燒物ヲ製シ之ヲ上ツル國中廣ク白燒ノ諸器ヲ
 用ウルコ是ニ創ル又從前ノ瓦控ハ燒瓦多ク歪破スルヲ以テ之ヲ
 改築シ壺控ノ狀ノ如クシ其火度等ヲ瓦工ニ授ク是ヨリ復々歪破
 スルモノナシ
 全十五年鹿兒島堅野ノ陶場ニ赴キ星山忠次林新右衛門ニ師事シ
 テ陶法ヲ受ク又通事ヲ携ヘテ苗代川ニ到リ薄龍官ニ就テ天水壺
 大鉢等ノ製法ヲ學ヒ十一月那覇ニ歸ル
 全十六年陶控ヲ古波藏村山野内ニ築ク一ニ薩州窯ニ法ル然リ而

テ其陶多ク良カラス百方苦慮遂ニ控内ニ段階ヲ構ヘ試焼スル
 果シテ良品ヲ得テ損壞アルコトナシ餘控皆此控法ヲ學フ
 全十八年大和(本朝ヲ指ス)御用ノ大花鉢ヲ製ス陶工原ト此製法ヲ
 知ラス致元之ヲ教ヘテ能ク製スルコトヲ得タリ
 寶曆二年九月二十四日國王致元ノ功ヲ追賞シ其五代ノ孫仲村渠
 爪親雲上ニ新家譜ヲ賜ヒ士籍ニ墜ス爪亦陶業ニ從事セリ
 天保十一年十月十五日家崎村三男仲村渠筑登之(仲村渠致真ノ子)
 ニ褒狀ヲ與フ天保九年致真自費ヲ以テ支那國福州ニ至リ厦門人
 趙世品ヲ七閱月間福州ニ聘シ彩色潘花ヲ傳習シ歸來大ニ製陶ノ
 進歩ヲ得タリ因テ此褒アリ
 致元以來ノ履歴大約此ノ如シ是ニ由テ之ヲ觀レハ初メ致元ノ研
 究シ得ル陶法モ蓋シ薩陶ノ製法ヲ探知スルモノニシテ其白燒ト
 稱スルモノハ即チ薩摩白釉ノ陶器壘器ニハアラスニ外ナラサル

可シ

琉球國那霸泉崎村陶工島袋常男ハ寛延元年四月業ヲ起ス原土ハ
 思納間切名護間切ノ産ヲ用井深綠色黒褐色ノ火度稍軟弱ナル器
 物及ヒ白釉微黃ヲ帶ヒタル器物ヲ製ス製品中内地ノ稱ト殊ナル
 名義ノモノ二三ヲ掲クレハ曰ク阿シ瓶ヒシ提梁アル水注ヒシ曰ク居瓶(火
 酒ヲ貯アル大口ノ壘ニシテ花瓶ニ用ウルヲ得ヘキモノ)曰ク耐家
 (細口ノ二升德利)曰ク湯酌チヤウ々家(銚子)即爛酒ヲ盛ル器曰ク茶家(土瓶)
 曰ク筭シユン塞シ汁アル菜ヲ盛ル可キ蓋ナキ大椀等ナリ

第三十七 札幌縣

後志國小樽郡土場町本多桂次郎ハ原ト尾張常滑村ノ陶家ニシテ
 幼ヨリ其父嘉十郎ニ從ヒ埏埴ニ從事ス安政五年幕命ヲ奉シテ函
 館港茂邊知村ニ移リ磁器製造ヲ試ムル丁三年土石適セス遂ニ素
 燒樂燒ヲ業トシ明治五年今ノ地ニ移リ用土ヲ搜索シ翌六年ヨリ

更ニ前業ヲ營ム其原土ハ全郡入船町ノ山中ナル淺碧色ノ土ヲ用
ウルト云

府縣陶器沿革陶工傳統誌 畢

正 誤

緒言一丁三行 興廢ノ二字愆

五 丁 三行 「サンドル、ヤ」「ハ」サンドリ。ヤ。」

六 丁 二行 製ルルハ製スル

十三丁 六行 王樹ハ玉樹

明治十九年六月廿五日出版屆

農務局
工務局

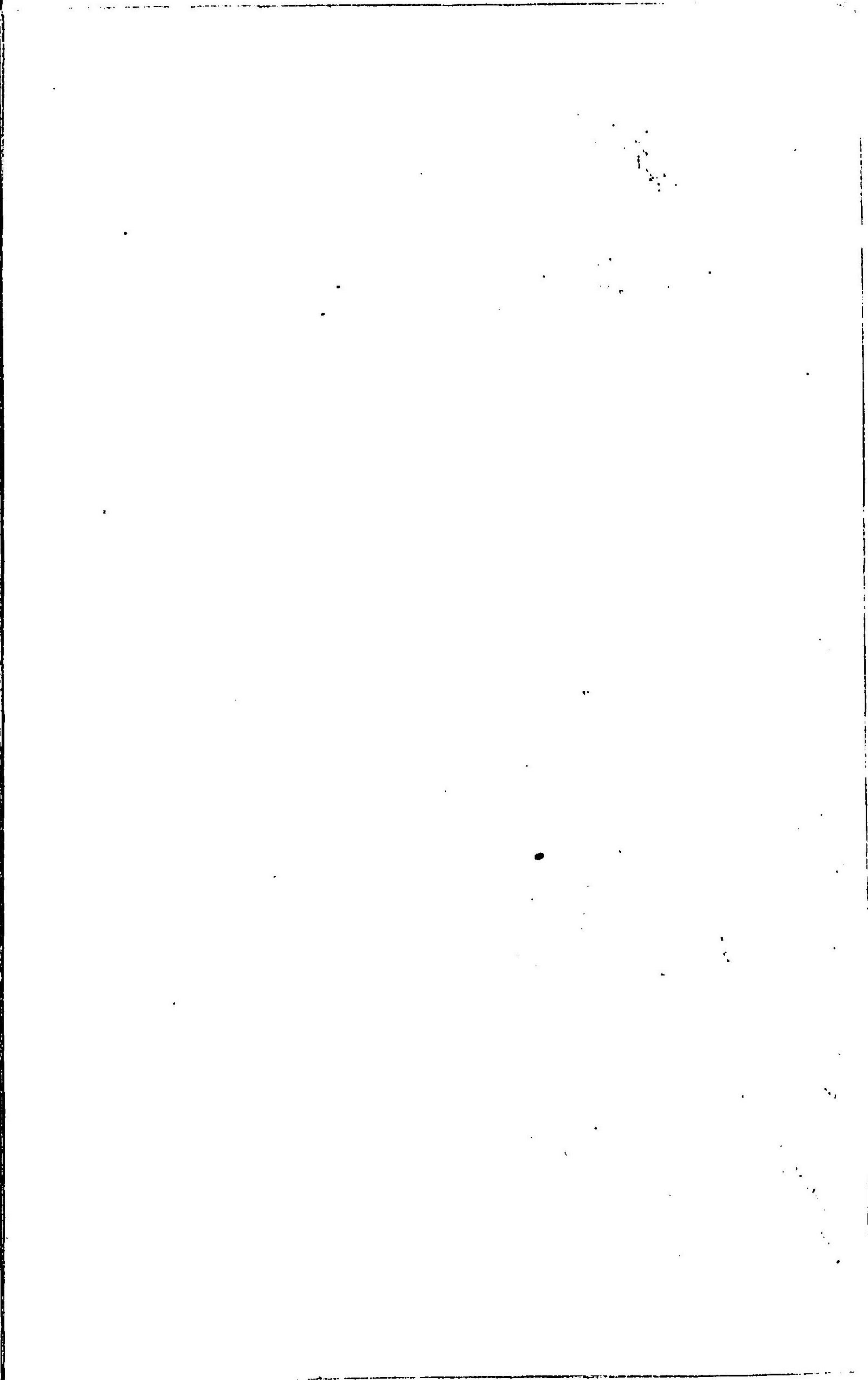
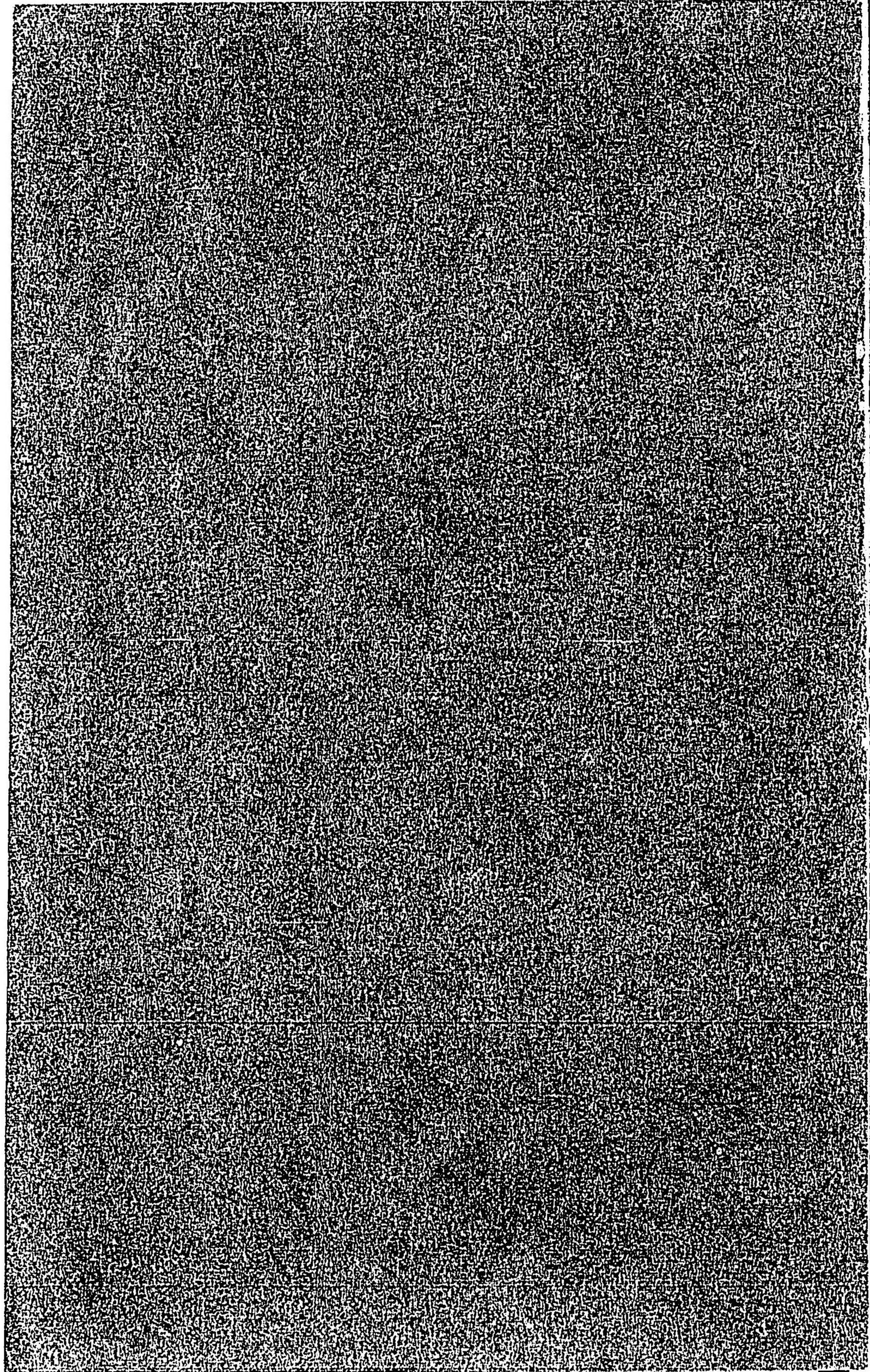
發兌

御用書肆
有隣堂

穴山篤太郎

東京橋區南傳馬町
二丁目十三番地

印刷有隣堂活版所



33

96